

布志名の大谷遺跡
布志名の大谷遺跡
布志名才の神遺跡

一般国道9号松江道路（西地区）建設
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4

1997年3月

江国道工事事務所
県教育委員会

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局から委託を受けて一般国道9号松江道路建設予定地内の発掘調査を行っております。平成5年度からは松江市乃木福富町から八束郡玉湯町にかけての調査を実施しています。

この報告書では、平成7年度に実施した、玉湯町布志名地区の大谷I遺跡、大谷II遺跡、才の神遺跡の調査成果をまとめています。これらの遺跡は、めのうの産地である花仙山の北麓に位置し、宍道湖に面した眺望絶佳の地に所在しており、周辺には玉作りに関係した遺跡が数多く残されています。また、この地域は江戸時代中期から現在に至るまで布志名焼（出雲焼、若山焼）と呼ばれる焼物が生産されていることで有名です。

布志名大谷II遺跡では、横口付炭窯と呼ばれる古墳時代後期の鉄生産用の炭窯が島根県で初めて見つかりました。不明な点の多かった古代出雲の鉄生産の始まりを考えるうえでの一つの手掛かりとなる資料と言えます。

布志名才の神遺跡の調査では、江戸時代から現代に至るまでの永きにわたる信仰の歴史を具体的に知ることができました。

本書が、宍道湖とそれを取り巻く豊かな自然と文化財への理解の手掛かりとして多少なりとも役立てば幸いと思います。

終わりに、発掘調査及び本書の刊行にあたって、御協力いただきました建設省中国地方建設局をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

島根県教育委員会

教育長 清原茂治

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路建設に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当松江道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに昭和50年度から発掘調査を行っています。

本報告書は平成7年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものあります。

本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待するとともに、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力頂いた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、深堪なる謝意を表するものであります。

平成9年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 大石龍太郎

例　　言

- 1 本書は、島根県教育委員会が、建設省中国地方建設局から委託を受けて平成7（1995）年度に実施した一般国道9号松江道路西地区の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に掲載した遺跡と地番は次の通りである。なお、本文中では大谷I遺跡、大谷II遺跡、才の神遺跡と表記する。

布志名大谷I遺跡	八束郡玉湯町布志名771-24
布志名大谷II遺跡	八束郡玉湯町布志名770-40
布志名才の神遺跡	八束郡玉湯町布志名771-45
- 3 調査組織は次の通りである。

調査主体	島根県教育委員会
事務局	文化財課 勝部 昭（課長） 森山洋光（課長補佐） 埋蔵文化財調査センター 宮道正年（センター長）、佐伯善治（同課長補佐） 瀧谷昌宏（同主事）
調査員	足立克己（調査第4係長）、柳浦俊一（同文化財保護主事）、日高淳（同教諭兼文化財保護主事）、山岡清志（同教諭兼文化財保護主事）、間野大丞（同主事）、横山純子（同臨時職員）、伊藤智（同）、梅木政志（同）、和田郁子（同）
調査指導	行田裕美（津山市教育委員会）、伊藤晴明（島根職業能力開発短大）、時枝克安（島根大学総合理工学部）
調査協力	土屋善四郎
- 4 発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、社団法人中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人	中国建設弘済会島根支部 布村幹夫（現場事務所長）、 勝部達也（技術員）、岩崎あき子（事務員）
------	---
- 5 挿図中の方位は、国土調査法による第III座標系の軸方位を示す。
- 6 本書に掲載した「遺跡地図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。また「調査区配置図」は松江圏都市計画図を使用した。
- 7 本書に掲載した遺物の整理、実測、図版の作成には調査員のほか以下の者が行った。

遺物整理	荒川裕美、川上登志江、藤原須美子、三上恭子、安井淳子、若佐裕子
報告書作成	伊藤善太郎、梅木茂雄、中濃郁、野津旭、原喜久子、舟木聰、松近正巳 (以上、調査補助員)、米田克彦（四国学院大学学生） 板垣見知子、佐々木京子、佐々木孝子、玉木順子、津森真弓、錦織美千恵、 山根るみ子、渡部恵子
- 8 本書に掲載した遺物の写真撮影は柳浦、間野が行った。
- 9 古銭の分類は永井久美男氏の協力を得た。
- 10 本書の執筆編集は文化財課職員の協力を受けて足立、柳浦、間野が分担して行った。文責は目次に明記した。
- 11 本書に掲載した図面、写真は島根県埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

目　　次

調査に至る経緯	（柳浦）	1
遺跡の位置と歴史的環境	（柳浦）	1
大谷I・II遺跡	（柳浦）	3
大谷II遺跡の横口式窯跡の地磁気年代	（時枝克安・成亨美・渡部道貴）	36
才の神遺跡	（柳浦・間野）	43

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第31図 大谷II遺跡1号窯出土土器	30
第2図 大谷I遺跡調査区配置図	6	第32図 大谷II遺跡1号窯	31
第3図 大谷I遺跡2号墳	7	第33図 大谷II遺跡2号窯土層および 窯跡縦断面図	33
第4図 大谷I遺跡2号墳主体部	7	第34図 大谷II遺跡出土土器	34
第5図 大谷I遺跡2A区遺構配置図	8	第35図 才の神遺跡調査前実測図	44
第6図 大谷I遺跡3号墳	9	第36図 才の神遺跡石積基壇立面図	45
第7図 大谷I遺跡3号墳主体部	10	第37図 才の神遺跡調査終了後測量図	45
第8図 大谷I遺跡4号墳	11	第38図 才の神遺跡石積基壇実測図	46
第9図 大谷I遺跡4号墳主体部	11	第39図 才の神遺跡遺物出土状態	47
第10図 大谷I遺跡SB01・02	12	第40図 才の神遺跡カワラケ(1)	49
第11図 大谷I遺跡SK06出土鉄鎌	13	第41図 才の神遺跡カワラケ(2)	50
第12図 大谷I遺跡2区土壙墓	14	第42図 才の神遺跡カワラケ(3)	51
第13図 大谷I遺跡2区土壙	15	第43図 才の神遺跡カワラケ(4)	52
第14図 大谷I遺跡2A区SX01	16	第44図 才の神遺跡カワラケ(5)	53
第15図 大谷I遺跡出土石器	17	第45図 才の神遺跡カワラケ(6)	54
第16図 大谷I遺跡出土石器	18	第46図 才の神遺跡カワラケ(7)	55
第17図 大谷I遺跡出土土器	19	第47図 才の神遺跡カワラケ(8)	55
第18図 大谷II遺跡調査区配置図	20	第48図 才の神遺跡古銭拓影(1)	57
第19図 大谷II遺跡測量図(調査前)	21	第49図 才の神遺跡古銭拓影(2)	58
第20図 大谷II遺跡1号墳地形測量図	22	第50図 才の神遺跡古銭拓影(3)	59
第21図 大谷II遺跡1号墳主体部	23	第51図 才の神遺跡古銭拓影(4)	60
第22図 大谷II遺跡2号墳地形測量図	24	第52図 才の神遺跡古銭拓影(5)	61
第23図 大谷II遺跡2号墳主体部	24	第53図 才の神遺跡基壇下土層堆積図	68
第24図 大谷II遺跡4号墳	25	第54図 才の神遺跡溝状遺構実測図	69
第25図 大谷II遺跡4号墳主体部	25		
第26図 大谷II遺跡窯跡遺構配置図	27		
第27図 大谷II遺跡1号窯	28		
第28図 大谷II遺跡1号窯土層図	29		
第29図 大谷II遺跡1号窯煙道	30		
第30図 大谷II遺跡1号窯煙道立面図	30		

調査に至る経緯

大谷 I 遺跡、大谷 II 遺跡、才の神遺跡は八束郡玉湯町布志名に所在する遺跡である。ここは従来は遺跡として認識されていなかったが、一般国道 9 号松江道路の建設に先立ち島根県教育委員会が分布調査を行ったところ、大谷 I 遺跡では古墳 1 基と平坦面が、大谷 II 遺跡では古墳状の高まりと平坦面が、才の神遺跡では石積遺構が確認され、調査を行うに至った。

発掘調査は大谷 I 遺跡が平成 7 年 5 月から開始し 10 月までのおよそ 5 カ月間を要した。大谷 II 遺跡は諸事情で調査開始が 11 月まで延びたこともあり、調査終了は翌年 2 月 6 日であった。一方、才の神遺跡も移転先の決定が遅れたことから調査開始が予定より大幅に遅れ、12 月から開始した。石積遺構の調査は約 1 ヶ月間で終了したが、その後下部で古代道に関連すると思われる遺構が検出され、最終的に調査が終了したのは 2 月 8 日であった。

遺跡の位置と歴史的環境

大谷 I 遺跡、大谷 II 遺跡、才の神遺跡は八束郡玉湯町布志名に所在する遺跡である。遺跡はいずれも玉湯町に位置する花仙山から派生し宍道湖に向かって延びる低丘陵上から裾にかけて立地している。

旧石器・縄文時代 現在のところ廻田遺跡、福富 I 遺跡などでナイフ形石器、尖頭器が出土し、松本古墳群などで縄文時代後期、晚期の土器や石器が出土している。また福富 I 遺跡や松本古墳群では落とし穴状土壙が検出されているが、集落等の遺構は未発見である。

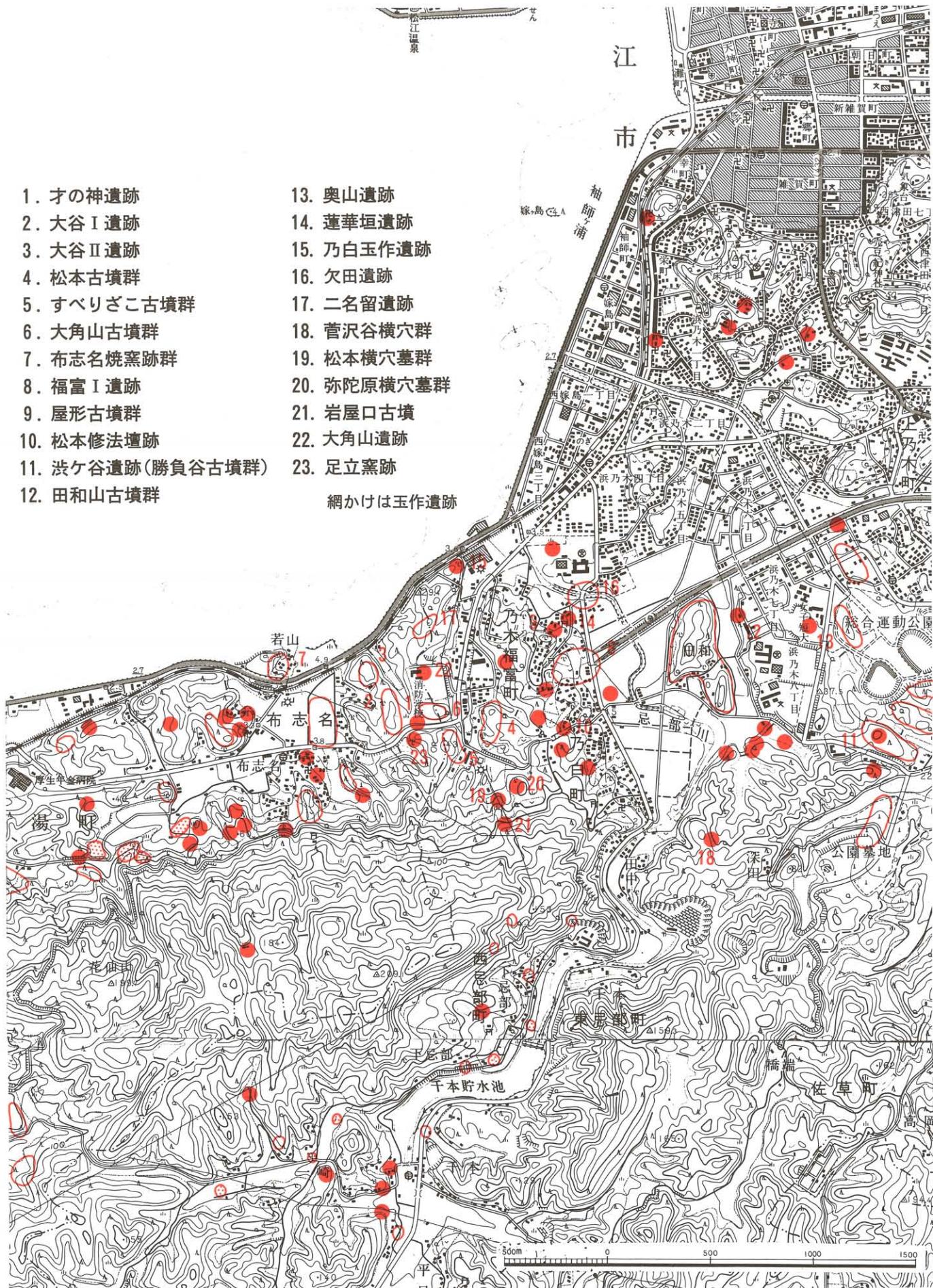
弥生時代 欠田遺跡が前期から後期にわたる遺跡として知られている。中期から後期にかけては友田遺跡で墳丘墓群、土壙墓群が築造されている。これは県内の弥生墳丘墓としては最古の部類に入るものである。また、福富 I 遺跡、廻田遺跡では後期の堅穴住居跡が検出されている。

古墳時代 前期古墳は今のところ発見されていない。中・後期古墳では前方後円墳である大角山 1 号墳、乃木二子塚古墳、田和山 1 号墳が突出した古墳として知られている。このほか周辺には小型の木棺直葬墳や横穴墓群が多数築かれている。生産遺跡としては花仙山を背景として玉作遺跡が多数分布している。このうち大角山遺跡、福富 I 遺跡では発掘調査が行われ、良好な玉作資料が得られている。また布志名大谷 I 遺跡では製鉄用炭窯といわれる横口付き炭窯が県内で初めて発見された。これについては本報告書であつかう。

歴史時代 『出雲国風土記』にはこの付近を「通道」が通っていたと記載され、松本古墳群では古代道の一部が確認されており、才の神遺跡でも古代道と関連すると思われる遺構が検出された。

1. 才の神遺跡
 2. 大谷Ⅰ遺跡
 3. 大谷Ⅱ遺跡
 4. 松本古墳群
 5. すべりざこ古墳群
 6. 大角山古墳群
 7. 布志名焼窯跡群
 8. 福富Ⅰ遺跡
 9. 屋形古墳群
 10. 松本修法壇跡
 11. 渋ヶ谷遺跡(勝負谷古墳群)
 12. 田和山古墳群
 13. 奥山遺跡
 14. 蓮華垣遺跡
 15. 乃白玉作遺跡
 16. 欠田遺跡
 17. 二名留遺跡
 18. 菅沢谷横穴群
 19. 松本横穴墓群
 20. 弥陀原横穴墓群
 21. 岩屋口古墳
 22. 大角山遺跡
 23. 足立窯跡

網かけは玉作遺跡



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

布志名大谷 I・II 遺跡

1. 大谷 I 遺跡

大谷 I 遺跡は南北に伸びる標高約35mの丘陵上に立地する。ここは地籍は八束郡玉湯町であるが、ほぼ松江市と八束郡玉湯町との境界にあたる。この丘陵は現在は県道浜乃木－湯町線に分断されているが、本来は花仙山から派生する丘陵の一部である。これはさらに北方に伸びて大谷 II 遺跡に続き、宍道湖および島根半島が一望できる丘陵である。

分布調査では丘陵上に人為的な平坦面が確認されたことから、本調査におよぶに至った。調査前の地形観察では、前述の平坦面はあるものの部分的に尾根がかなり狭隘な部分があり、地崩れ等によりかなり地形が変わっているように思われた。調査はトレンチを要所に入れ、遺構、遺物の有無を確認したうえで調査区を設定した。試掘調査の結果、3カ所で遺構が存在することを確認した。この結果を受けて1～3区の調査区を設定し調査を行った。発掘調査によって検出された遺構は古墳3基、掘立柱建物跡3棟、柵状の柱穴列1、土壙8などであった。古墳はいずれもほとんど盛土のないもので、切削溝を穿ち地山を削り出して墳丘とする古墳である。

なお調査区外であるが、この丘陵の南端では20m前後の方墳状の高まりが確認され、これを1号墳とした。また、1号墳の地点から西に分岐する丘陵上には10m前後の古墳が2基確認されている。

ここでは須恵器や石器が出土したものの、全体的に遺物の出土は少なかった。このなかでは細石刃核や剥片石器などの旧石器時代と思われる遺物が注目された。

第1区

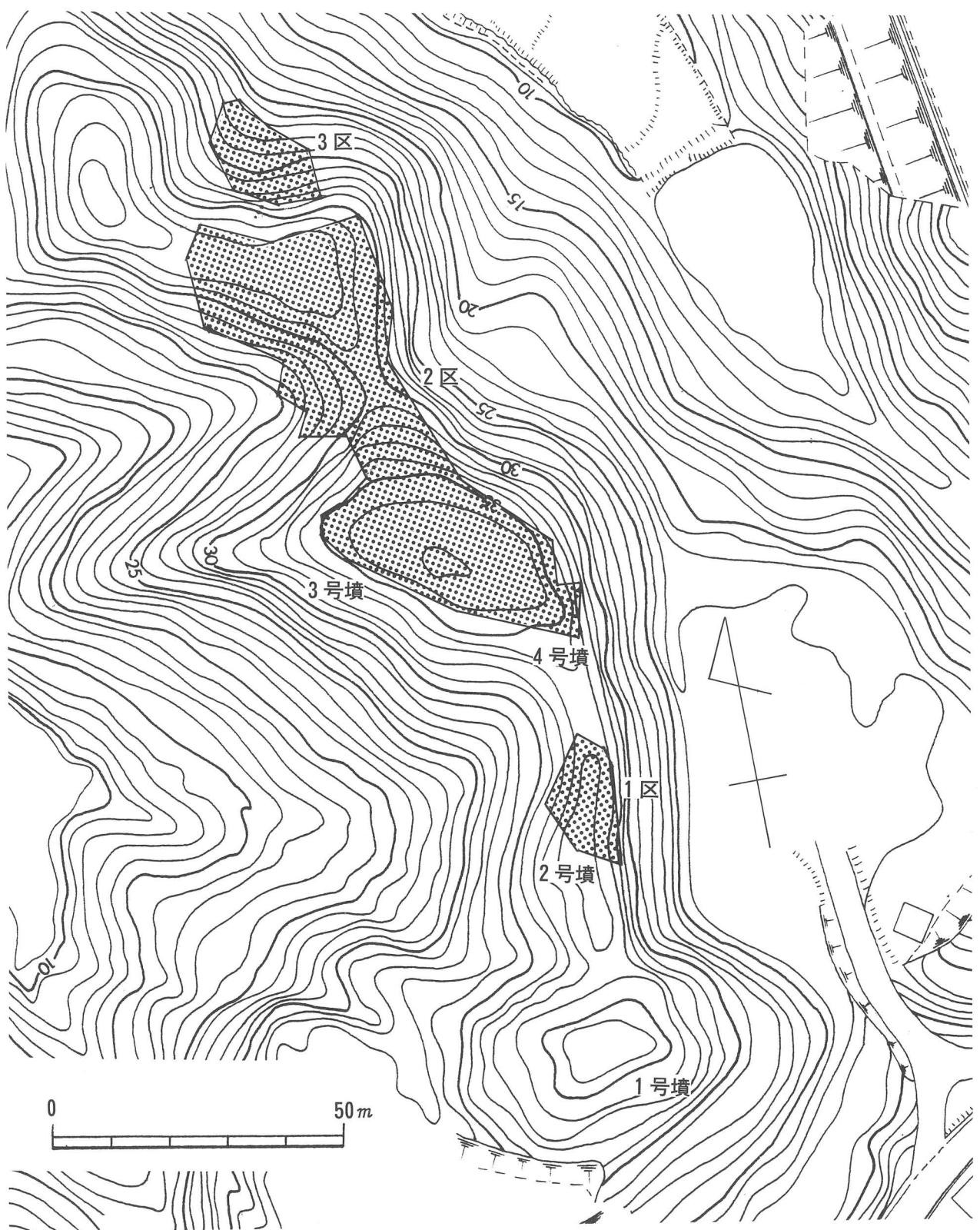
2号墳（第3図 図版1）丘陵頂部に切削溝を穿ち、墓域としている。墳丘は地山を削り出して作られているが不明瞭である。したがって墳丘の規模も明確ではなく、およそ8m程度の古墳といわざるをえない。切削溝は尾根筋に直交して穿たれており、幅2m、長さ7.4mを測り、切削溝の底から墳頂までの高さは約0.4mである。

主体部（第4図 図版2）は丘陵の先端に近い部分で検出された。平面形は長方形を呈し、主軸が尾根筋に直交するように配されている。長さ2.2m、幅1.4mとやや幅広の主体部である。検出できた深さは数cmと非常に浅いことから、墳丘は本来はもっと高かったものと考えられ、土砂の流失によって現状となったと思われる。

遺物はまったく出土しなかった。そのため2号墳の時期は明確ではないが、立地や墳形などから前期古墳の可能性は否定できない。

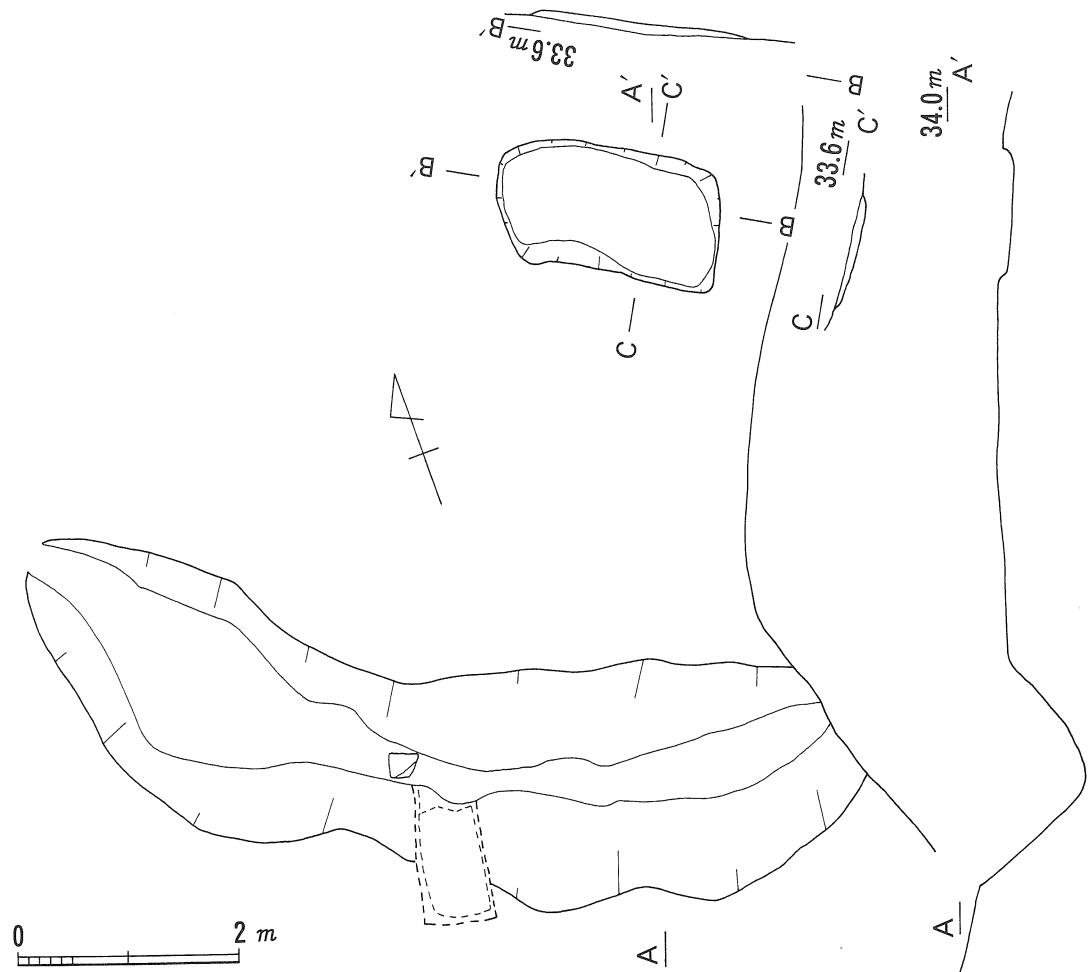
第2区（第5図 図版2）

丘陵のほぼ中央にあたる。ここでは頂部に古墳2基、掘立柱建物跡2棟、土壙8などが検出された。

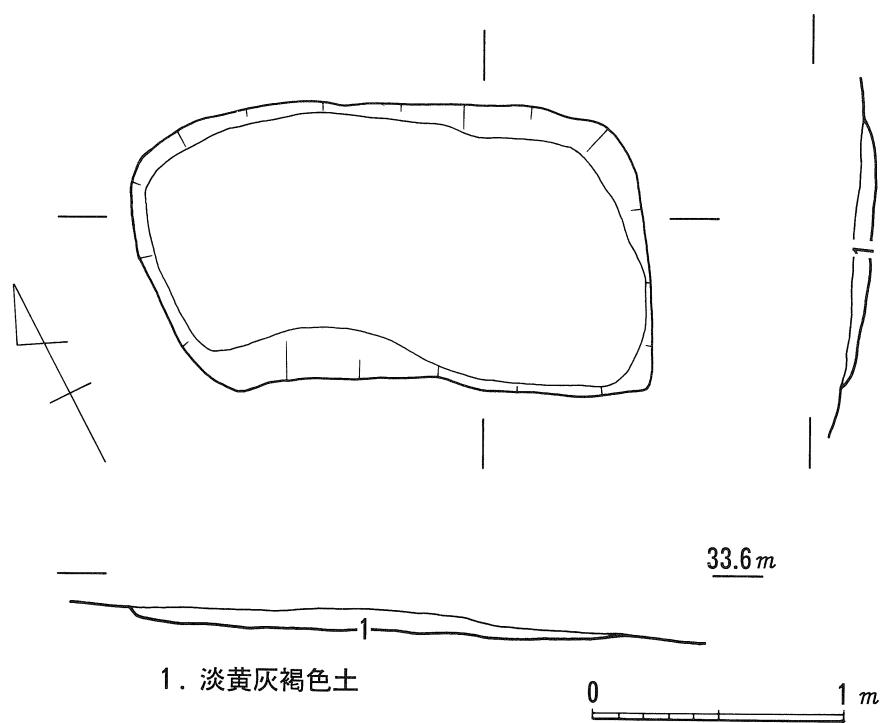


第2図 大谷I遺跡調査区配置図

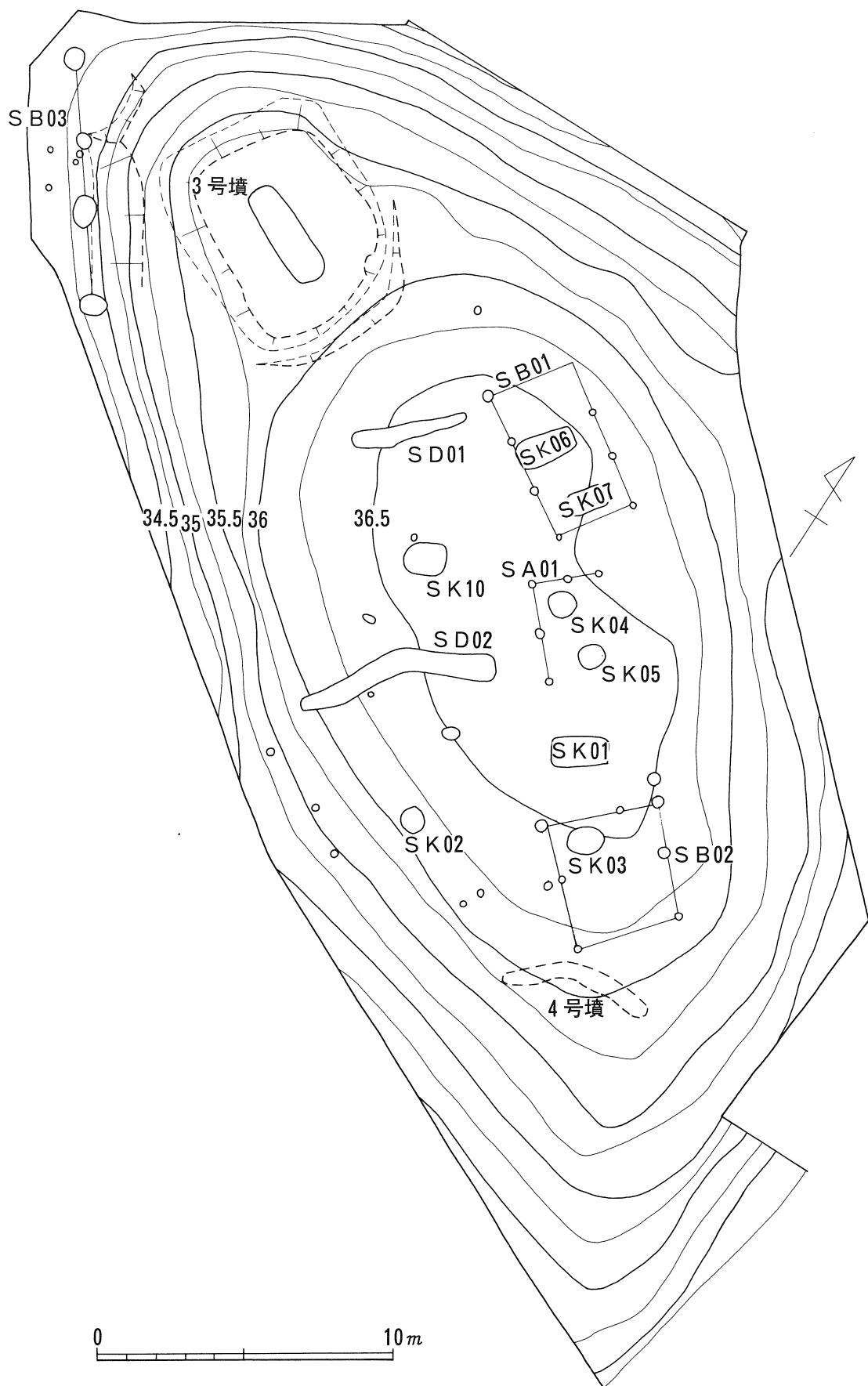
1 : 1,000



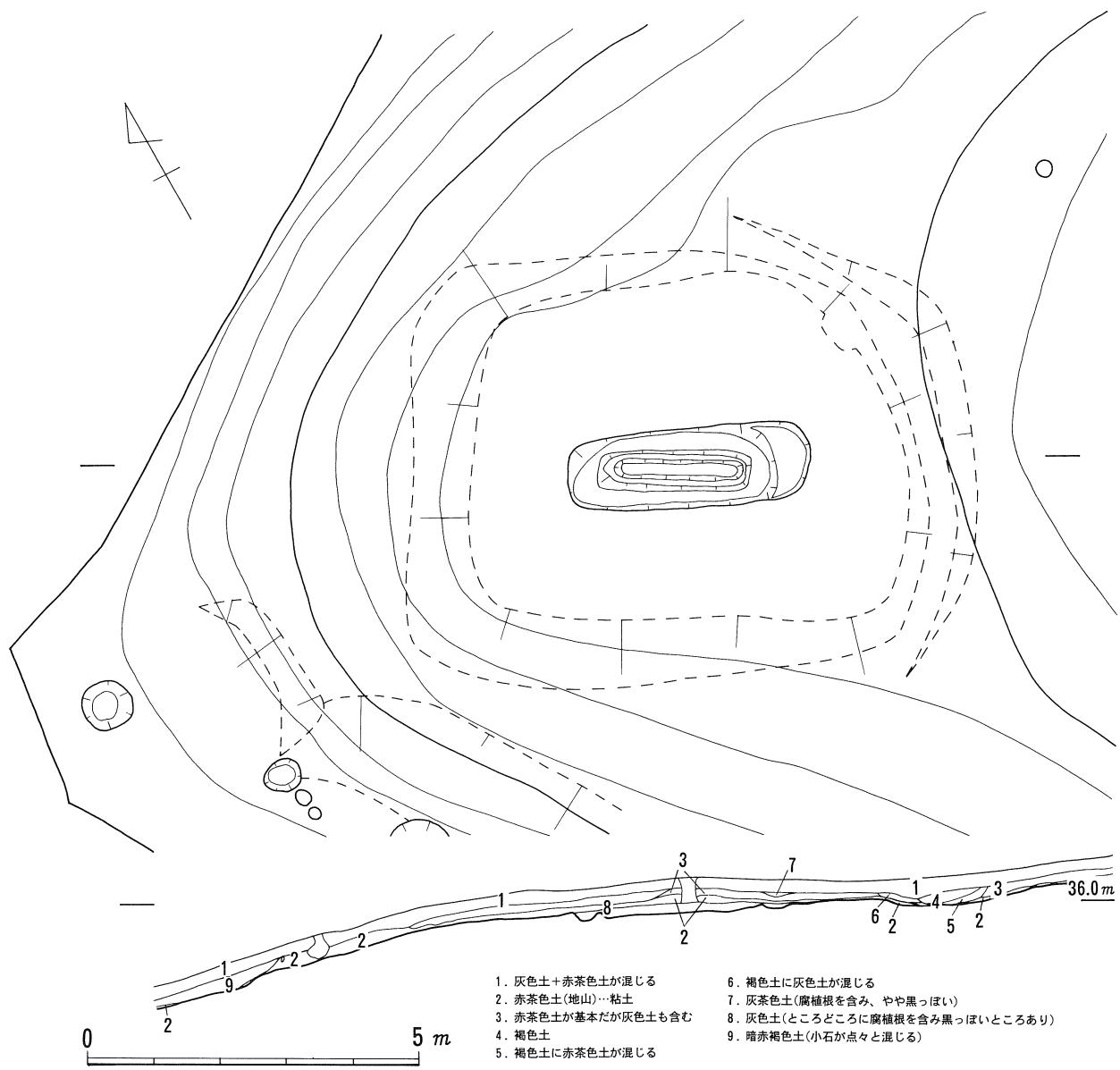
第3図 大谷I遺跡 2号墳



第4図 大谷I遺跡 2号墳主体部 1:30



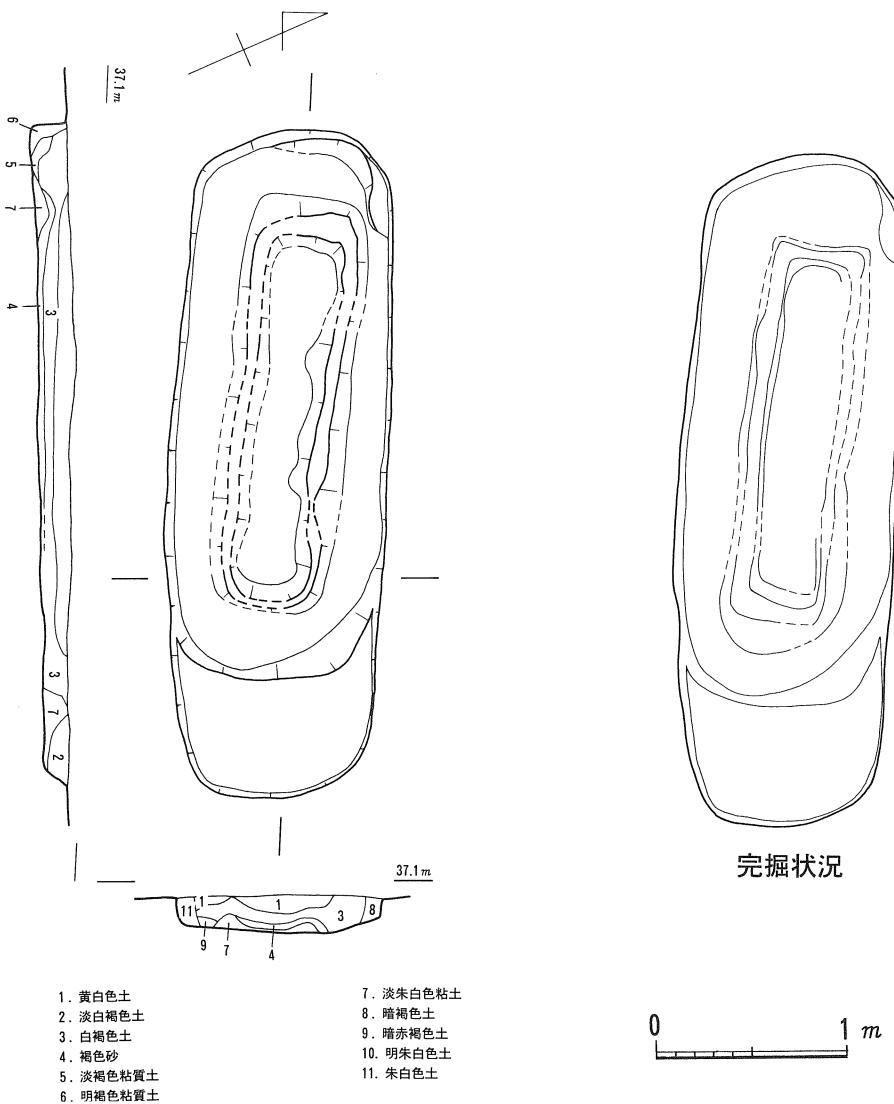
第5図 大谷I遺跡 2区遺構配置図 1:200



第6図 大谷I遺跡3号墳 1:100

3号墳（第6図 図版3） 丘陵頂部に切削溝を穿ち、墓域としている。墳丘は、南北6.5m、東西7.5m、高さ0.3mの方墳である。表土直下の2層、3層は墳丘盛土と思われ約40cmの厚さであったが、本来はもっと高く盛られていたかも知れない。

主体部（第7図 図版3）は墳頂中央で検出された。素掘りの土壌で、地山面で確認された。土層の観察では2、3層からの掘り込みは確認できなかったが、これは非常に分かりにくい土層であったため上層からの掘り込みが確認できなかっただけかもしれない。平面形は長方形を呈し、長さ3.6m、幅1.2mと狭長である。検出できた深さは約20cmで、主軸は尾根の方向に平行して穿たれていた。東部は約60cmの幅で一段高くなっており、棺はここより西側に置かれたものと考えられる。墳底には幅約20cm、高さ5cmの堰堤状に巡る施設が設けられていた。これは地山を削り出して、長さ1.1m、幅65cmの範囲で作られていた。この上には粗い砂が覆われ、



第7図 大谷I遺跡 3号墳主体部 1:40

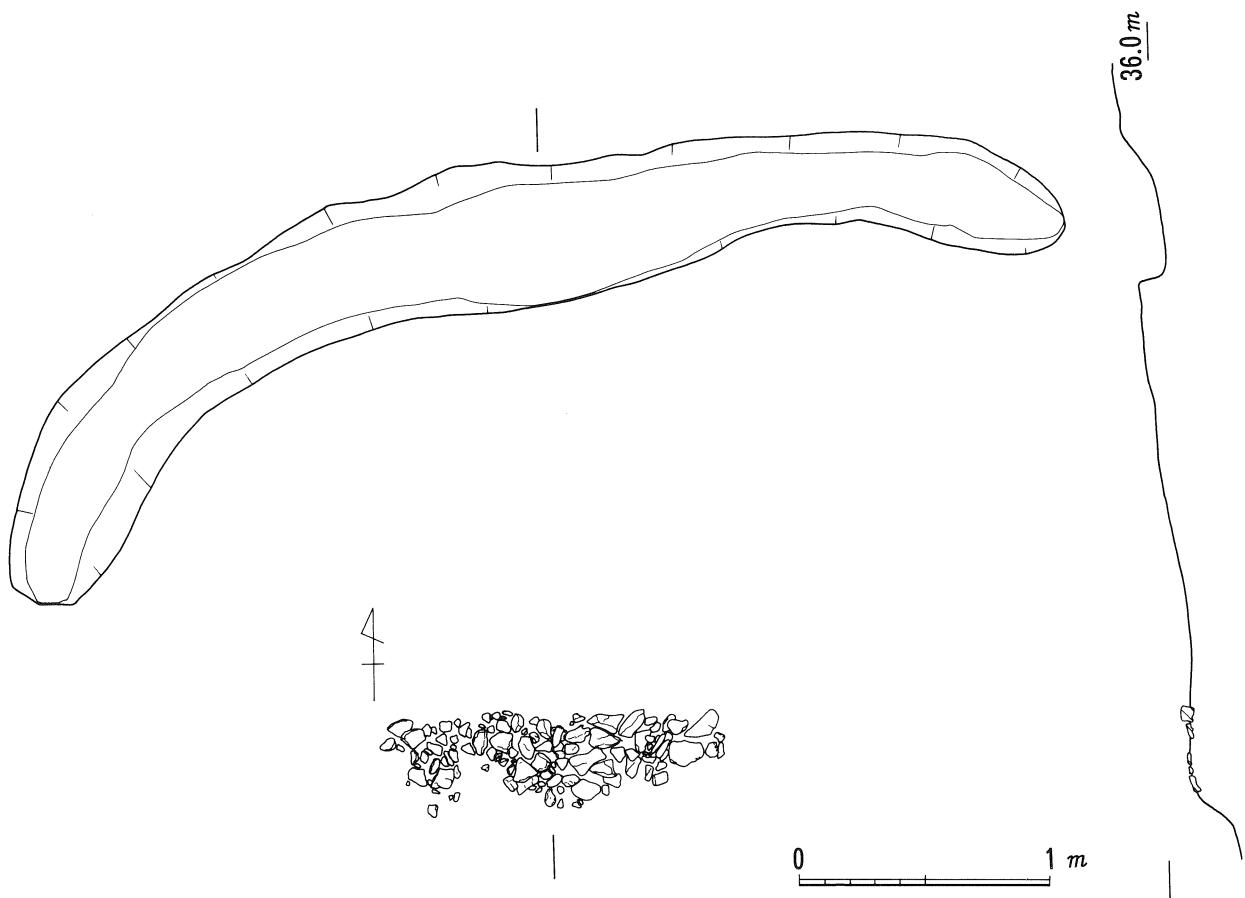
棺台と思われた。砂は棺台の周囲のみに分布していた。

切削溝は尾根の基部側に「L」の字形に穿たれており、幅0.4m、長さ2.4mを測る。切削溝の底から墳頂までの高さは約0.3mである。

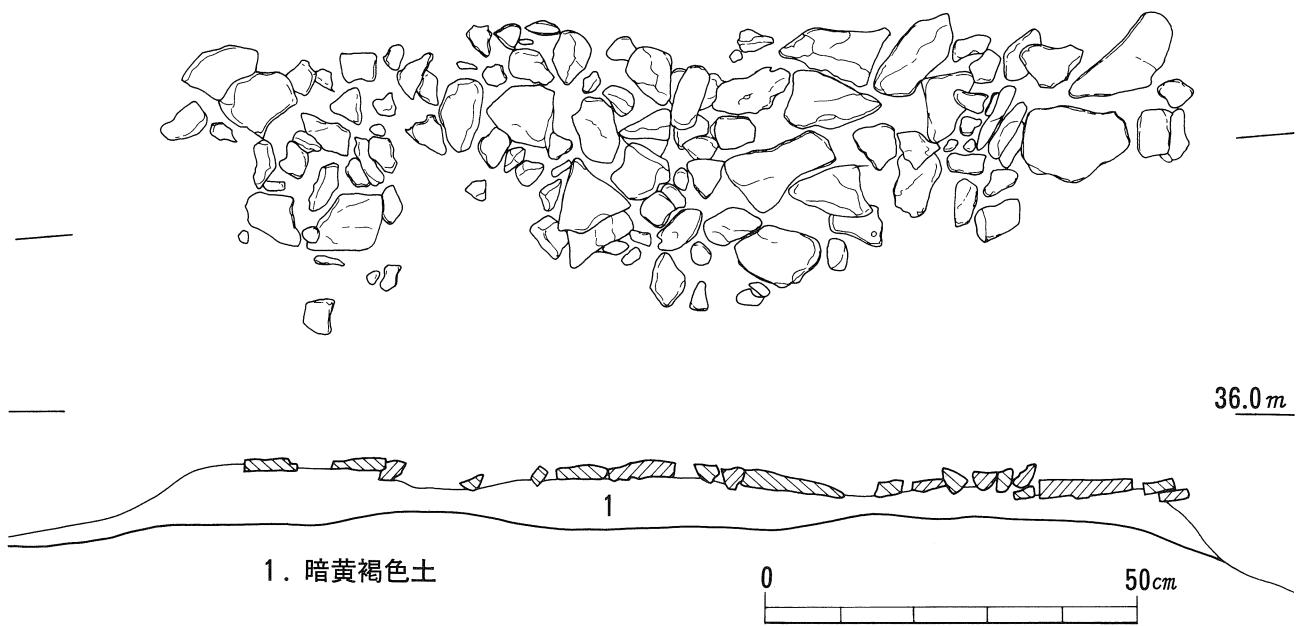
遺物はまったく出土しなかったため古墳の時期は明確ではないが、立地や墳形などから前期古墳の可能性は否定できない。

4号墳（第8図 図版4）調査区の南側に位置する。3号墳は北側に切削溝を設けているが、ほとんど無墳丘の状態であった。若干地山を整形した程度で顕著な墳丘をもつとはいがたい。ただし、礫床が表土直下で検出されていることから考えても、墳丘は現状より高かったとみるのが自然であろう。

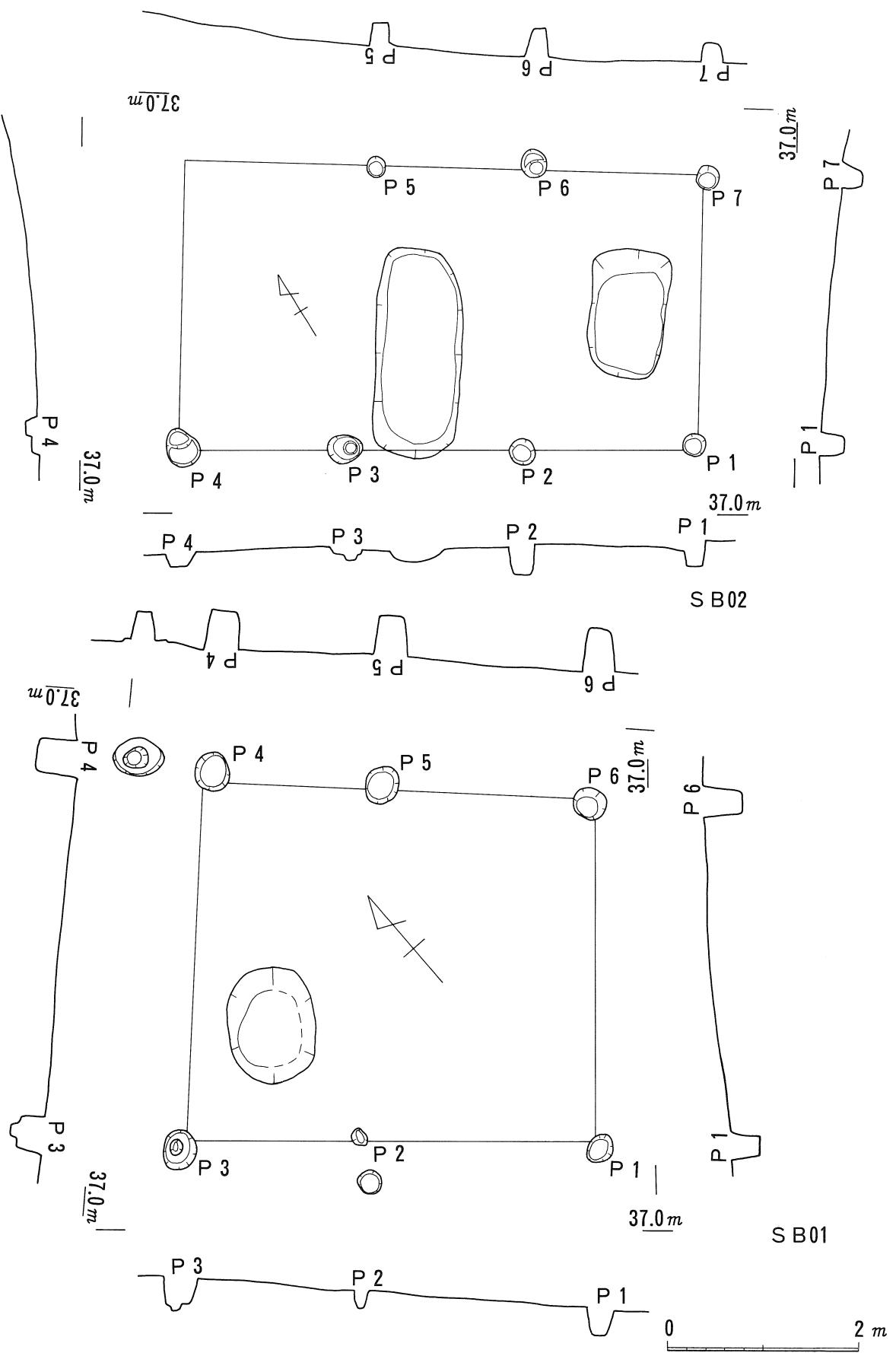
主体部（第9図 図版4）は掘り形は確認できなかったが、切削溝の南約6mの位置で礫床が検出された。これは古墳の中央よりやや西に寄っている感じを受ける。礫床の規模は長さ1.4m、幅約50cmである。礫は4～5cm程度の大きさの偏平な石が使用されていた。これらの石は地山に含まれていた石と同質の石で、この丘陵で産出する石のうち適当な大きさの石を抽出し



第8図 大谷I遺跡4号墳 1:30



第9図 大谷I遺跡4号墳主体部 1:10



第10図 大谷I遺跡 SB01・02 実測図 1:30

て礫床に利用したように思われた。

礫床の直下には暗黄褐色土が約5cm堆積していた。この層の上面がほぼ水平になっていることから、人為的な盛土の可能性がある。

切削溝は平面形がわずかに弧状を呈して穿たれていた。その規模は長さ4.5m、幅60cm、深さ15cmである。

遺物はまったく出土しなかったため古墳の時期は明確ではないが、立地や墳形などから前期古墳の可能性は否定できない。

S B 0 1 (第10図 図版5) 本丘陵最高所の平坦面に立地する。ここは20m×12mの範囲で平坦面がみられ、人的な地山の整形と思われた。S B 0 1はこの平坦面の南端に位置する、1間×2間の掘立柱建物跡である。桁行き5.4m、梁行き3mを測る。柱間は不揃いだが、P 2-3、P 4-5間がP 1-2、P 5-6間より狭い配置となっている。

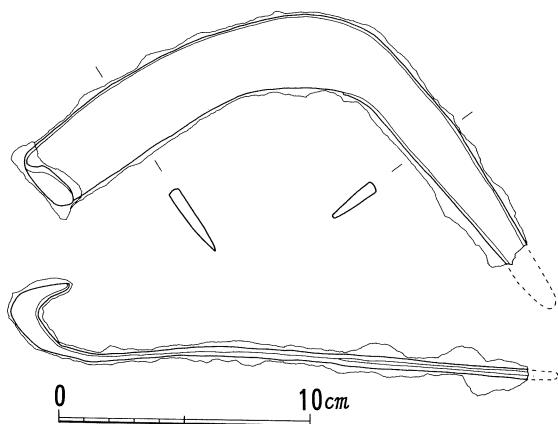
S B 0 2 (第10図 図版5) 平坦面の北端に位置する、1間×3間の掘立柱建物跡である。桁行き4.4m、梁行き3.7mを測り、柱間はP 5-6が狭いほかはほぼ均等な配置である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

土壙墓 (第12図 図版5) 土壙墓は3基検出された。平面形はいずれも長方形で長さ1.4~2.1m、幅0.8m前後、深さ0.2~0.3mを測る。SK 0 7は長さが短いが、上部が流失した結果かもしれない。壙底はいずれも平坦である。SK 0 1・0 2は土層がレンズ状に堆積している部分があり、棺の陥没を反映していると思われる。SK 0 7・0 6は並んだ状態で配され、主軸は3基ともほぼ東西に向いている。このことから各土壙墓は無秩序に作られたとは考えにくい。

SK 0 6からは鉄鎌が1点出土した(第11図)。柄の装着部が差し込み式の鎌で、刃部先端は折れ曲がっている。

土器が出土していないため、以上の土壙墓の時期は不明である。

土壙 (第13図) 円形または不整円形の土壙が5個検出された。径0.8~1.4m、深さ0.2m程度のものが多いが、SK 1 0は深さ0.6cmと深い土壙である。

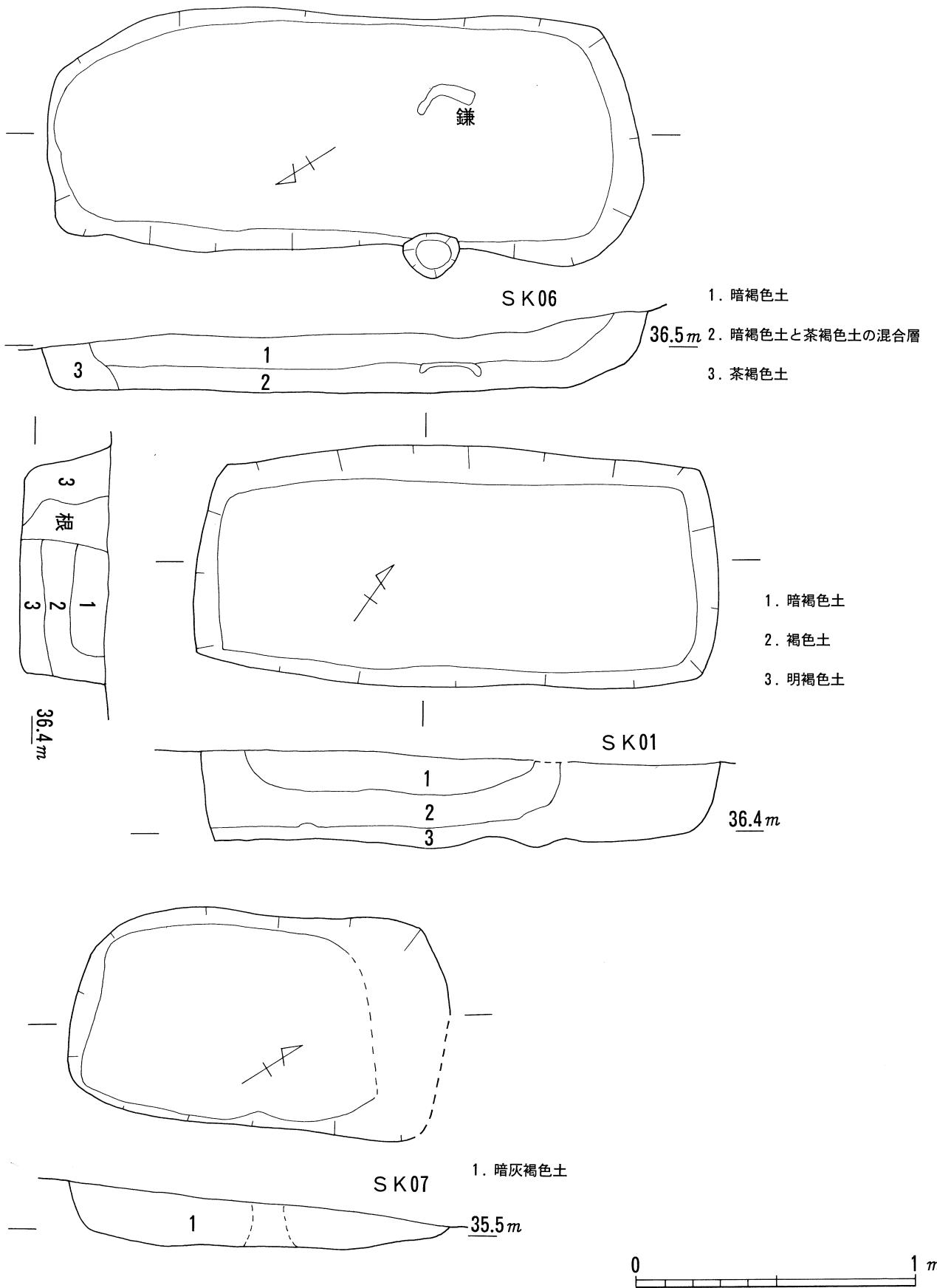


第11図 大谷I遺跡 SK 0 6出土鉄鎌(S=1/3) 定することはできないが、製作途中の横穴墓

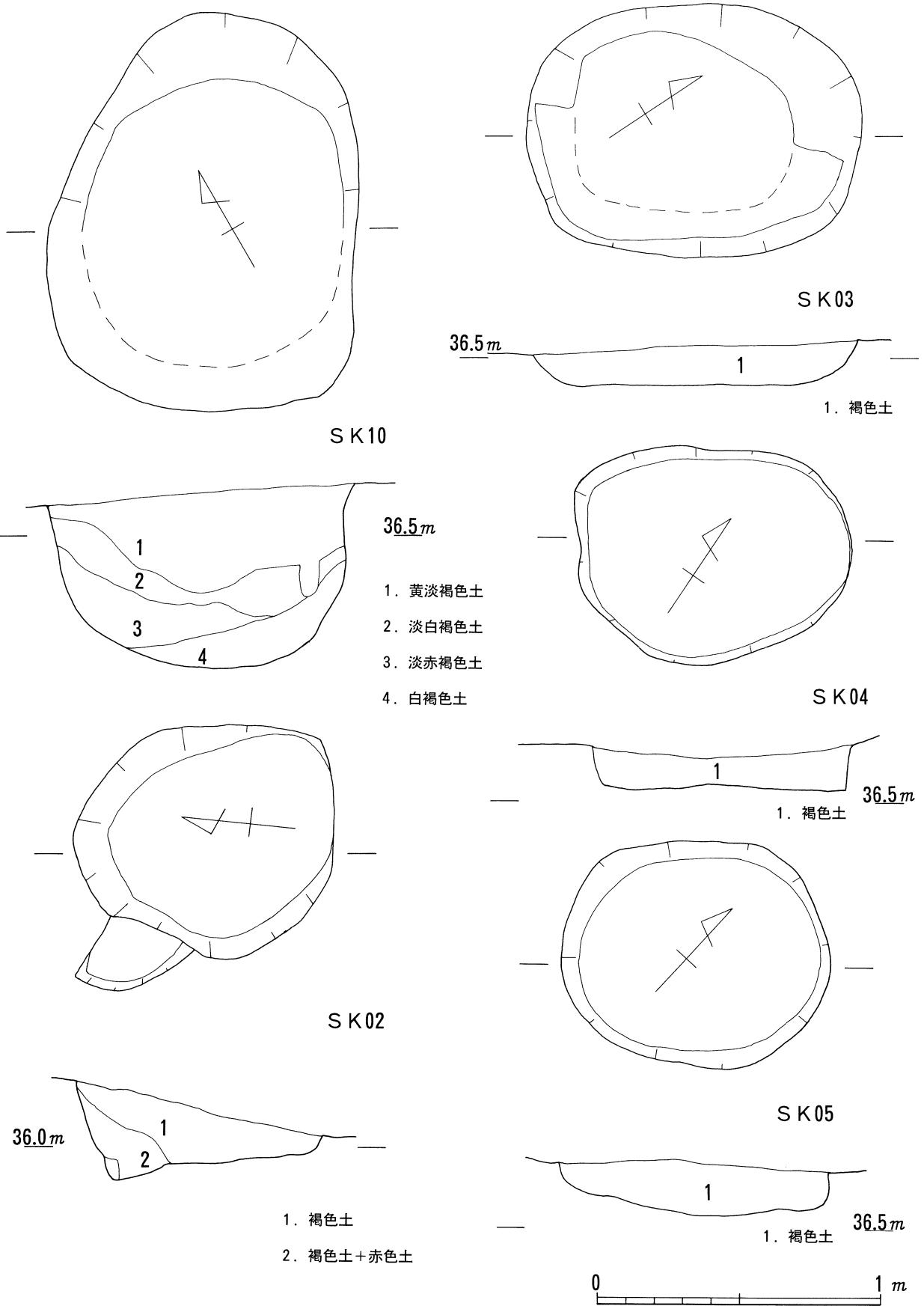
遺物が出土していないため、性格、時期は不明である。

S X 0 1 (第14図 図版6) 2区北端に位置する。丘陵頂部からやや下った西斜面に穿たれた遺構である。平面形、断面形とも不整形で、壙底は2段に掘られている。長さ4.8m、幅2.7m、深さ0.8mを測る。

遺物が出土していないので性格、時期を断



第12図 大谷 I 遺跡 2 区土壤墓 1 : 20



第13図 大谷 I 遺跡 2区土壤 1:20

の可能性がある。

3区 本丘陵の東北山麓の斜面に位置する調査区である。ここではピット、土壌状、加工段状の落ち込みが検出されたが、性格のわかる遺構は検出できなかった。

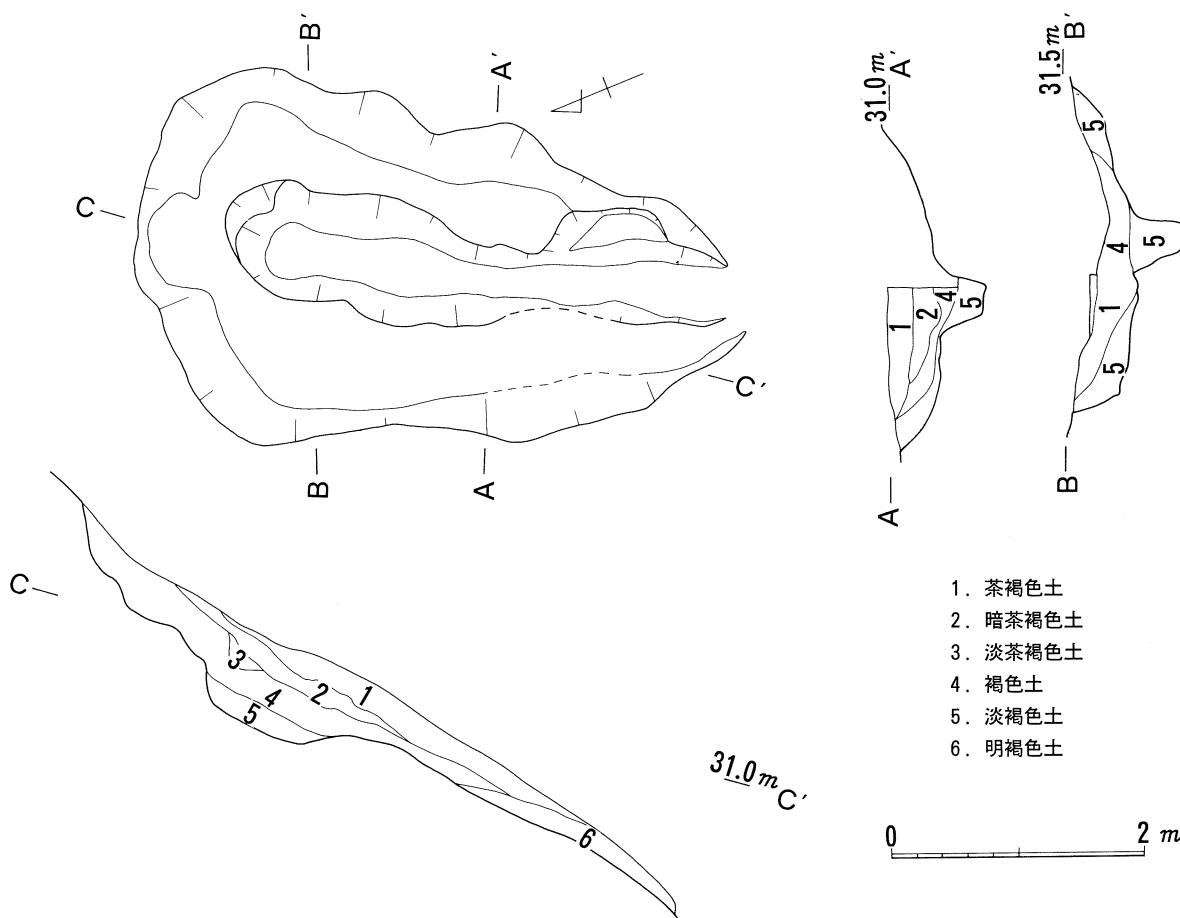
出土遺物（第15～17図 図版17）大谷I遺跡からは須恵器、土師器、石器などが出土地したが、出土量は少なかった。須恵器は主に2A区～2B区の間の尾根上とその西斜面から出土した。石鏃などは3区からの出土がやや目についたが、とくに集中していたわけではない。石器類は調査区全域から散漫な状態で出土した。

1～4は石鏃である。1、2が平基式、3、4が凹基式で、いずれも全長2.4～2.7cm、幅1.7～1.8cmと小型である。3の一面には主要剥離面と思われる大きな剥離面が残り、その面の縁辺に小さな剥離が施されている。4は全面に比較的細かい剥離が施されている。1、4が黒曜石製、2、3が安山岩製である。

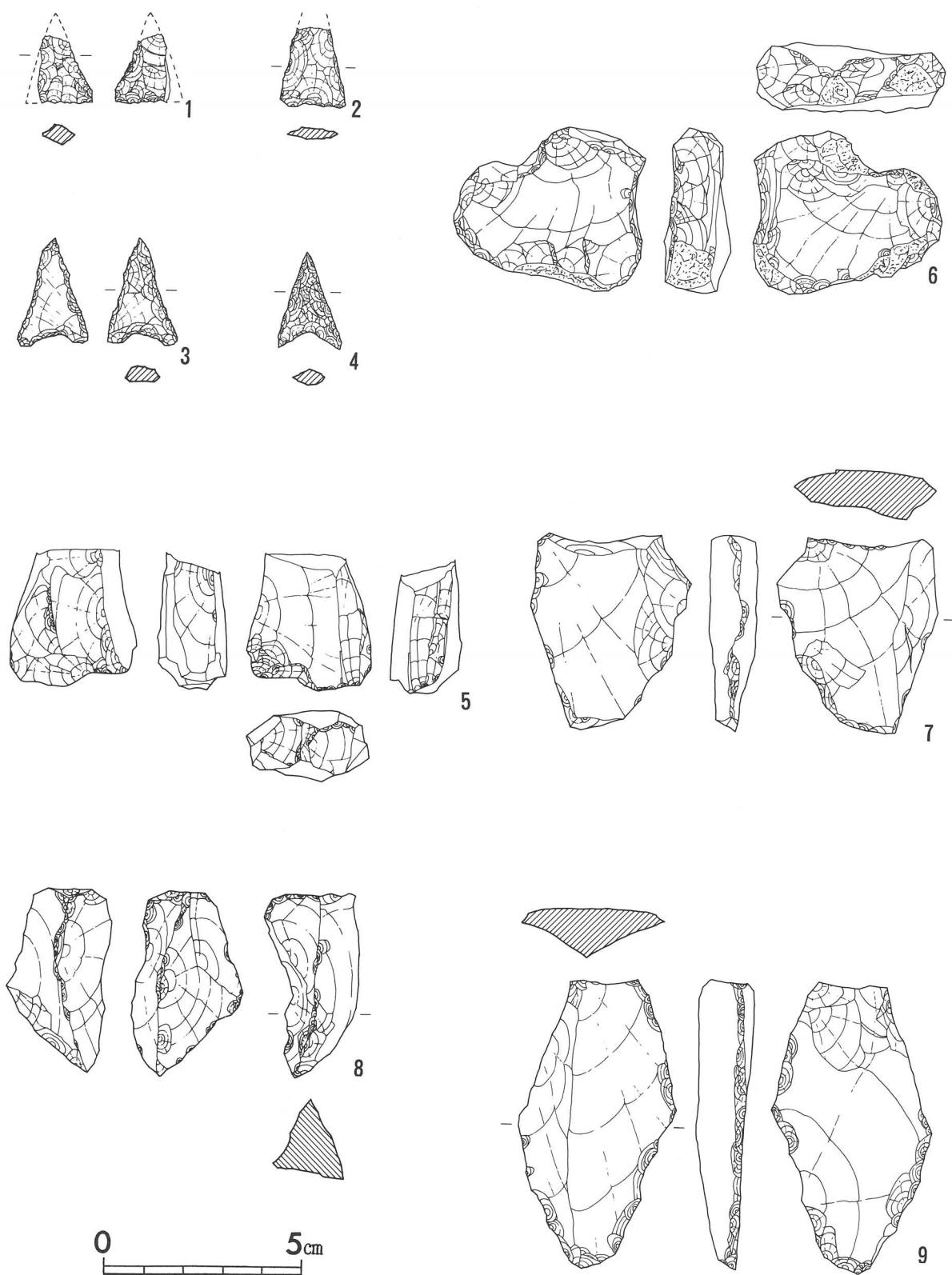
5は平面形が長方形を呈する細石刃核である。一側面には幅5mmから1cmの剥片を一定方向から連続的に剥離したと思われる剥離面がみられる。

7～10は剥片石器である。いずれも縁辺には細かな剥離が施されている。7は表裏ともに同一方向からの剥離である。いずれも玉髓質である。

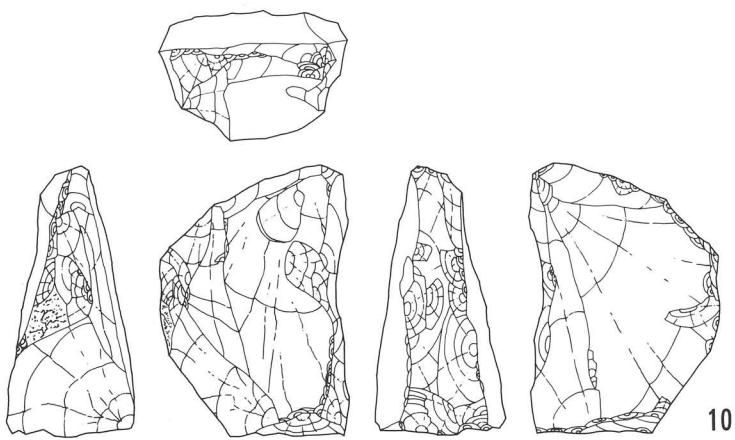
6は器種不明の石器である。両面に大きな剥離痕が残り、一側面には一定方向からの小さな



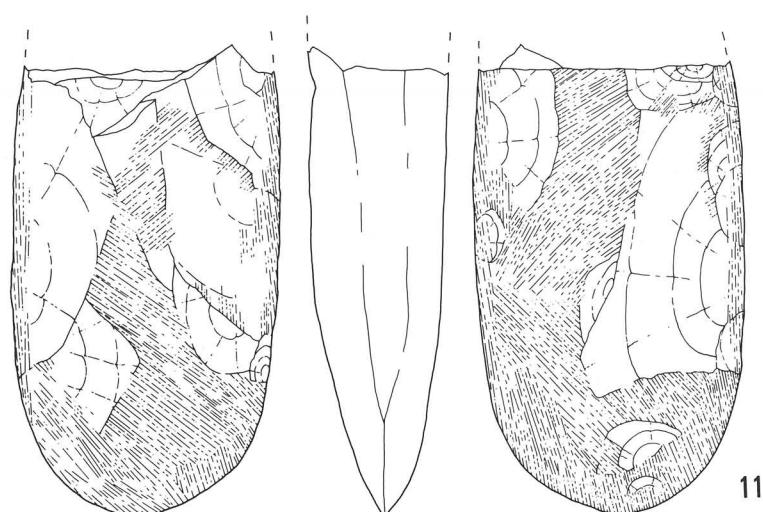
第14図 大谷I遺跡 2B区 S X 0 1 1:60



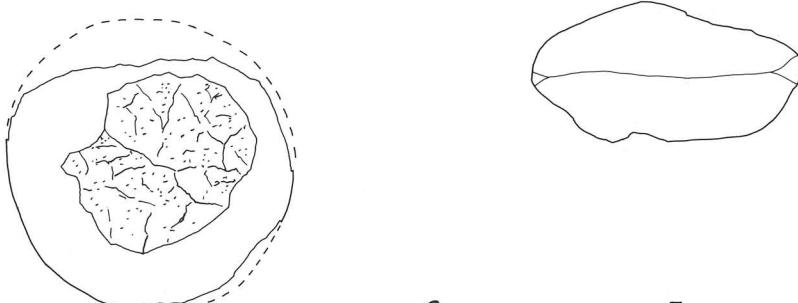
第15図 大谷 I 遺跡 出土石器 ($S=2/3$)



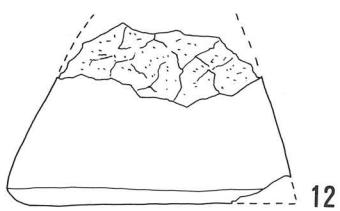
10



11

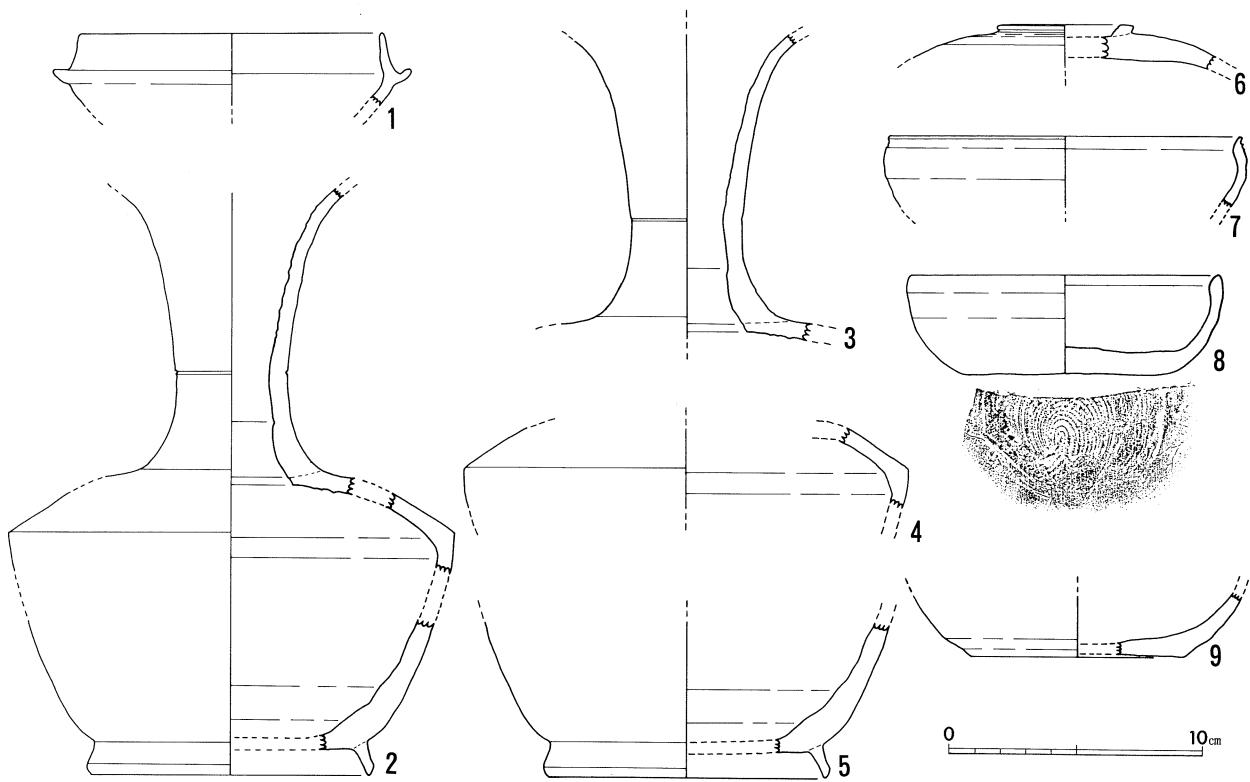


0 5cm



12

第16図 大谷 I 遺跡 出土石器 (S=2/3)



第17図 大谷 I 遺跡 出土土器 ($S=1/3$)

剥離痕がみられる。側面には礫面が多く残る。赤褐色を呈す玉髓質の石材である。

11は磨製石斧である。剥離面の稜線は残るが、全面ていねいに研磨が施されている。

12は器種不明の磨製石器である。上面は欠損するが、截頭円錐形状の器形と思われる。全面ていねいな研磨が施されている。新しい時期の石錐の可能性もある。

第17図は須恵器である。1は壺で、立ち上がりが比較的高い。出雲2期ころであろうか。2～5は長頸壺である。いずれも小片で完形に復元できるものはない。6は輪状つまみをもつ蓋である。口縁部が欠けているので詳細な時期は不明であるが、7世紀後半から8世紀初頭と考えられる。7～9は口縁部が若干くびれる壺で、8、9の底部は回転糸切り痕を残す。8世紀代の土器であろうか。

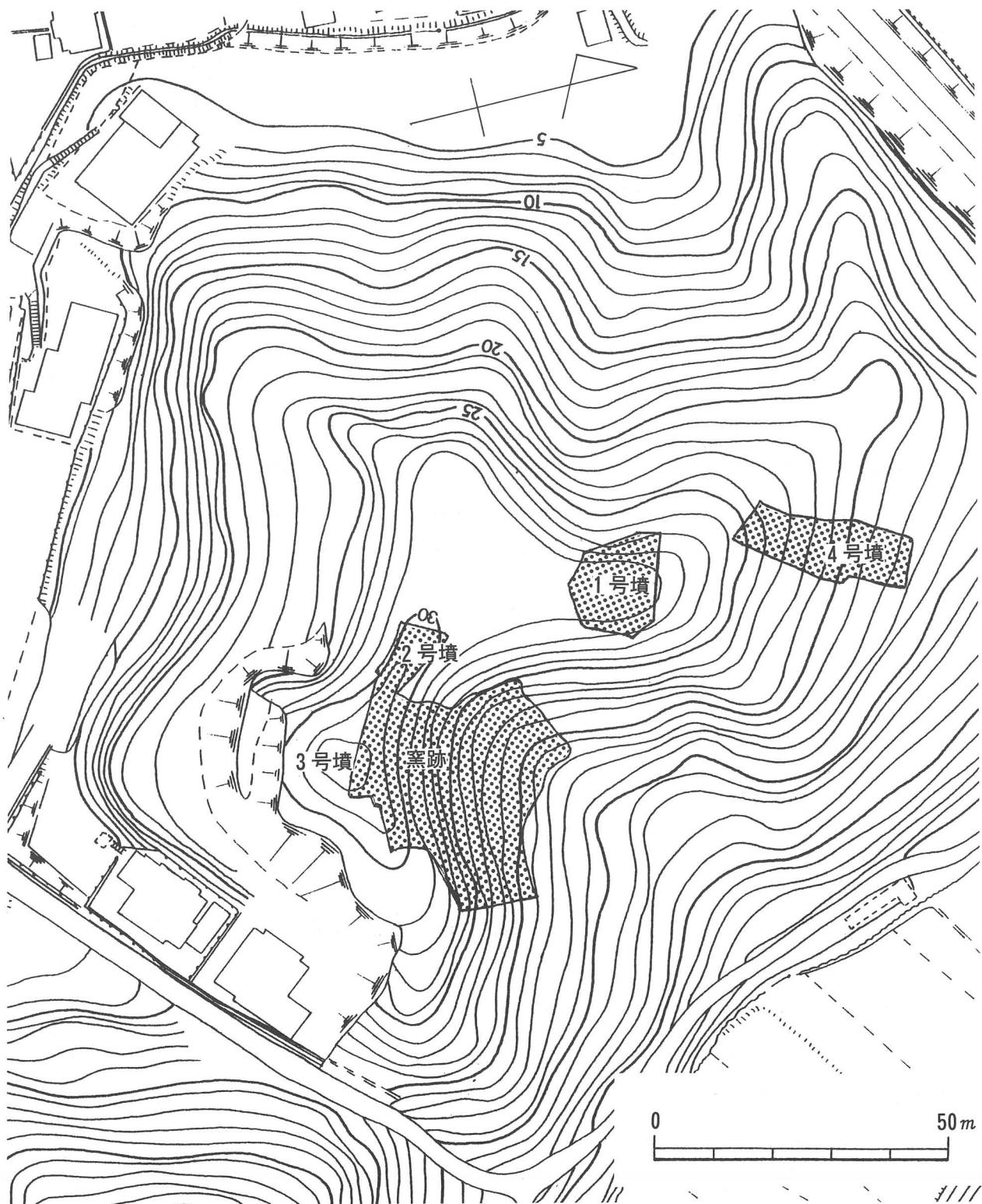
2. 大谷 II 遺跡

大谷 I 遺跡から続く丘陵の先端で、宍道湖を一望できる位置にある。この丘陵はやや広い面をもち、とくに先端部分ではまとまった面積の平坦面があった。調査前の地形観測では、後世の造成によるものとも考えられたが、尾根頂部を中心に発掘調査を行うことにした。調査に当たっては尾根頂部を中心にトレントを設定し、遺構、遺物の確認を行った。試掘調査では結果、A区、B区でそれぞれ古墳1基、C区で古墳2基、C区の斜面では石器や土器片が出土したため、これらの部分を中心に調査区を設定した。

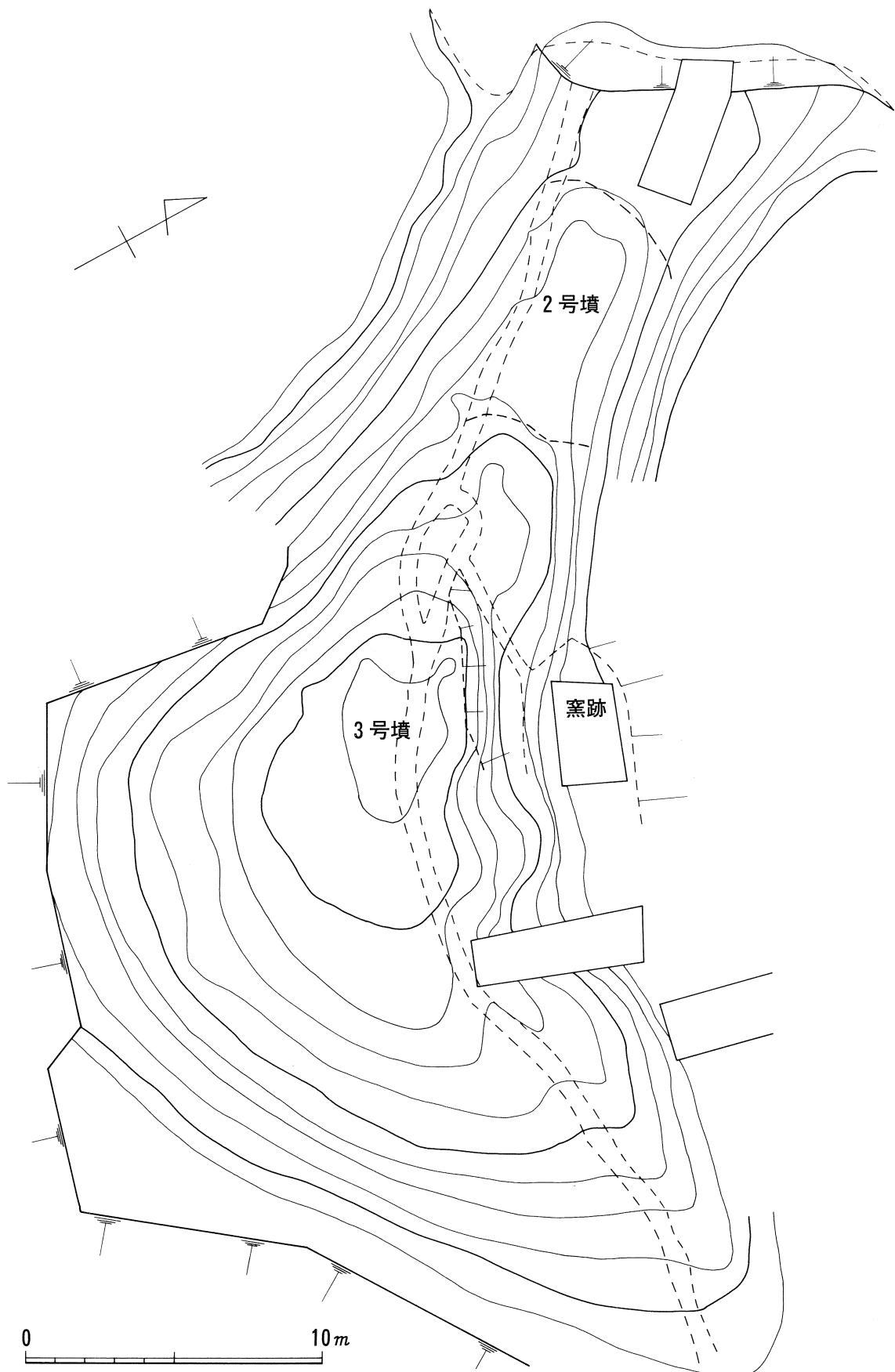
調査の結果、上記の遺構のほか、炭焼窯2基などが検出された。この炭焼窯は通称「ヤツメウナギ」と呼ばれる横口付き炭窯で、島根県では初出である。

1. 古 墳

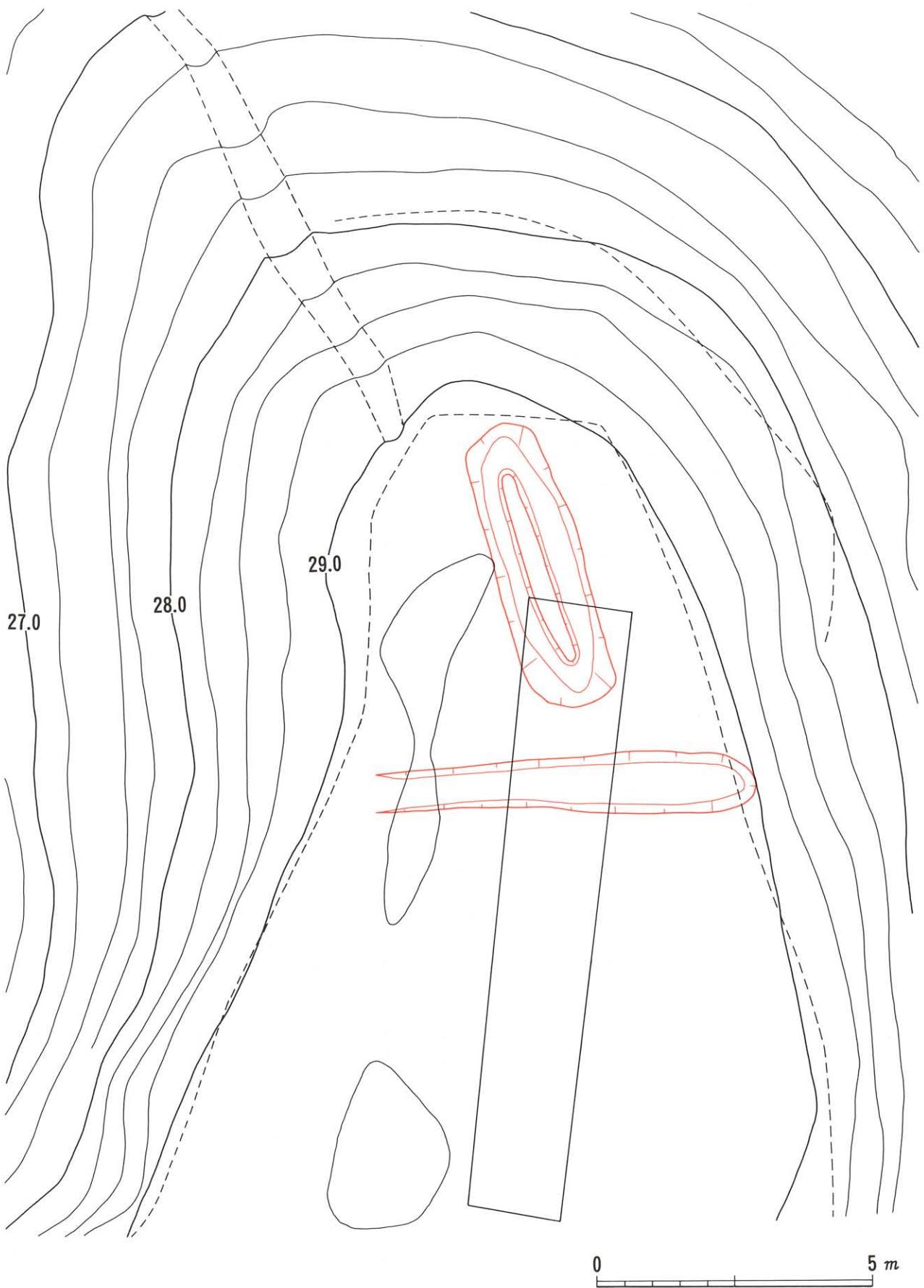
1号墳（第20図 図版8） 丘陵の突端に位置し、宍道湖および島根半島が一望のもとに望めるところである。調査前は比較的広い平坦面となっており後世の削平とも思われたが、試掘



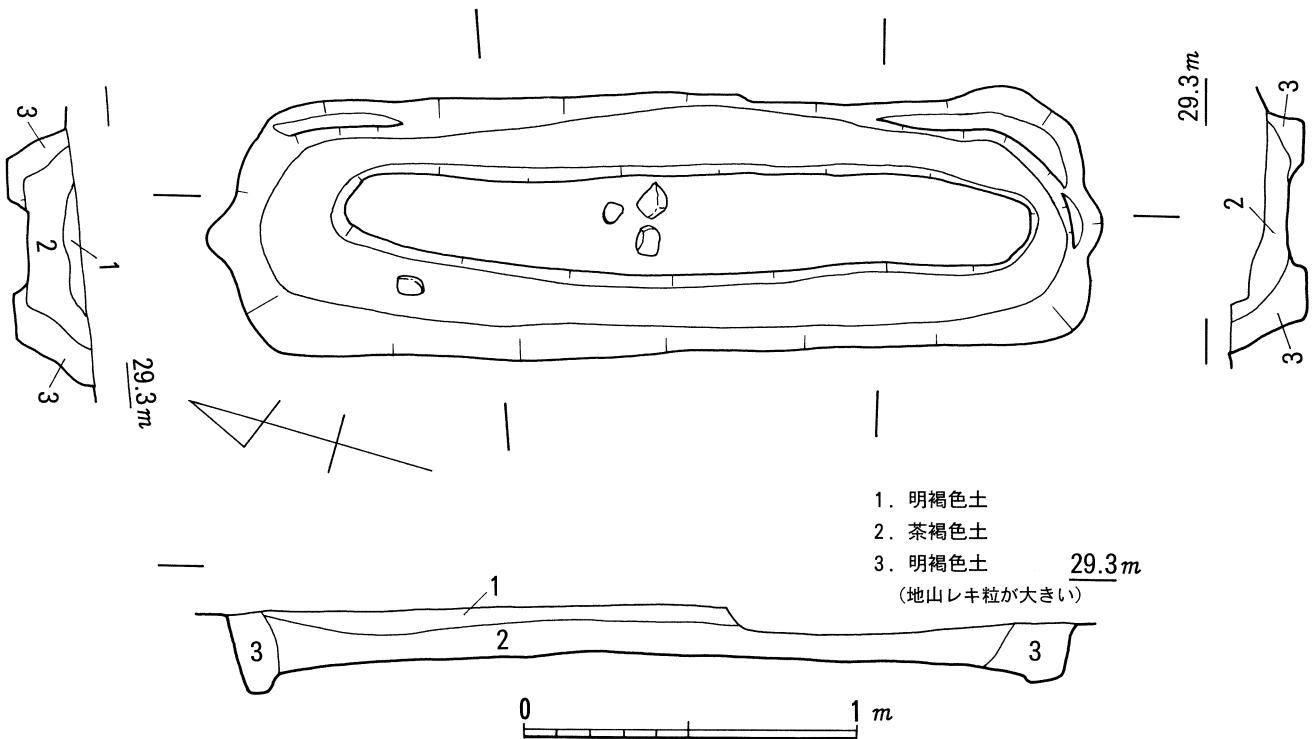
第18図 大谷II遺跡 調査区配置図 1:1,000



第19図 大谷II遺跡 測量図（調査前） 1:200



第20図 大谷II遺跡 1号墳地形測量図 1:100



第21図 大谷II遺跡 1号墳主体部 1:30

の結果古墳であることが判明した。

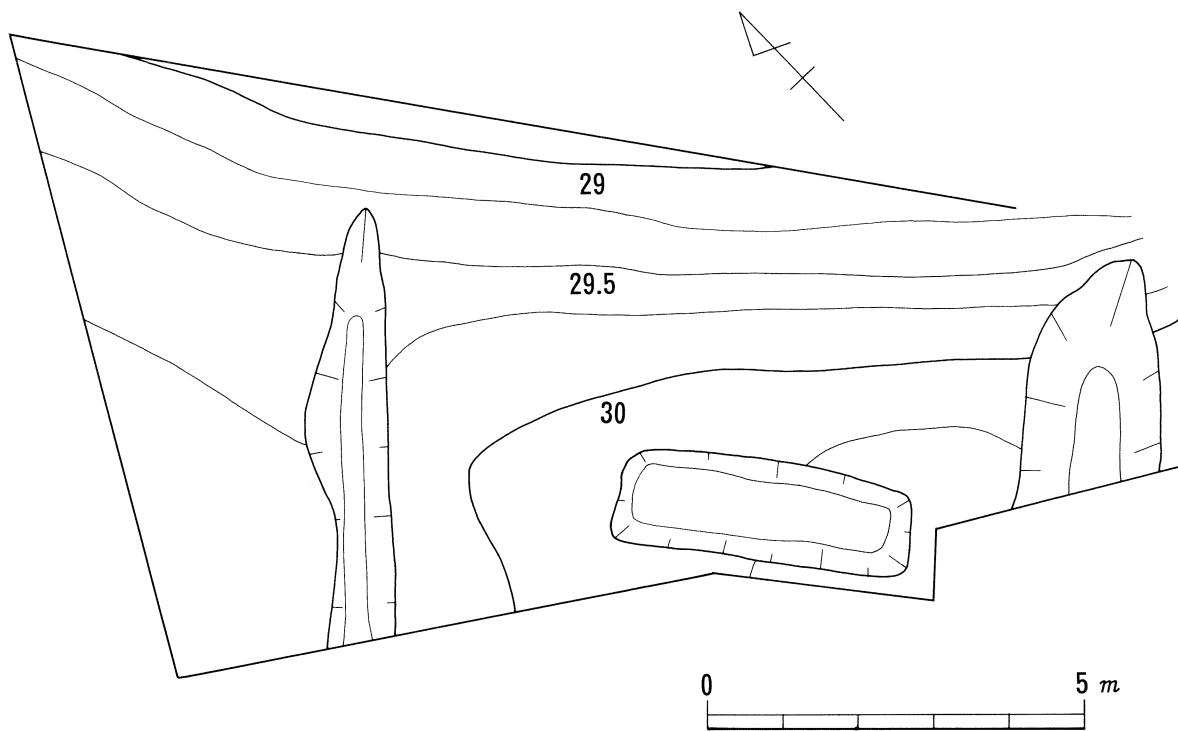
墳丘は地山を削り出して作られている。墳形は方墳と思われるが、明瞭な方形ではなく不整形である。南側には長さ7.2m、幅1.1mの切削溝が穿たれており、ここを墳端と考えると南北約10m、東西約11m、高さ約1mの墳丘となる。墳丘上には顯著な盛土は見られなかったが、約20cmの厚さで暗褐色土が堆積していた。これが盛土の一部である可能性もある。

主体部は平面形長方形を呈す素掘りの土壙で、主軸は尾根の方向と平行していた（第21図図版9）。規模は長さ5.3m、幅1.6m、深さ0.4mを測る。壙底は壁際に約40cmの幅で溝状にくぼみ、中央が10cmほど高くなるよう地山が削り出されていた。これは棺台のような機能を果たすものと考えられた。なお、棺台状の施設の中央には石が3個出土したが、この性格については不明である。

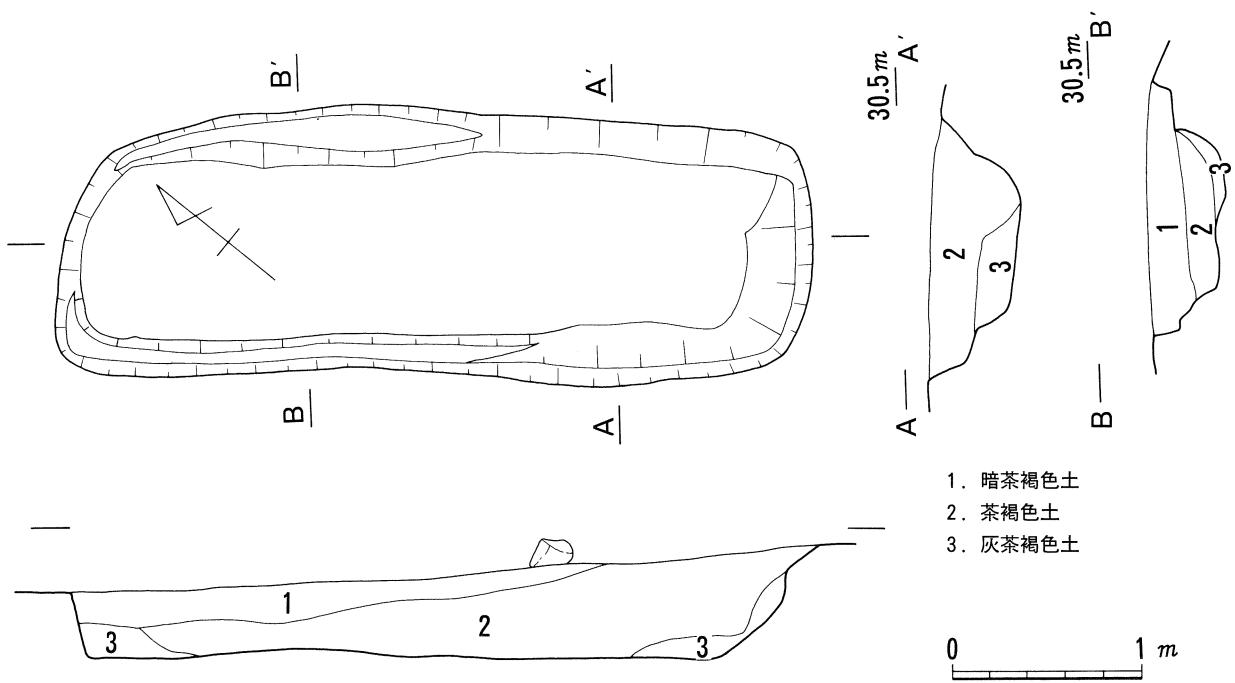
遺物は東南斜面から土師器片が若干出土した。これらは小片で図示できなかつたが、うち1点は複合口縁の甕と思われた。これが1号墳に伴うとすれば、1号墳は前期の古墳と考えられる。

2号墳（第22図 図版10） 1号墳の南約15mに位置する。ここは1号墳から続く平坦面が斜面に転換する地点で、尾根の幅は狭くなっている。発掘前は、段状になっていたが自然地形に近く、古墳として認識はできなかつた。

調査の結果、ここには尾根の方向に直交する2条の切削溝によって区切られた古墳であることがわかつた。各切削溝によって区切られた墳丘の規模は南北約8.3mで、切削溝がともに直線的であることから、方墳と考えられる。高さは約0.5mで、墳丘は地山を若干削り出して整



第22図 大谷II遺跡 2号墳地形測量図 1:100



第23図 大谷II遺跡 2号墳主体部 1:40

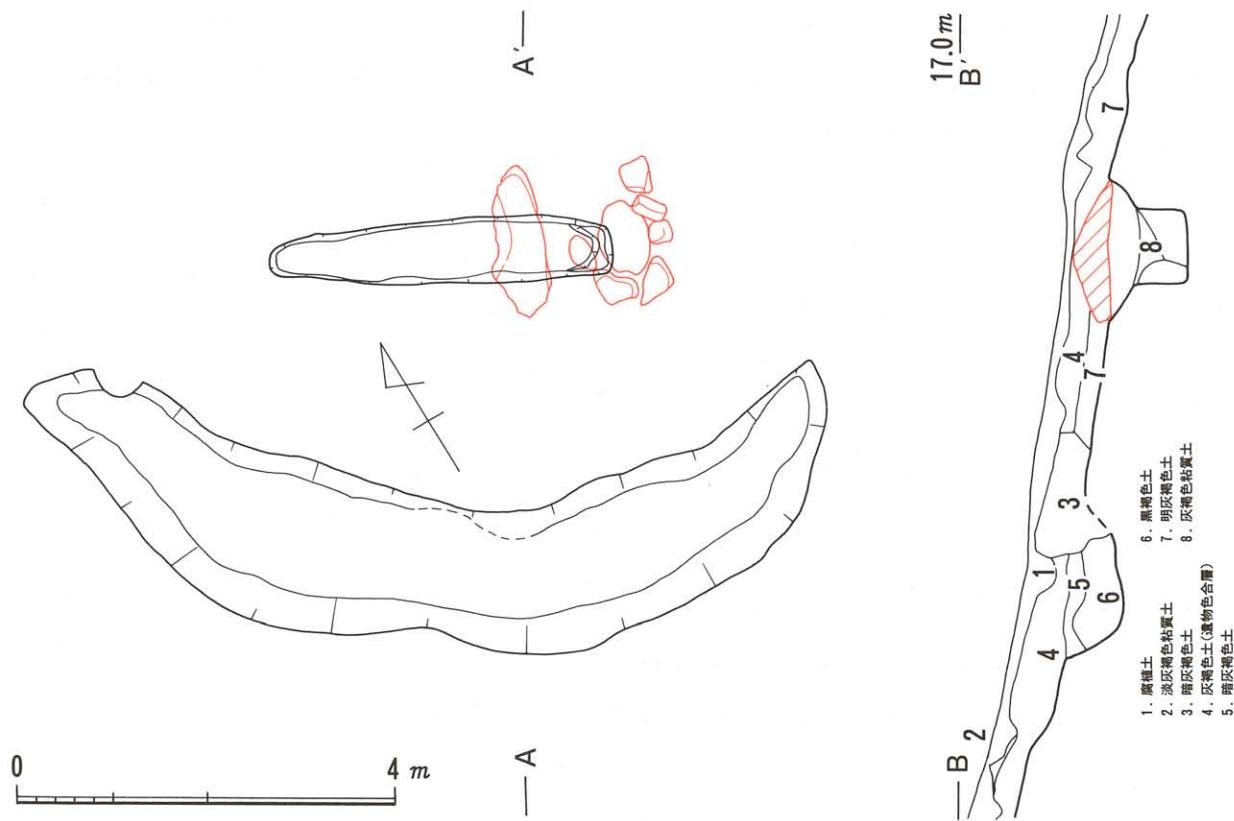
形した程度と思われた。

主体部は平面形長方形を呈す素掘りの土壙で、主軸は尾根の方向と平行していた（第23図図版10）。規模は長さ4m、幅1.3m、深さ0.4mを測る。土壙上面には20cm大の石が検出されたが、意図的に置かれたものか偶然によるものかは不明である。壙底はほぼ水平で、側壁は両壁

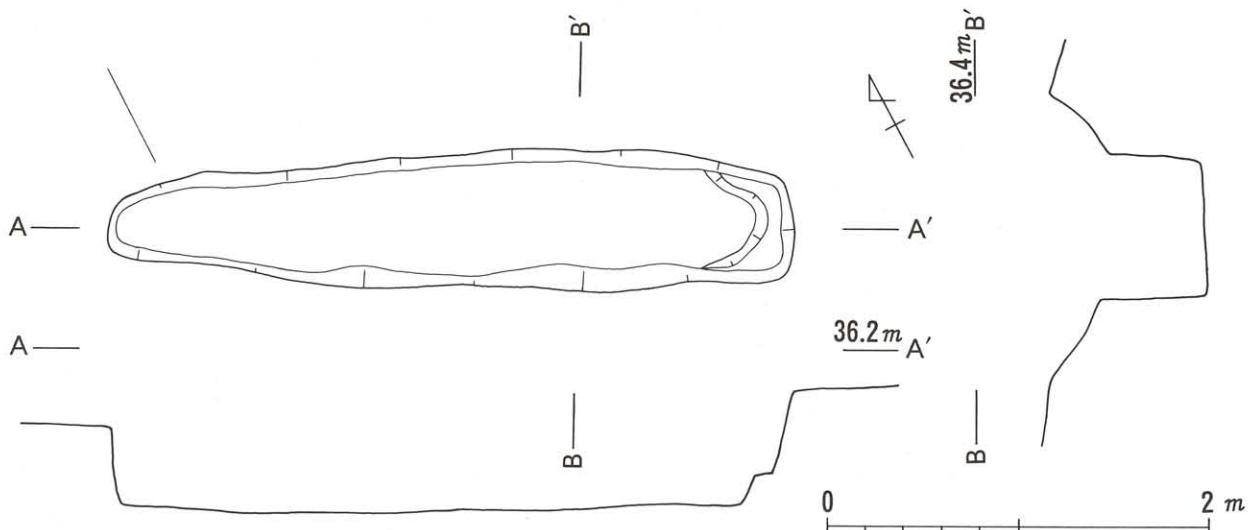
とも一部分が2段になっている。

遺物が出土していないので、時期は不明であるが、立地や形状から前期古墳である可能性も否定できない。

3号墳（第19図） 本丘陵の最も高所に位置する古墳である。工事対象外であったため、発掘調査はおこなわなかった。一見すると自然地形に見えるが、1・2号墳同様、丘陵の頂部を



第24図 大谷II遺跡 4号墳 1:20



第25図 大谷II遺跡 4号墳主体部 1:20

若干加工した程度の古墳と考えられた。1～3号墳と一連の古墳と思われる。調査を行っていないので詳細は不明であるが、一辺5～6m程度の方墳であろうか。

4号墳（第24図 図版11） 1号墳の北約4.5mに位置し、丘陵斜面に立地している。発掘前は、等高線が多少乱れていたものの自然地形に観察され、古墳として認識はできなかつた。

4号墳は南側（山側）に切削溝が穿たれ、等高線に平行するように石蓋土壙が配されただけの古墳であった。若干地山が削り出されているかもしれないが、墳丘と思われる高まりは確認できなかった。切削溝は平面形が弧状を呈し、両端を結んだ距離は約4.2mである。幅は約0.5mとやや広く、深さは約10cmを測る。

主体部は石蓋土壙である（第25図 図版11）。土壙の長さは約1.8m、幅0.3m、深さ0.4mを測り、平面形は細長い長方形を呈す。石は東部に集中しており土壙上に置かれた状態であった。石は10～80cmの大きさの自然石で、加工などは観察できなかった。

遺物が出土していないので、時期は不明であるが、立地や形状から前期古墳である可能性も否定できない。

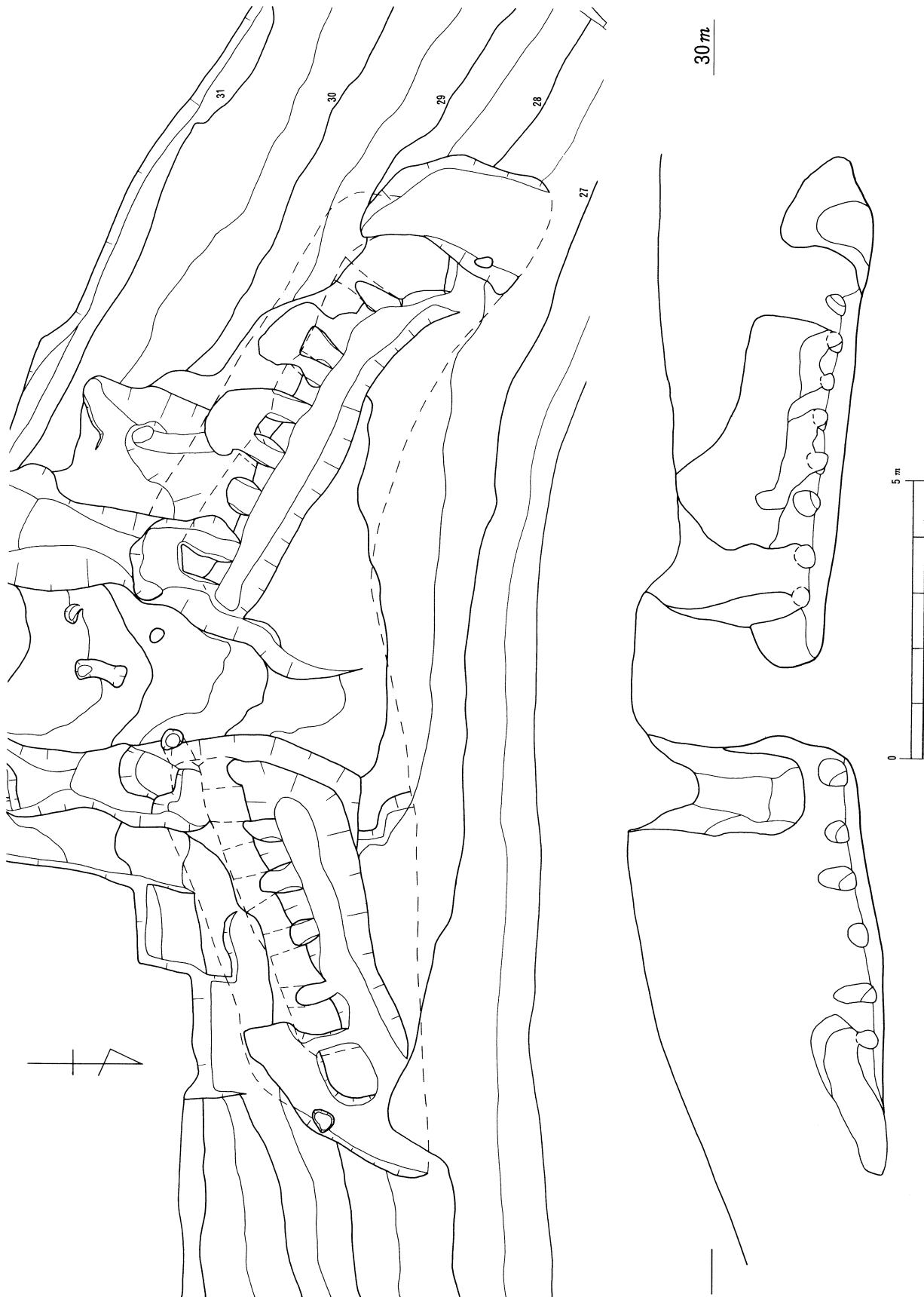
2. 窯跡（第26図 図版12）

3号墳の東斜面で2基が検出された。ここは丘陵頂部から1.5m～2m下った急な斜面で、窯跡は主軸を等高線に平行するように作られていた。2基は煙道を向かい合わせ、平面形が「ハ」の字状の配置をしていた。両者の距離は約1mである。ともにトンネル状に割り貫かれたもので、谷側には横口が付く窯である。東側には溝と平坦面があり、これらの窯跡に付随する施設と考えられた。窯跡は一部が後世の攪乱を受けているものの2基とも残存状態が非常によく、天井部が陥没せずに残っていた。埋土を除去すると天井が陥没する恐れがあったため、検出段階でいったん記録を取り、その後天井部を落として窯内部の調査を行った。

1号窯跡（第27図 図版12） 全長10.1mを測る。焚き口は等高線に直交しているが、焚き口端部から2.8mほど奥に入ったところで向きを変え、燃焼室は等高線に平行して作られている。主軸はN-120°-Eである。

焚き口は幅2mと広く、燃焼部との境は急激に狭くなるが、両者には明確な境界はなかったようである。作業面の床面はやや傾斜しているが、端部では比較的平坦となっている。この部分では10～20cm前後の石が集中していた。いずれも火を受けており、焼成時に使用されたものと考えられる。側壁はほぼ垂直に掘られている。

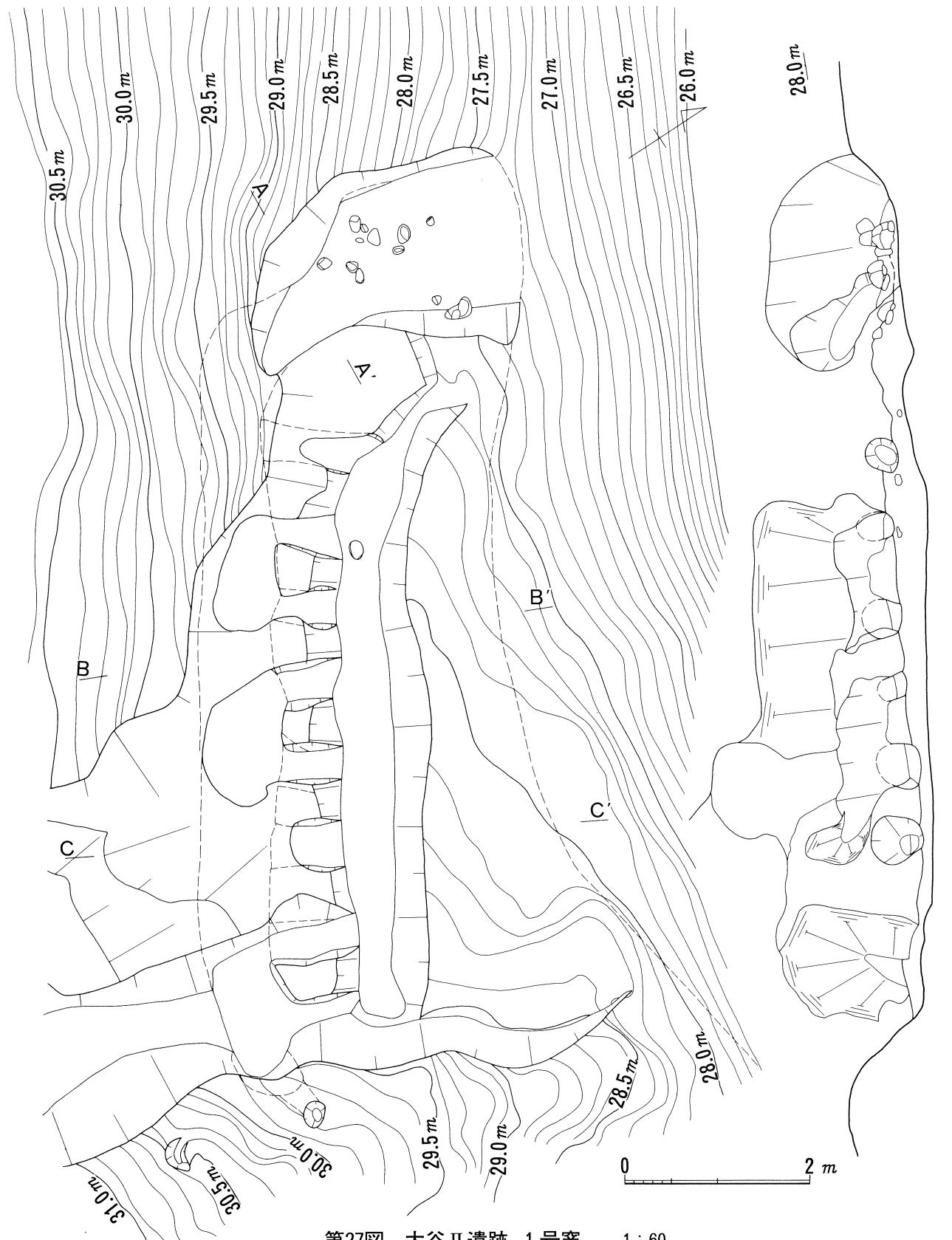
燃焼部はトンネル状に山腹を割り貫いて作られており、長さ8.4m、幅0.6～1.4m、高さ0.4～0.6mを測る。側壁から天井部にかけてはドーム状になり、還元により青灰色を呈している部分が多くみられた。床面は平坦に作られ、主軸方向の床面の傾斜は約10度である。また床は横断方向にも傾斜し、山側が高くなっている（第28図）。その傾斜度は8～10度である。床面も



第26図 大谷II遺跡 烹跡遺構配置図

1 : 100

非常によく焼けており、青灰色に変化していた。燃焼部内には天井部まで土がぎっしりと堆積していた（第28図 図版14）。これは奥部の天井が崩落した後に奥から土砂が流入したためと思われる。土層は上部の1～3層については規則性はみられず、天井の崩落土および流入土と

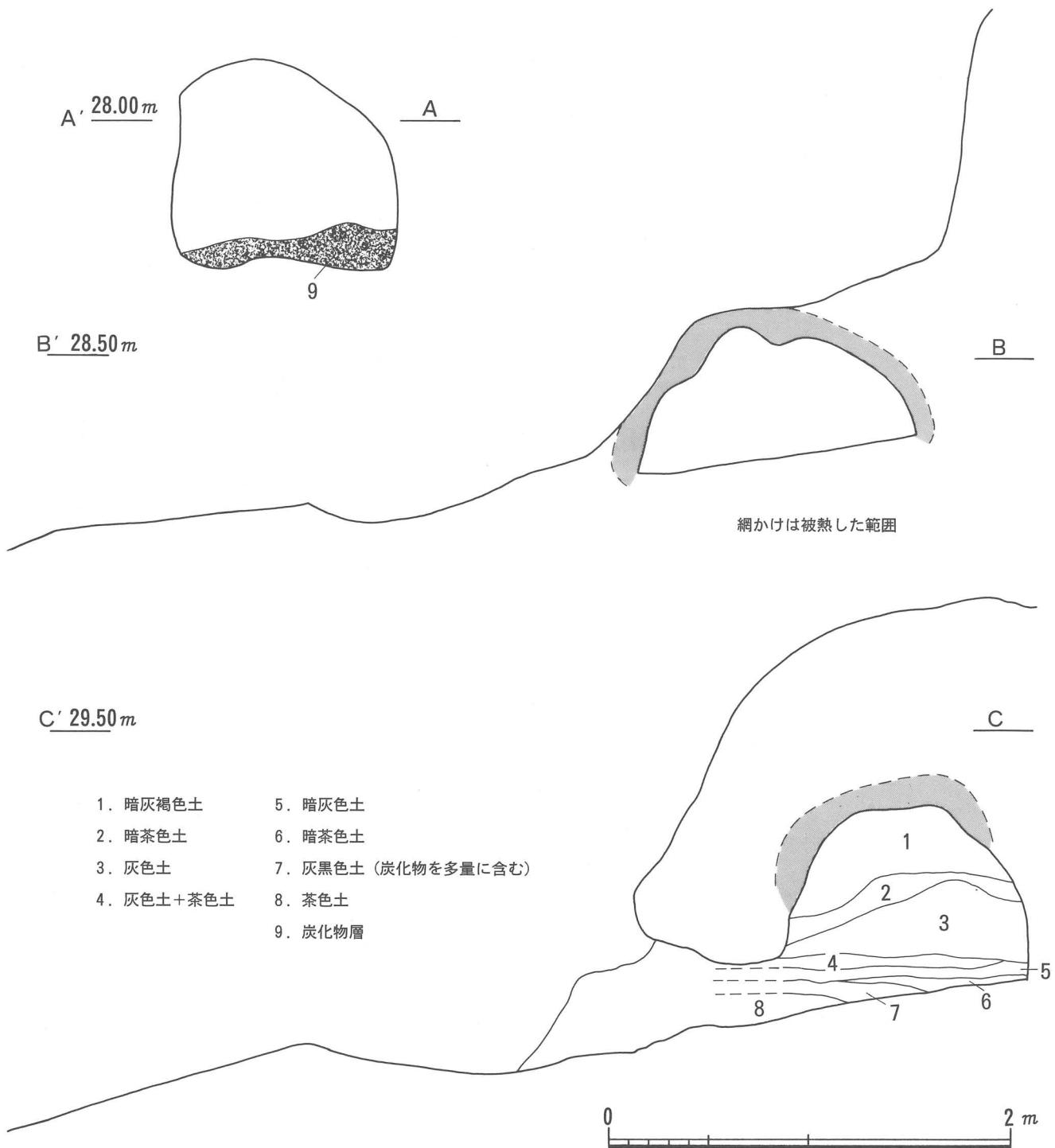


第27図 大谷Ⅱ遺跡 1号窯

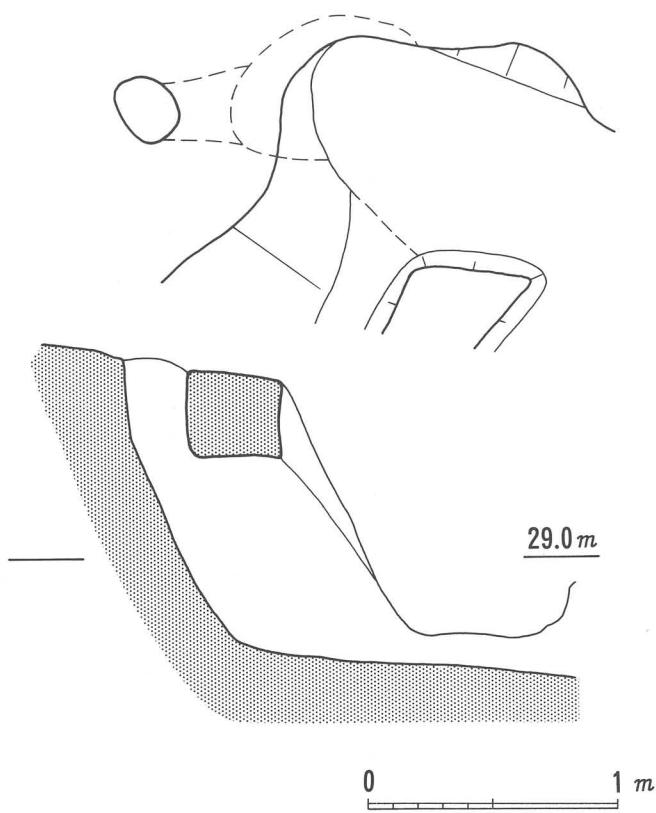
1 : 60

考えられる。4～8層はほぼ水平に堆積し、人為的に上面が均された感じを受けた。

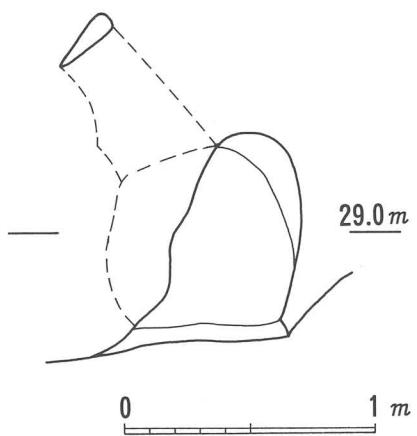
燃焼部の谷側には溝状のくぼみに面して8個の横口が30～40cmの間隔で並んでいる。いずれもほぼ円形の横口で、完全に残る2個は焚き口に近いもので径約30cm、煙道に近いもので径約50cmを測る。底面は燃焼部に向かってしだいに高くなり、断面形は「U」字形に凹面をなす。



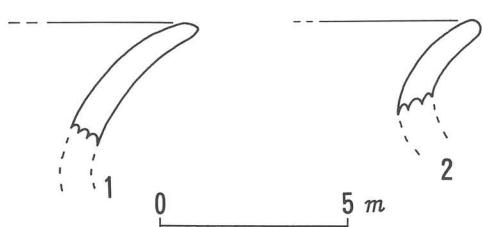
第28図 大谷Ⅱ遺跡 1号窯土層図



第29図 1号窯煙道



第30図 1号窯煙道立面図 1:30



第31図 大谷II遺跡 1号窯出土土器
(S=1/2)

煙道（第29・30図 図版14）は燃焼部の主軸よりやや東に振れた位置に設けられ、上端で径約30cmを測る。ほぼ垂直に掘られ、燃焼部奥壁に連結している。上端部には石が詰められていたが、どのような機能を果たすものか不明である。煙道も火を受けており、赤褐色を呈していた。

窯跡の谷側には主軸に沿って幅約0.8~1mの深い溝状の遺構が設けられていた。これは前述のように横口と連結しており、底面も燃焼部と同様な傾斜をもっていた。底面には炭化物を多く含んだ層が全面にみられたことから、灰や小

炭化物などをかき出すための施設と考えられた。また、この溝状遺構に隣接して幅0.4~1.2mの平坦面が付設されていた。作業面と考えられる。

遺物は作業面から土師器片が出土した。とともに小片で復元することはできないが、奈良時代ごろの甕片と思われる（第31図 図版17）。これが1号窯の時期を示すとすれば、1号窯は奈良時代前後の窯と考えられる。ただし、この土器が1号窯に伴うという確証はない。

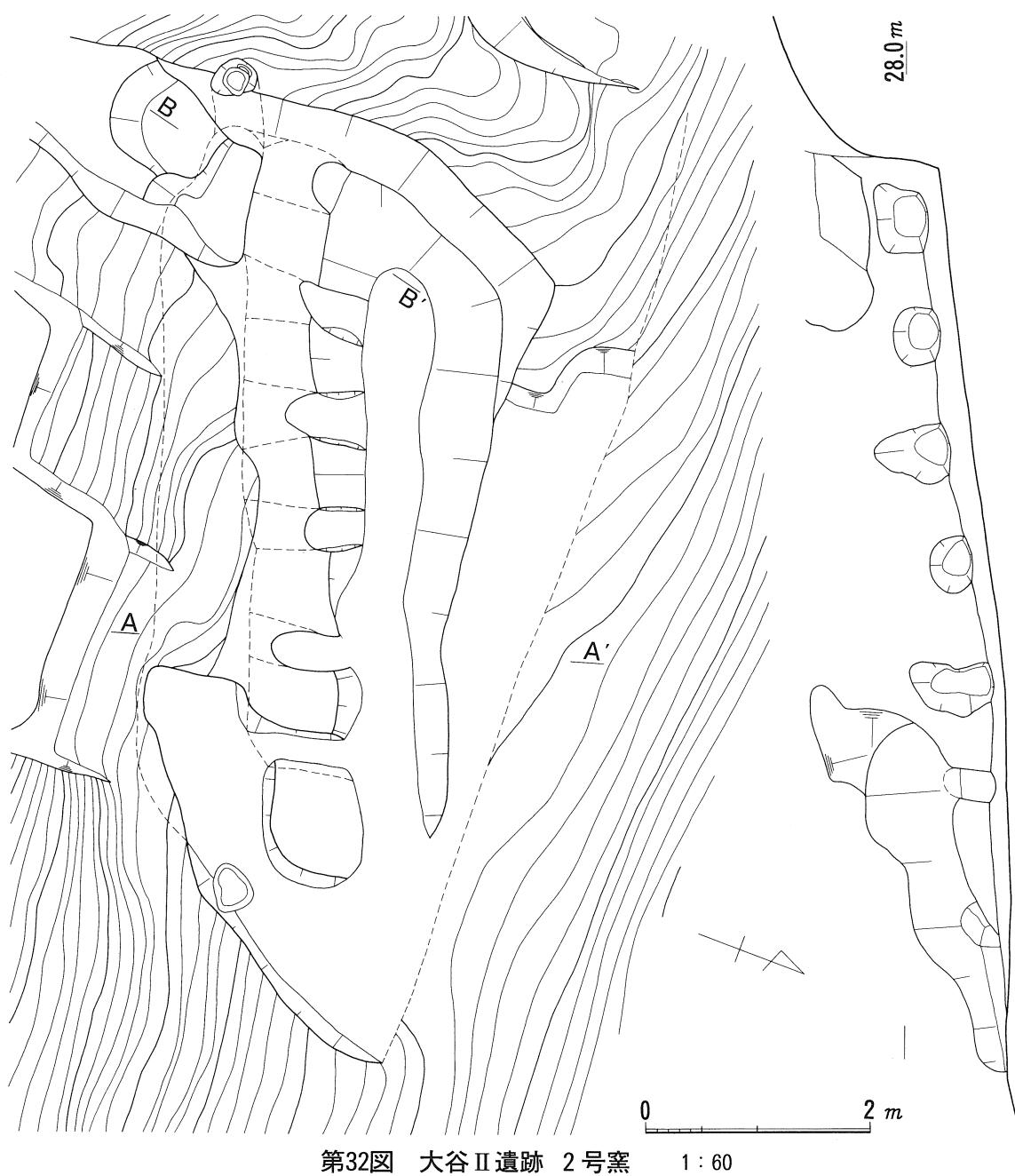
なお、窯内から出土した炭化物については（株）地球科学研究所に依頼して放射性炭素年代測定を行った。それによって得られた年代はAD 1010年であった（注1）。ただし、測定に使用した炭化物は作業面で採集したもので、1号窯に重複している溝状遺構の炭化物が混入している可能性がある。また地磁気年代測定によればAD 650±40年であるという（注2）。

(注1) ^{14}C 年代測定値は1060年±50B P、 $\delta^{13}\text{C}$ ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比) は-27.3、それによる補正 ^{14}C 年代は1030年±50B P。すでに年代が明らかになっている樹木年輪の ^{14}C 測定値によって作成された補正曲線で算出された暦年代はAD1010年であるという。

(注2) 時枝克安、成 亨美、渡部道貴の測定による。

2号窯 (第32図 図版14) 全長8.8mを測る。焚き口は等高線に斜行して掘られているが、しだいに向きを変え燃焼部は等高線に平行して作られている。

焚き口は端部の幅は約1.6mだが、しだいに狭くなりそのまま燃焼部に至る。燃焼部との境界は明確ではない。床面はなだらかであまり傾斜しない。燃焼部との境界付近で約50cmの大きな石があったが、この窯に伴うものかどうかは不明である。側壁は垂直に近く掘られていた。



第32図 大谷II遺跡 2号窯

1 : 60

主軸方向はN-117°-Eである。

燃焼部はトンネル状に山腹を割り貫いて作られ、長さ6.6m、幅0.8m、高さ0.7mを測る。側壁から天井部はドーム状に作られ、火を受けて赤褐色または青灰色に変化している。床面は平坦で、主軸方向の傾斜は約6度と1号窯に比べやや弱い。また地山面は横断方向にも傾斜しているが、直上層の上面は水平になっていたのでこれを床面としていた可能性がある。地山面の傾斜は奥壁近くでは約20度、焚き口近くでは約10度であった。地山面は天井や側壁ほどには焼けていないようであった。燃焼部内には天井部まで土が堆積しており（第33図 図版16）、天井部が崩落した後に土砂が流入したと考えられる。土層は最下層の上面が水平になっていることから、意識的に床面を整えたように思われる。これより上の層は流入土と思われた。

燃焼部の谷側には溝状のくぼみに面して6個の横口が50cmから70cmの間隔で並んでいる。円形または不整円形を呈し、径40～60cmを測る。底面は燃焼部に向かって順次高くなり、断面形は「U」字形に凹面をなす。

煙道は燃焼部の主軸上に設けられ、上面で径40cmを測る。大部分は陥没しているため、全体像は不明であるが、やはりトンネル状に燃焼部奥壁と連結していたと思われる。煙道は検出された範囲では火を受けており、赤褐色を呈していた。

窯跡の谷側には主軸に沿って幅約1mの浅い溝状の遺構が設けられていた。これは横口と連結しており、底面は燃焼部と同様に傾斜していた。底面には炭化物を多量に含んだ層が全面にみられたことから、窯内の灰や小炭化物をかき出すための施設と思われる。また、この溝状遺構に隣接して幅1m程度の平坦面が付設されていた。これも作業面と考えられる。

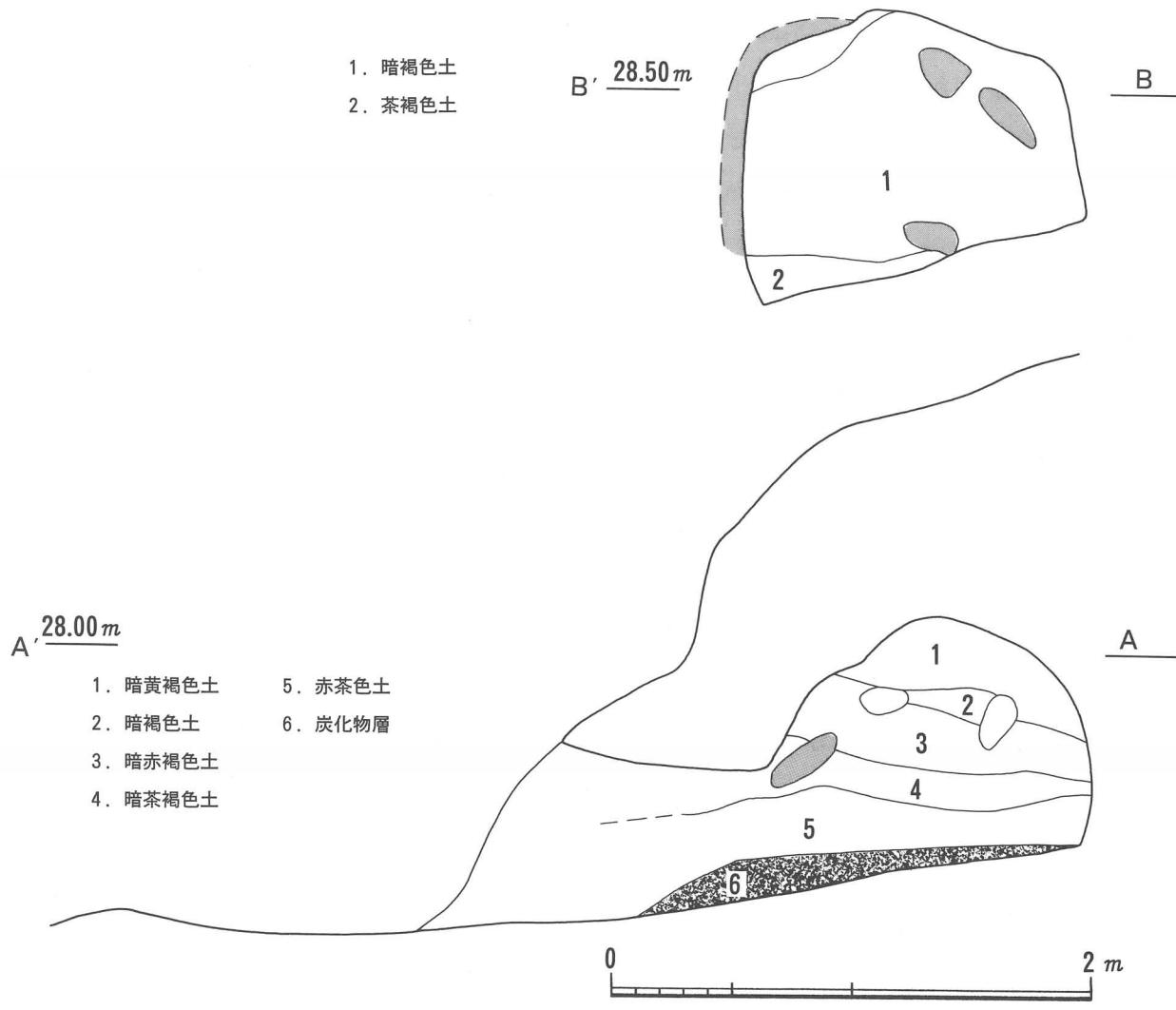
遺物が出土していないため、詳細な年代は不明であるが、放射性炭素測定ではAD705年という年代が得られている（注1）。

また地磁気年代測定によればAD660±50年であるという（注2）。

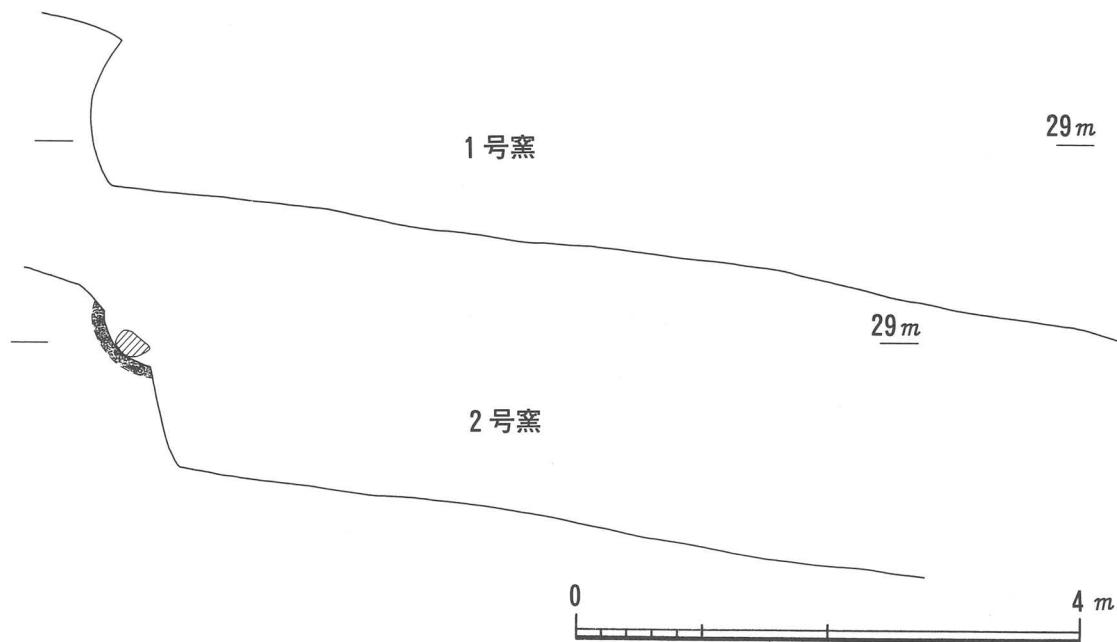
（注1）測定は（株）地球科学研究所に依頼した。それによると¹⁴C年代測定値は1310年±60BP、 $\delta^{13}\text{C}$ （¹⁴C/¹²C比を補正するための¹³C/¹²C比）は-26.1、それによる補正¹⁴C年代は1290年±60BP。すでに年代が明らかになっている樹木年輪の¹⁴C測定値によって作成された補正曲線で算出された暦年代はAD705年であるという。

（注2）時枝克安、成亨美、渡部道貴の測定による。

溝状遺構（図版16）丘陵尾根筋に直交するように2条が検出された。幅は2.5～3m前後、深いところで2m程度の深さである。側面、底面ともに凹凸が著しく、溝というよりトンネルが陥没したような感じを受けた。底面から約50cm高いところで焼土、炭化物層が確認されたが、これは原位置を保っていると思われる。これらが本来トンネル状をしていたとすれば、天井陥没後に火を焚いたと考えられる。遺物は出土していないが、1号窯、2号窯を壊して作られているように感じられた。



2号窯土層図



第33図 大谷II遺跡2号窯土層および窯跡縦断面図 土層図は1:30 縦断面図は1:60

3. 遺構に伴わない遺物（第34図）

大谷Ⅱ遺跡では遺物はほとんど出土しなかった。1は黒曜石製の石鏃、2・3が土師器甕、3が須恵器坏である。2は複合口縁と思われ、端部は平坦となる。古式土師器と考えられる。3は口縁部が短く外反する甕で、詳細な時期は不明であるが、須恵器出現前の土器と考えられる。4は口縁部がわずかにくびれる坏で、底部は回転糸切り痕が残る。8世紀後半ころと考えられる。

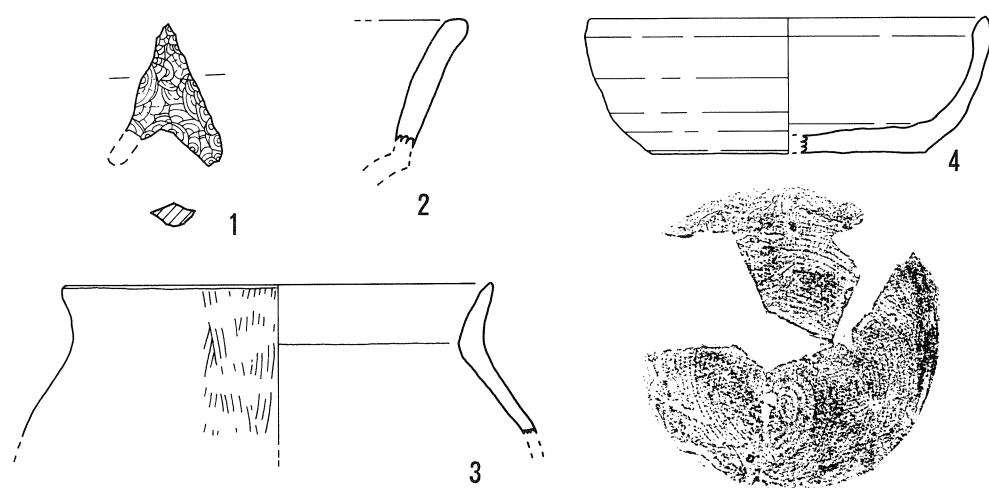
4. まとめ

以上のように大谷Ⅰ・Ⅱ遺跡では丘陵上に合わせて7基の古墳と掘立柱建物跡2棟、斜面に窯跡2基などが検出された。

古墳は主体部その他から遺物が全く出土していないので詳細な築造時期を判断することはできない。ただ、当地で須恵器が普及する時期（陶邑TK23・47期）には何らかの遺物が切削溝などから出土することが多いので、それよりも古い時期の蓋然性が高い。これらの古墳のうち大谷Ⅰ遺跡3号墳、大谷Ⅱ遺跡1号墳では主体部の底面を削り出して棺台としている。このような主体部は礫床の石を敷かない状態と似ており（注1）、築造時期を示す要素かもしれない。

大谷Ⅱ遺跡では横口付き窯跡が2基検出された。これは通称「やつめうなぎ」と呼ばれるよう、側壁に横口を複数もつ特異な窯跡である。横口付き窯跡は製鉄炉とともに検出されることが多いことから、製鉄用炭が生産された窯と考えられている（注2）。本遺跡では製鉄炉など製鉄関係の遺構、遺物は検出していないが、他例からみて、やはり製鉄用炭窯の可能性が高い。

横口付き炭窯は、6世紀後半ごろに出現し8世紀まで作られているという。ただし8世紀の窯跡はわずかで、大多数は6世紀後半から7世紀までのものであるといわれる（注3）。大谷



第34図 大谷Ⅱ遺跡 出土土器 1は1:1 他は1:2

Ⅱ遺跡では窯内から出土した炭を試料として自然科学的な方法で年代測定を行った結果、2号窯跡が放射性炭素年代測定ではA.D.705年、地磁気年代測定ではA.D.660年±50年、1号窯跡が地磁気年代測定ではA.D.650年±40年という測定結果が得られた。ともにこの年代は概ね妥当なところであろう。また、2つの窯の配置が煙道を向き合わせてほぼ同じ高さに作られていることから、2基の窯跡が無計画に作られ、偶然隣り合わせとなつたとは考えにくい。両者は計画的に同時または連続して作られた可能性が高いと思われる。さらに、1号窯跡では作業面と思われる全面の平坦面から7～8世紀ごろの土師器が出土しており、この土器が2号窯跡の放射性炭素年代測定の結果と矛盾しないことから、1号窯跡も7～8世紀に作られた可能性が高い。

このような窯跡は関東から九州にかけて約150基が確認されている（注4）。おもに岡山県から広島県東部で多く発見され旧「吉備国」を中心に分布しているが、山陰地方では鳥取県鳥取市で2例、同郡家町で2例の計4例が検出されたにすぎない（注5）。しかしこれらはいずれも山間部に位置する遺跡で、海岸部での発見は大谷Ⅱ遺跡が初めてである。

横口付き炭窯が製鉄炉と関連があることは前述した。当遺跡では製鉄関連の遺構、遺物は検出できなかったが、近隣では玉湯町玉ノ宮遺跡D-II地区で7世紀末の製鉄炉が発見されている（注6）。近年海岸部でも古代製鉄遺跡の発見が相次いでおり（注7）、当遺跡周辺でも製鉄遺跡が存在する可能性は否定できない。今後は製鉄遺跡とともに製鉄用炭窯が検出される可能性も高く、当地方で横口付き炭窯が一般的かどうか、製鉄技術の流入がどのように行われたか、などの問題について検討する必要があろう。

（注1）島根県教育委員会「中竹矢遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』1983

（注2）穴澤義功「製鉄遺跡からみた鉄生産の展開」『季刊考古学8』1984

（注3）行田裕美「製炭窯」『吉備の考古学的研究（下）』1992 年代は地磁気測定によるといふ。

（注4）伊藤晴明氏の教示による。

（注5）郡家町教育委員会『山ノ上通山遺跡群発掘調査 現場説明会資料』1995

（注6）玉湯町教育委員会『出雲玉作跡保存管理計画策定報告書II－玉ノ宮地区』1990

（注7）島根県教育委員会『徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』1996

大谷Ⅱ遺跡の横口式窯跡の地磁気年代

島根大学総合理工学部 時枝克安、成 亨美、渡部道貴

1 地磁気年代法の仕組

地磁気は一定ではなく不規則な変動をしている。地磁気変動には周期の短いものから長いものまで様々な成分が含まれているが、なかでも、10年以上経過してはじめて変化が識別できるような緩慢な変動を地磁気永年変化と称している。地磁気年代測定法で時計の機能をはたすのはこの地磁気永年変化であり、過去の地磁気の方向変化を示す曲線に年代を目盛って、地磁気の方向から逆に年代を読みとろうとする。しかし、例えば、ある焼土が何時焼けたかを知りうるとき、焼土が焼けたときの地磁気の方向がどこかに記録されており、それを測定できなくては目的を果たせない。実は、焼けた時の地磁気の方向は焼土の熱残留磁気として記録されている。地磁気年代を求める手順を述べると、まず、焼土の定方位試料を採取し、それらの熱残留磁気を測定して、焼土が最終加熱されたときの地磁気の方向を求める。そして、標準となる地磁気永年変化曲線上にこの方向に近い点をもとめて年代目盛りを読みとることになる。

地磁気中で粘土が焼けると、粘土に含まれる磁鉄鉱、赤鉄鉱等の磁性鉱物が担い手となって、焼土は熱残留磁気を帯びる。この熱残留磁気の方向は焼けたときの地磁気の方向に一致し、しかも非常に安定であり、磁性鉱物のキュリー温度（磁鉄鉱：578°C、赤鉄鉱：675°C）以上に再加熱されないかぎり数万年以上年代が経過しても変化しない。もし、再加熱によって、焼土がキュリー温度以上になった場合は、それまで保持していた残留磁気は完全に消滅し、その代わり、新たに再加熱時の地磁気の方向を向いた熱残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気を熱残留磁気として正確に記憶する。それゆえ、あらかじめ、年代既知の熱残留磁気を測定して、地磁気の方向の時間的変化をグラフにしておけば、このグラフを時計の代わりに用いて、焼土の焼けた年代を推定できる。この時計では地磁気の方向が針に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の針の位置を記憶することになる。日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線がかなり詳しく測定されているので¹⁾、この方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代測定法の詳細については中島による解説が参考になる²⁾。

2 地磁気年代測定法の問題点

第一に、地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所での標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違していることがある。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土の熱残留磁気をその場所の標準曲線と比較しなければならない。形の相違が少ないときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気の方向を比較しなければならない。しかし、近畿、中国地域の過去の調査例では、広岡による西南日本の標準曲線から

求められた地磁気年代と土器年代はうまく整合しているので、これらの地域においてこの標準曲線を代用しても問題はない。

第二に指摘すべきことは、「地磁気年代は地磁気変動という物理現象から推定されるので土器編年に左右されない」と思われるがちであるが、これは誤解であり、両者には密接な相互依存の関係があるという事実である。すなわち、古記録等にもとづく少數の年代定点をのぞくと、標準曲線上の年代目盛りのほとんどは考古学の土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、地磁気年代が年代定点に近いときには問題がないが、年代定点から遠くなるほど土器編年の影響をより強く受ける事になり、もし、土器編年に改訂があれば、地磁気年代もそれに伴って訂正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代と土器年代の相互依存は解消するが、現状ではやむをえない。しかし、地磁気を媒介とする地磁気年代測定法は、無遺物の場合でも有効である点、また、遠隔地の土器編年を地磁気変動を通じて対比できる点で独自の性格をもつ。

3 遺構と試料

2基の横口付窯跡は丘陵頂上の少し下位にあるクサリ礫層を斜面に沿って水平方向にくりぬいて構築され、煙道部分を突き合わせた形で縦に並んでおり、細長い窯体、片側に並ぶ横口、緩傾斜の窯底という特徴的な構造をもつ。同様の構造の窯は多数報告されているが、窯の使用目的に関する統一見解はない。窯の局部的変形を検出して正しい地磁気年代を求めるために、床面の広い範囲から定方位試料を採取した。採取個数は1号窯から18個、2号窯から14個である。

4 自然残留磁気と交流消磁の測定結果

試料の残留磁気の方向と強度をスピナー磁力計で測定した。図1、2は1号窯と2号窯の自然残留磁気の方向の測定結果である。1号窯ではデータの集中が見られるが（図1小円内）、これらの平均方向を計算すると、伏角～67度、偏角～4度Eとなり、図5を参照すると分かるように過去2000年間の地磁気変動範囲をかなり大きく逸脱している。また、2号窯ではデータが大きく分散している。（図2）。このままでは、どちらの窯についても地磁気年代を推定できないので、交流消磁を行った。

交流消磁というのは、試料を磁場中に置き、磁場のある強さHから零まで滑らかに減少させて、Hよりも弱い抗磁力をもつ磁化成分を消去する方法である。試料の残留磁気には、最終焼成時の1次磁化（熱残留磁気）のほかに、それ以後の2次磁化（粘性残留磁気、落雷による誘導残留磁気、後世の加熱による熱残留磁気等）が付加されている場合があり、焼土の焼成度が低いほど2次磁化の割合が増加する。もし、残留磁気の方向分散の主因が粘性残留磁気等の弱い抗磁力の2次磁化が消去され、残留磁気の方向のまとまりが改善される。

交流消磁（H=10mT）の結果を図3、4に示す。どちらの窯についても、図の小円内にデータの集中が見られる。小円内のデータが10mT以上の交流消磁に対して安定かどうかを確認するために、小円内から各1個の試料を選んで交流消磁（H=20、30、40mT）を行ったが、磁化方向は変化しなかった。それゆえ、図3、4の小円内のデータは、2次磁化が完全に除去さ

れており、最終焼成時の熱残留磁気の方向を正しく示していると判断できる。さらに、丘陵の地盤は安定しており、窯が最終焼成後に全体として傾いた形跡はないので、図3、4の小円内のデータの平均方向は横口式窯跡の最終焼成時の地磁気の方向と一致すると考えられる。小円内のデータの平均方向と誤差の目安となる数値を計算すると次のようになる。

遺構の残留磁気の平均方向（交流消磁10mT後）

遺構	Im	Dm	k	θ_{95}	n/N
横口式窯跡1号	58.17度	13.26度W	1187	1.61度	8/18
横口式窯跡2号	63.88	6.00	2928	1.70	4/14

Im：平均伏角 k : Fisherの信頼度係数 n/N : 採用試料数／採取試料数
Dm : 平均偏角 θ_{95} : 95%誤差角

5 地磁気年代の推定と考察

図5は大谷II遺跡の横口付窯跡の残留磁気の平均方向（+印）と誤差の範囲（点線の楕円）、および、西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化である。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向から近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとればよい。年代誤差も点線の楕円から同様にして推定できる。このようにして地磁気年代を求めるとき、横口式窯跡1号についてA.D.650±40、横口式窯跡2号についてA.D.660±50を得る。

大谷II遺跡の横口付窯跡の地磁気年代

遺構	地磁気年代
横口式窯跡1号	A.D.650±40
横口式窯跡2号	A.D.660±50

地磁気年代推定の元になった交流消磁（10mT）のデータについて、より強磁場の交流消磁で残留磁気の方向が不变であることから、2次磁化の完全除去が確認できており、また、窯の広い範囲の残留磁気の方向が揃っていることから窯の局部的変形の影響を全く受けていない。さらに、窯の地盤には窯全体の傾動を示す形跡がないので、残留磁気の方向は最終焼成時の地磁気の方向を正しく示している。したがって、ここで得られた地磁気年代は高い信頼性をもつと考えてよい。

最後に、試料採取にあたってお世話になった足立克己氏をはじめとする島根県教育委員会の皆様に厚く感謝します。

註(1) 広岡公夫

考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向

第4紀研究 15, 200-203, 1978

(2) 中島正志、夏原信義

「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9 ニューサイエンス社

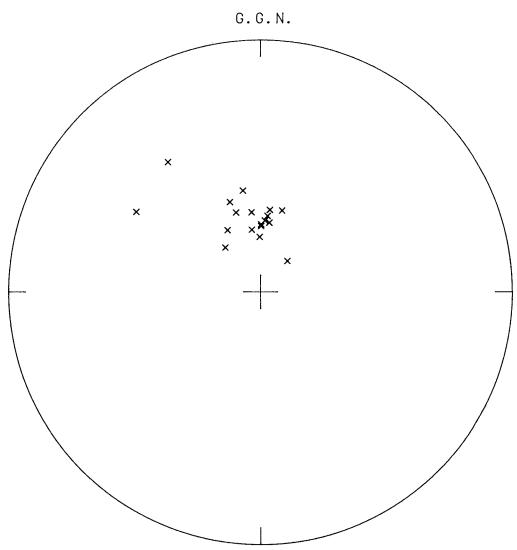


図1 大谷II遺跡の横口付窯跡1号の
残留磁気の方向

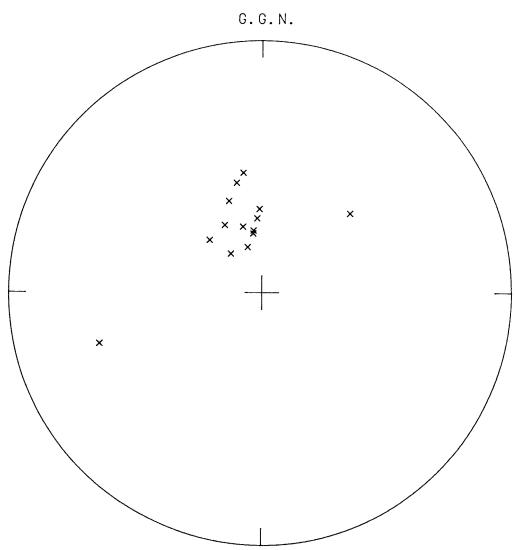


図2 大谷II遺跡の横口付窯跡2号の
残留磁気の方向

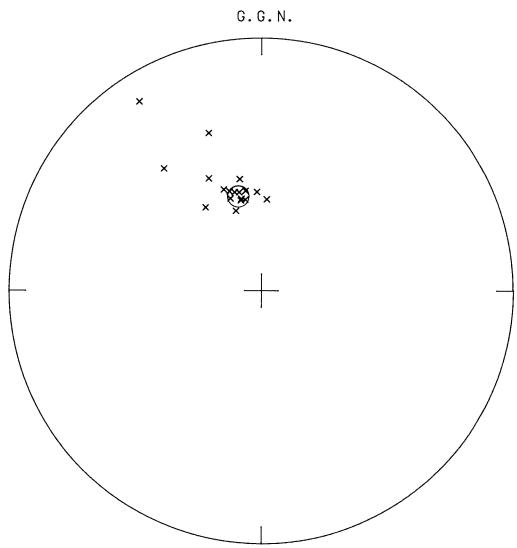


図3 大谷II遺跡の横口付窯跡1号の
残留磁気の方向（交流消磁10mT）

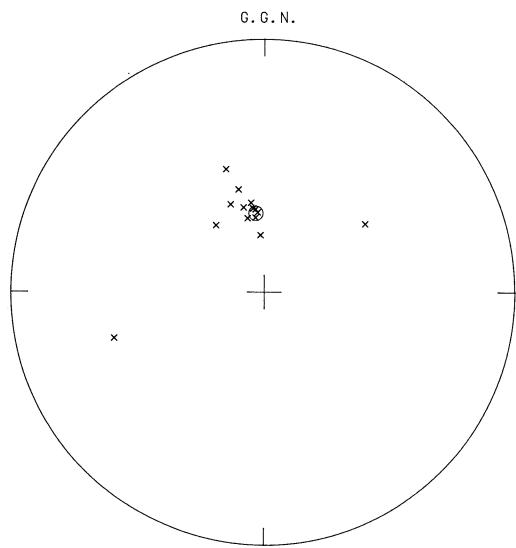


図4 大谷II遺跡の横口付窯跡2号の
残留磁気の方向（交流消磁10mT）

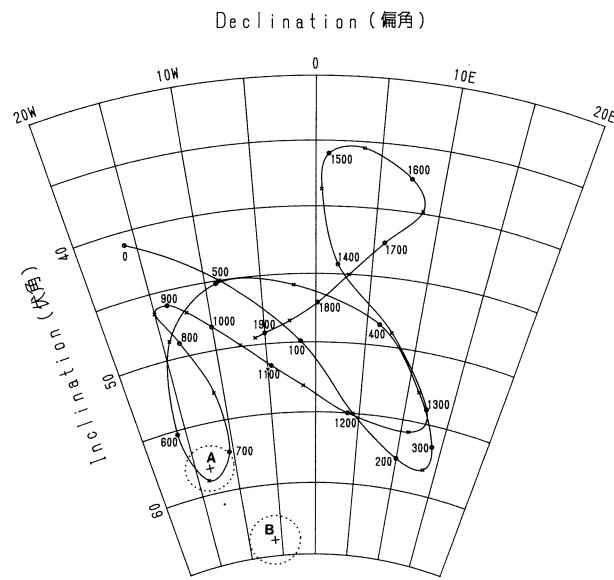


図5 大谷II遺跡の横口付窯跡の残留磁気の平均方向（+印）と誤差の範囲（点線の楕円）、
および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線（A：1号窯、B：2号窯）

布志名才の神遺跡

第1節 調査の概要と経過

この遺跡は松江市と玉湯町の境、玉湯町布志名に所在する。遺跡は全長61.4mの前方後円墳である1号墳を含む6基の古墳からなる大角山古墳群の存在する丘陵の裾に位置しており、南には県道浜乃木湯町線が通っている。

布志名才の神遺跡は、二段に積まれた石積基壇とその上に置かれた祠から構成される。遺跡は現在も信仰の対象となっており、財団法人布志名自治会によって手厚く祀られている。

調査は、基壇上に生えている樹の伐採後、12月22日、写真測量から着手した。祠を遷した後、基壇周辺の崩落などにより二次的に移動した可能性のある石を取り上げ、基壇を明瞭に検出した後、改めて1月20日、写真測量による図化を行った。石積は、自治会からの要望もあり、調査終了後、移築する方針であったため、総て取外した後、用地内に集めて仮置きすることとした。石の取上げは基壇の南側に設けられた階段を南北の中軸線とし、十字にセクションベルトを設定して行った。才の神への奉賽物は、出土地点の記録を作成しながら取上げた。奉賽物の大半を占めるカワラケや古銭などは石積みの表面だけでなく、中からも混じって出土した。石積み除去後、基壇の断ち割りを行ったところ、1.9m下からほぼ平行して東西方向に走る三本の溝状遺構を検出した。これらは、道路遺構を構成する側溝の可能性のあるものであった。総ての調査は平成8年2月8日に終了した。

第2節 石積基壇の調査

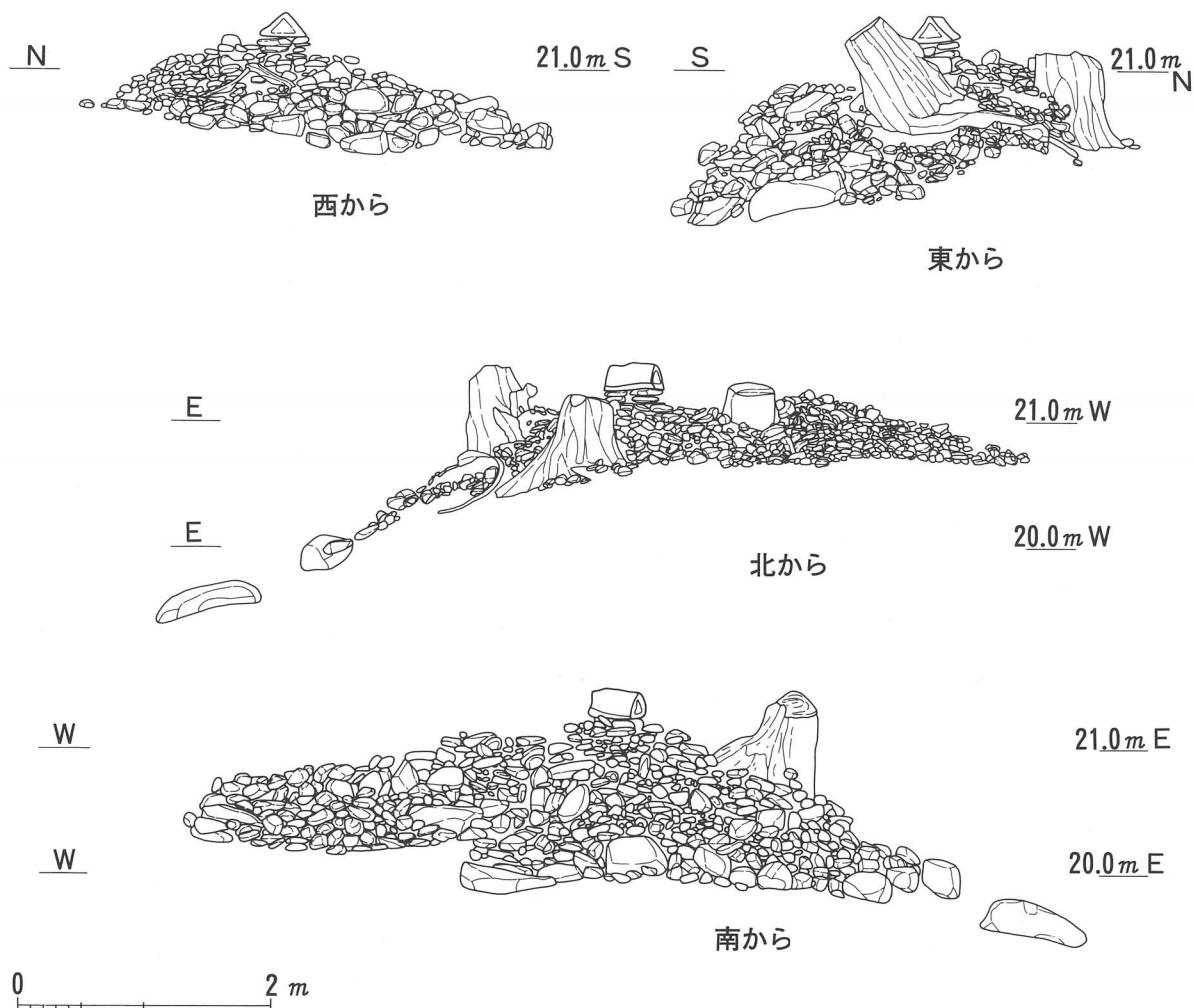
基壇は、調査前の地形測量で、南北4.6m、東西9.0mの平坦面の東寄りに築かれている。県道から基壇の北側に向けては、幅0.2mほどの徑が延びていた。

基壇は、平面がいびつな台形を呈している。南西隅と西、南辺が丁寧な造りであるのに対し、南東隅はだれており明瞭な隅をもたず、北東隅も樹によって判然としない形状となっている。規模は北辺が2.8m以上、西辺は長さ3.3m、南辺は長さ5.6mを測る。石積上面までの高さは、北面で0.5m、西面で0.6m、南面で1.1m、東面で0.7~0.9mを測る。石積は0.1~0.2m角の不定形の自然石によって構成されるが、石積上面には指頭大の玉砂利も散見された。

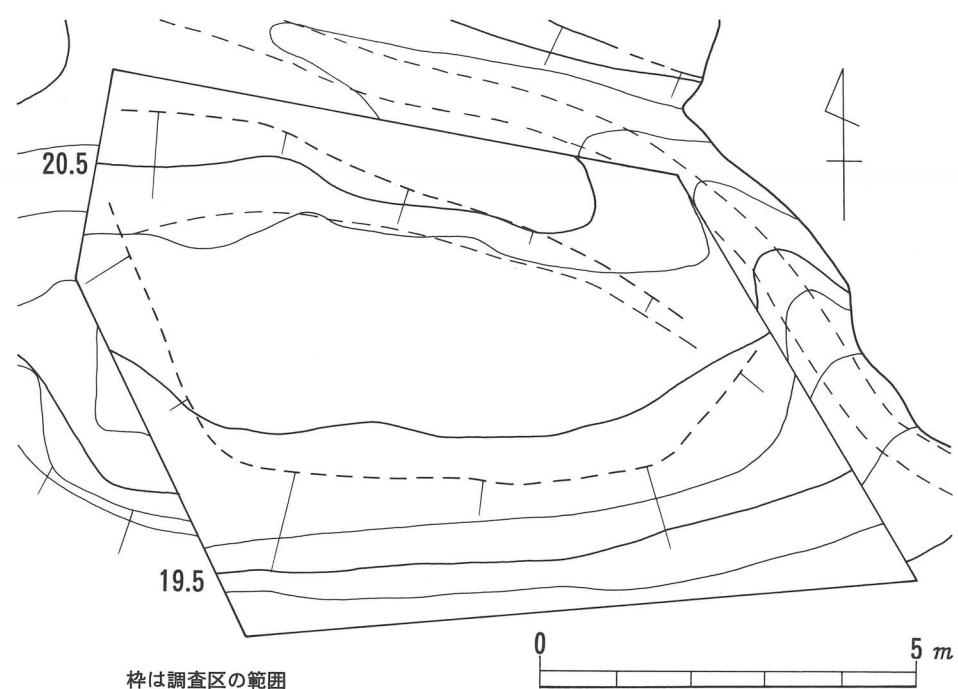
祠は基壇の中心から、やや北東にずれた所に置かれている。祠は0.5×0.36m、高さ0.1mの平たい石の上に、数枚の不整形な板石を挟んで、0.3m角、高さ0.2mの家形に加工した石を組み合わせている。南辺の中央から祠に向けて六段の階段が築かれており、その前面には0.6m角、厚さ0.2mの石が置かれている。祠から階段までは1.0mほど離れているが、祠は階段側に向いて置かれている。石積を取り上げていくと基壇のほぼ中心にあたるところ、上面から数cm下のところで、0.24m角、厚さ0.14mの来待石製の板石が出土した。他の石積みを構成する石が自然石であるのに対し、明らかに加工されたものであり、階段の延長線上にも当たる。あるいは、祠を構成していたものかもしれない。



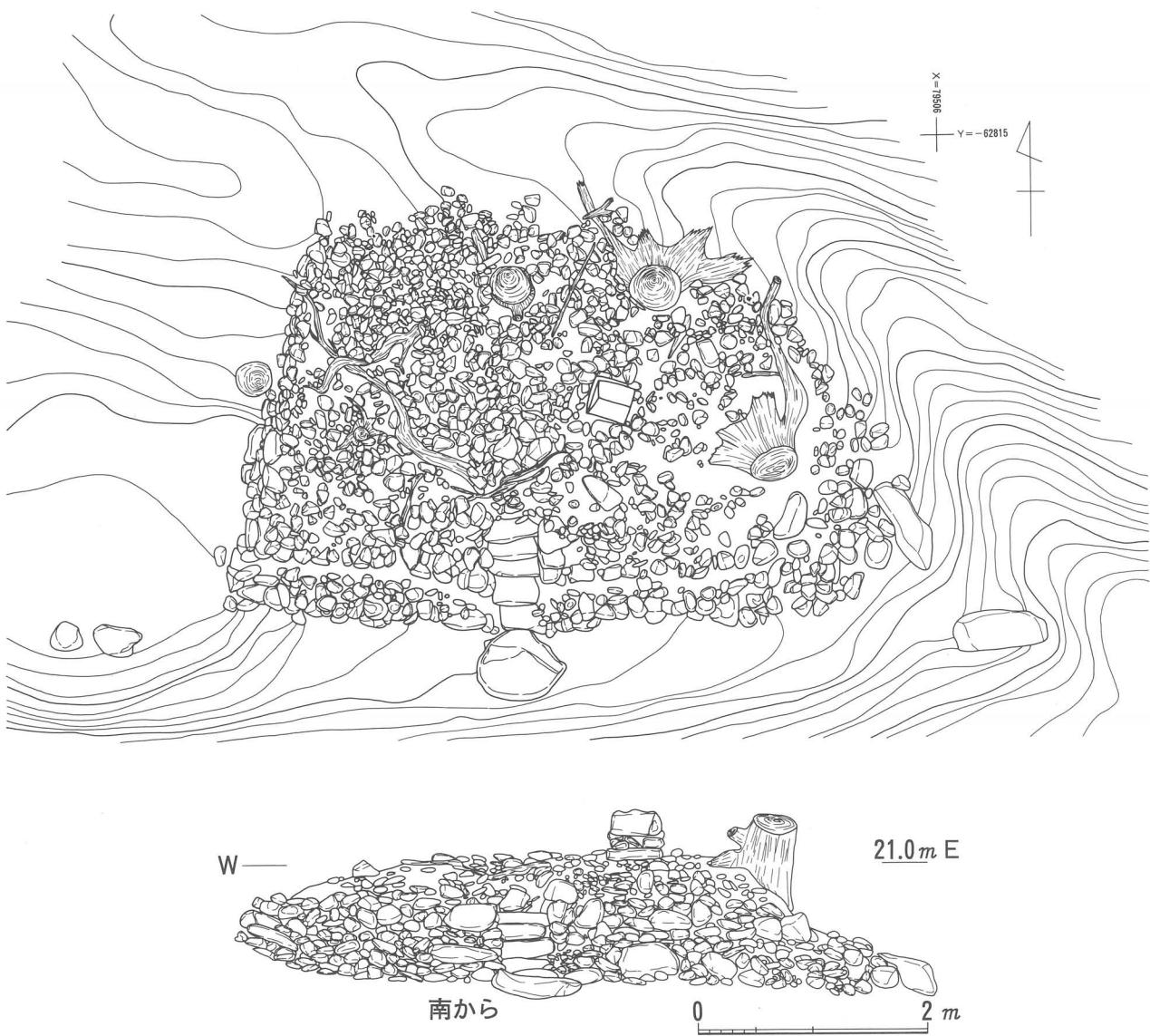
第35図 調査前実測図 ($S=1/60$ 10cmコンター)



第36図 石積基壇立面図 ($S=1/60$)



第37図 調査終了後地形測量図 ($S=1/100$)

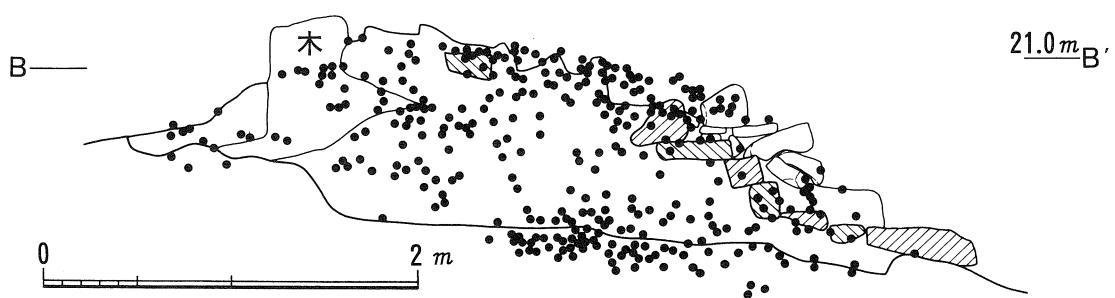
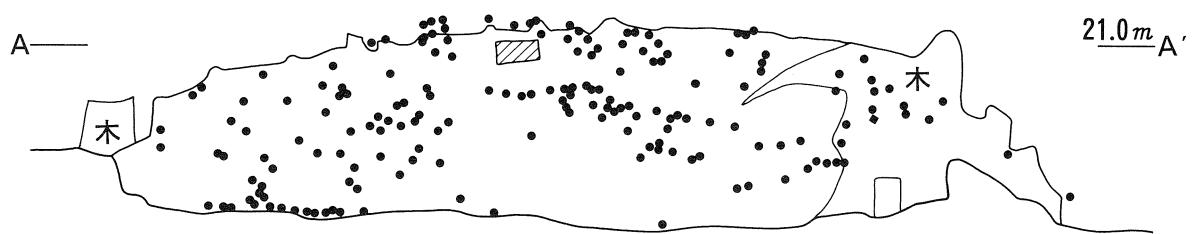


第38図 石積基壇実測図 ($S=1/60$)

基壇は西、南面のみ二段に築かれている。最も残りの良い南で一段目までの高さは0.4mを測り、幅0.2~0.3mの段を造った後、更に高さ0.3~0.4mの段を造り、その上に石を盛り上げて、石積全体を造りだしている。南辺に付設されている階段の最上段は基壇二段目と高さが等しいことから、ここまでが一つの作業工程であったものと思われる。

石積除去後の地形観察の結果、石積基壇は北東から南東に延びる丘陵の裾をL字形にカットして平坦面を造りだしていることがわかった。平坦面は、平面が逆台形を呈している。各辺の長さは北辺が3.3m、西辺が1.2m、南辺が2.4m、東辺が0.6m。平坦面造成段階で、既に南西隅を意識していたものと推定される。石積は、この平坦面をさらに深さ0.3m掘り下げ、段を造りだした後、積み上げている。

「才の神」へ供献されたものの、大半はカワラケ、古銭であったが、その他にも人形、馬、サザエなどが出土した。出土地点は階段の周辺が密であるが、そのほか基壇の上に置かれたも



第39図 遺物出土状態 ($S = 1/40$)

のや、石積内に混ざって出土しているものが認められた。

カワラケは1点のみ置かれたもののが多かったが、複数枚重ねてあるものも認められた。調査時には見られなかつたが、カワラケ数枚を藁で束ねて供えた場合もあったらしい。⁽¹⁾ また、カワラケの上にお神酒徳利二本が置かれているものもあった。1枚のみのカワラケは天地逆なもの、正位なものの両者ともあり、違いは明確でない。古銭は、江戸時代から現代にわたるもののが石積内から入り乱れて出土しており、必ずしも古い時期の古銭が下位から出土しているというわけではない。⁽²⁾ 特に祠の回りから階段にかけて多く出土している。これらは、2～3枚がまとまっている場合も見られたが、昭和55年の五円玉と新寛永通寶が同一地点から出土するなど、必ずしも同じ時期に供えられたとは断定できない。人形のうち恵比須、大黒天は7cmほど離れて置かれているがセットで供えられた可能性が考えられる。8体出土した陶製の馬のうち、図版28-①の左から3・4番目のものは同一の型で造られたものであり、近接して出土していることから一対で供えられたものかもしれない。その他は単体で出土している。

注

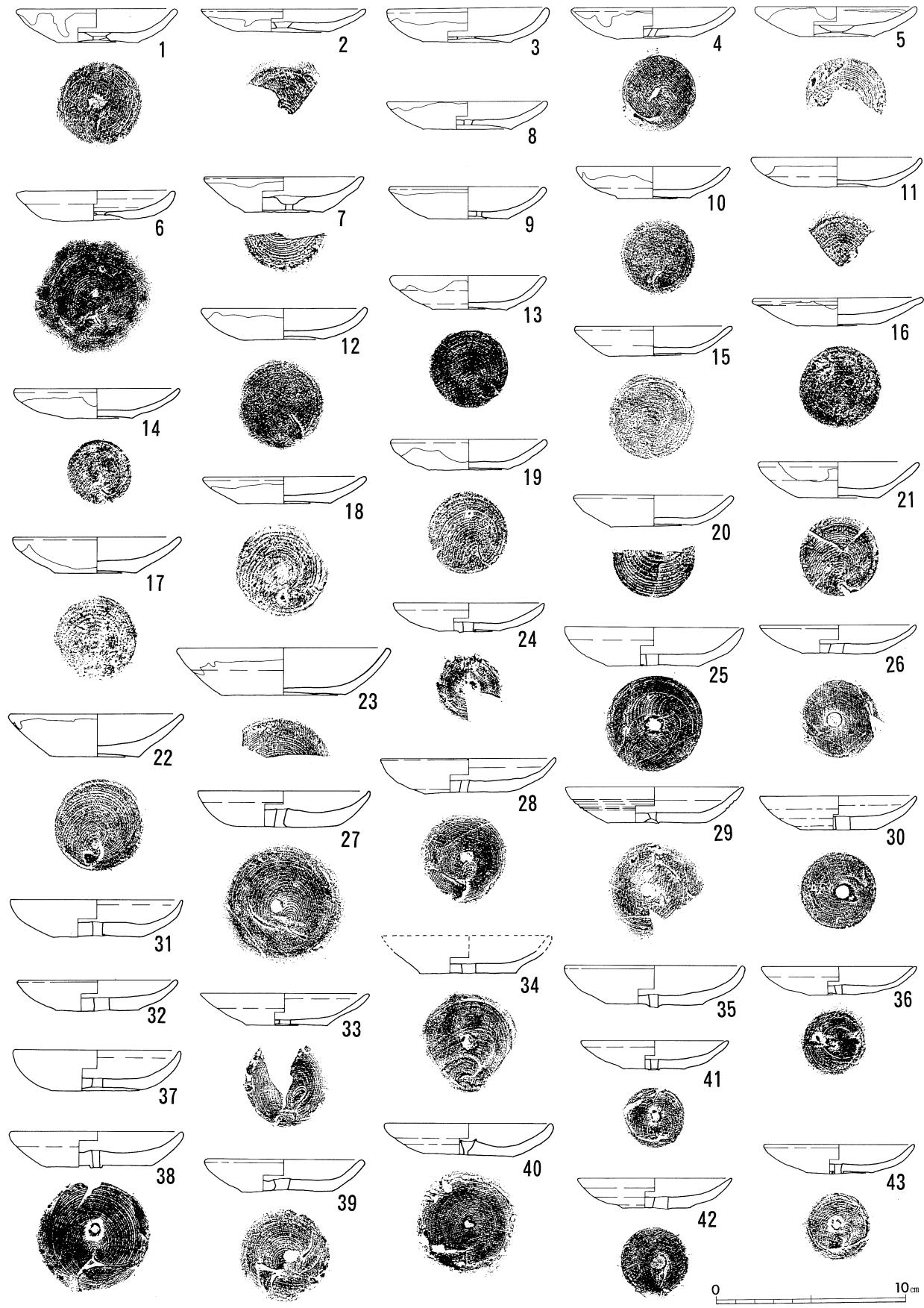
- (1) 出雲玉作資料館館長、勝部衛氏のご教示による。
- (2) 第39図では平面図と垂直分布図を載せている。この図は総ての遺物について、扱っているが、カワラケ、古銭については特に年代決定の指標になるものと考え、個別に検討を加えた。古銭については、新旧入り乱れた状態で出土しているということが分かり、カワラケについては充分な解析を加えることができなかった。

第3節 出土遺物

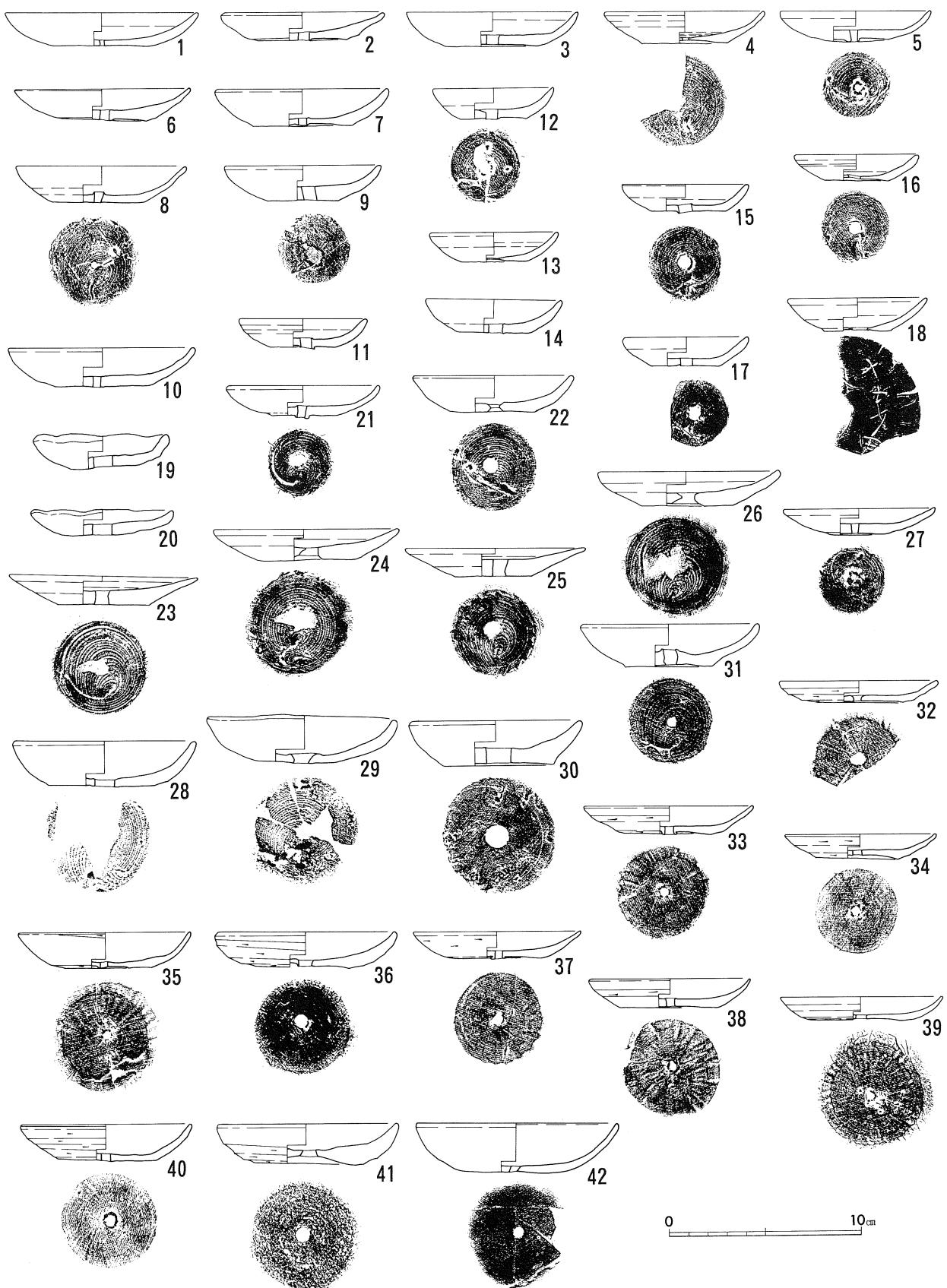
カワラケ (第40図～47図 図版22～25) 才の神遺跡で出土したカワラケは、底部が穿孔されるものが多くみられた。底部穿孔は信仰にともなうと考えられるため、穿孔の有無を中心に分類した。

出土したカワラケは、赤褐色の釉をかけた陶器と、無釉で素焼きのいわゆる「カワラケ」とがある。釉をかけたものは比較的数が少なく、そのうち23点を図示した(第40図1～23 図版22)。いずれも口縁部が内湾する浅いもので、硬質である。釉は外面口縁部から内面にかけてかけられ、外面口縁部下半から底部にかけては釉はかけられていない。底部は回転糸切り痕がそのまま残っている。口径8.1～9.4cm、底径3.5～5cm、高さ1.2cm～2.5cmを測り、器形、法量とともに似たカワラケである。底部が穿孔されるもの(第40図1～9)と穿孔されないもの(第40図10～23)があり、底部が穿孔されるカワラケはすべて焼成後の穿孔である。

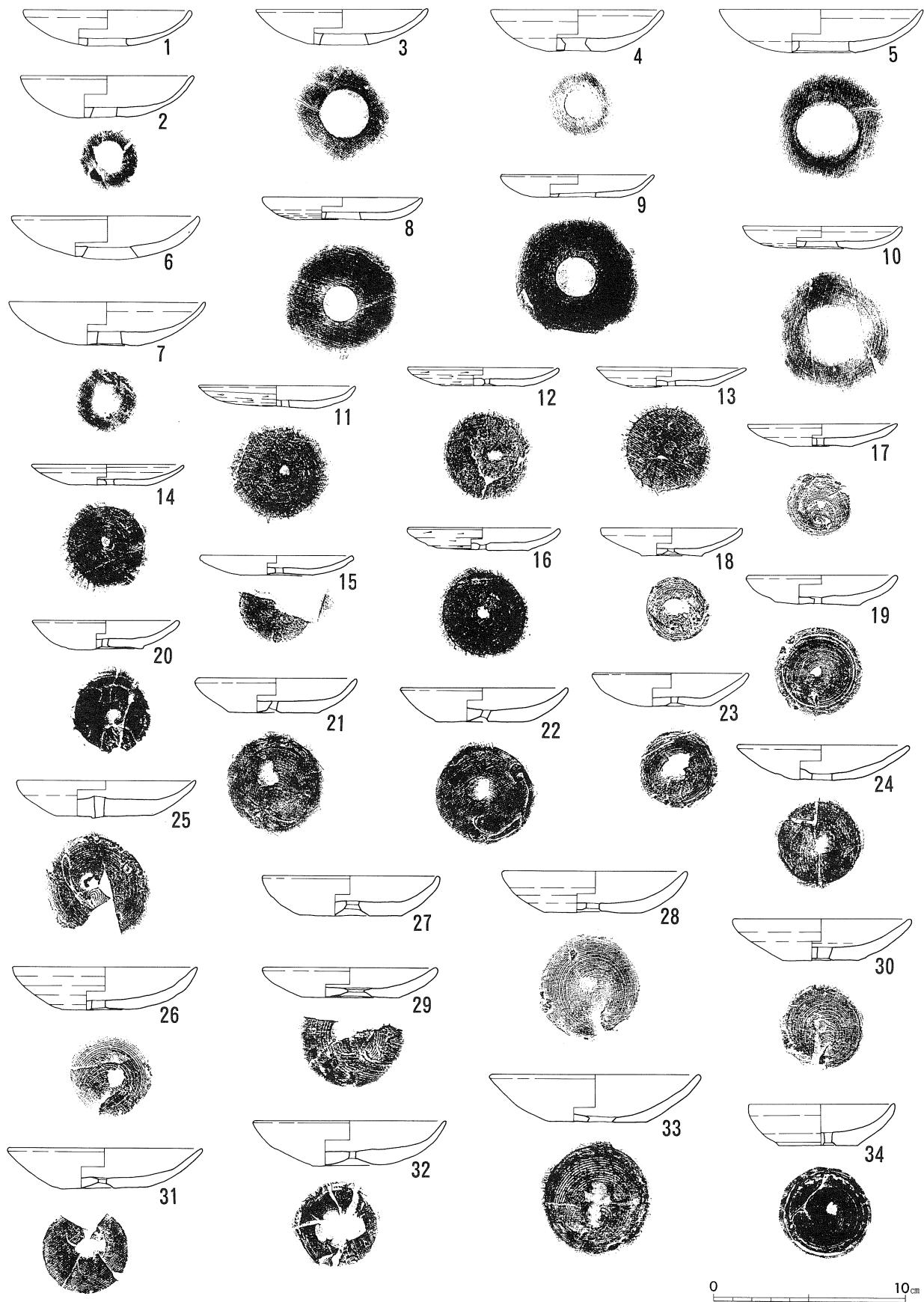
無釉で素焼きのカワラケも底部穿孔があるもの(I、II類 第40図24～第45図40)とないもの(III類)とがあり、底部穿孔されるものはさらに焼成前に穿孔されたもの(I類 第40図24～第42図10 図版22・23)と焼成後に穿孔されたもの(II類 第42図11～第45図40 図版23)



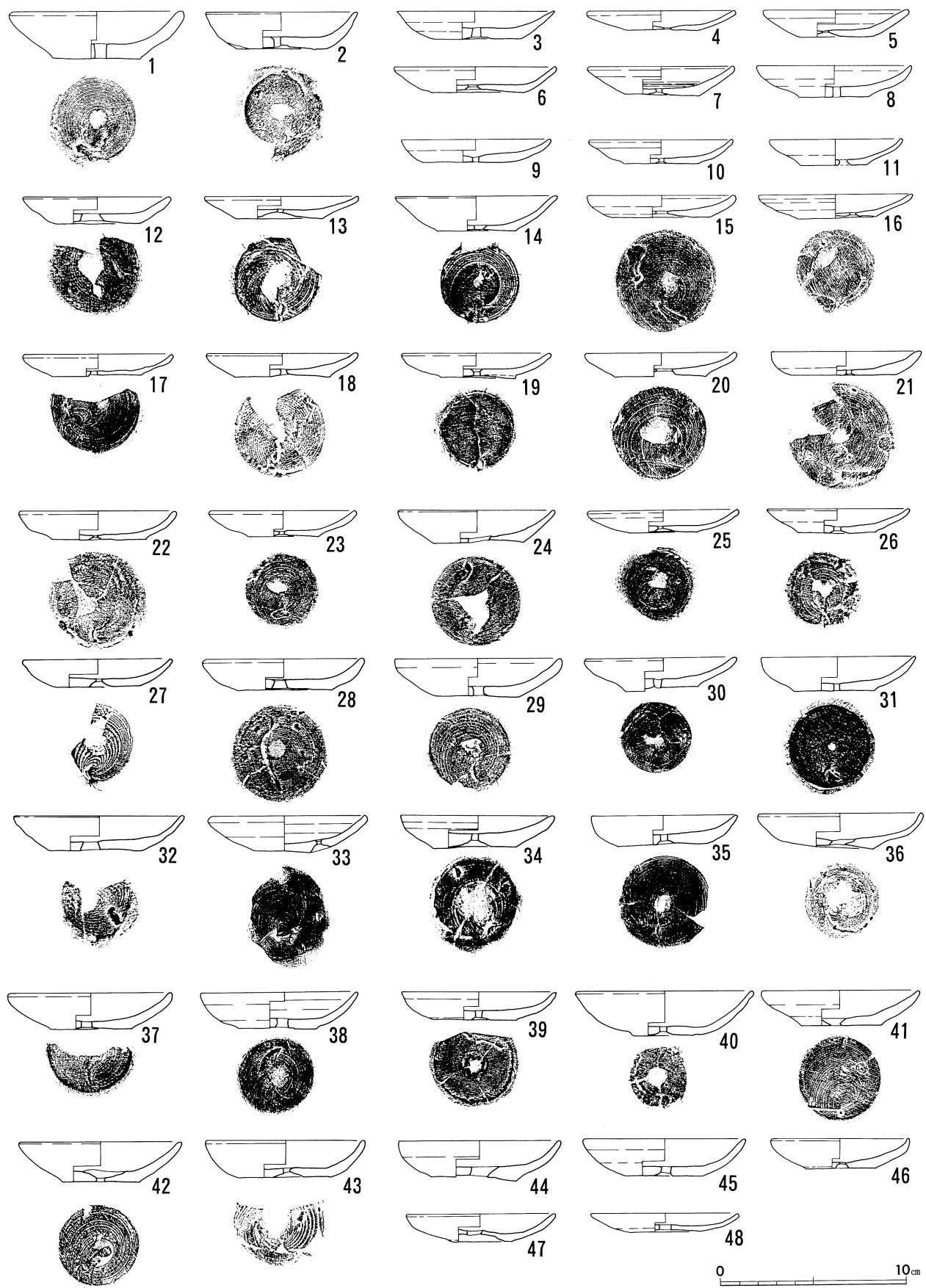
第40図 カワラケ (1) ($S=1/3$)



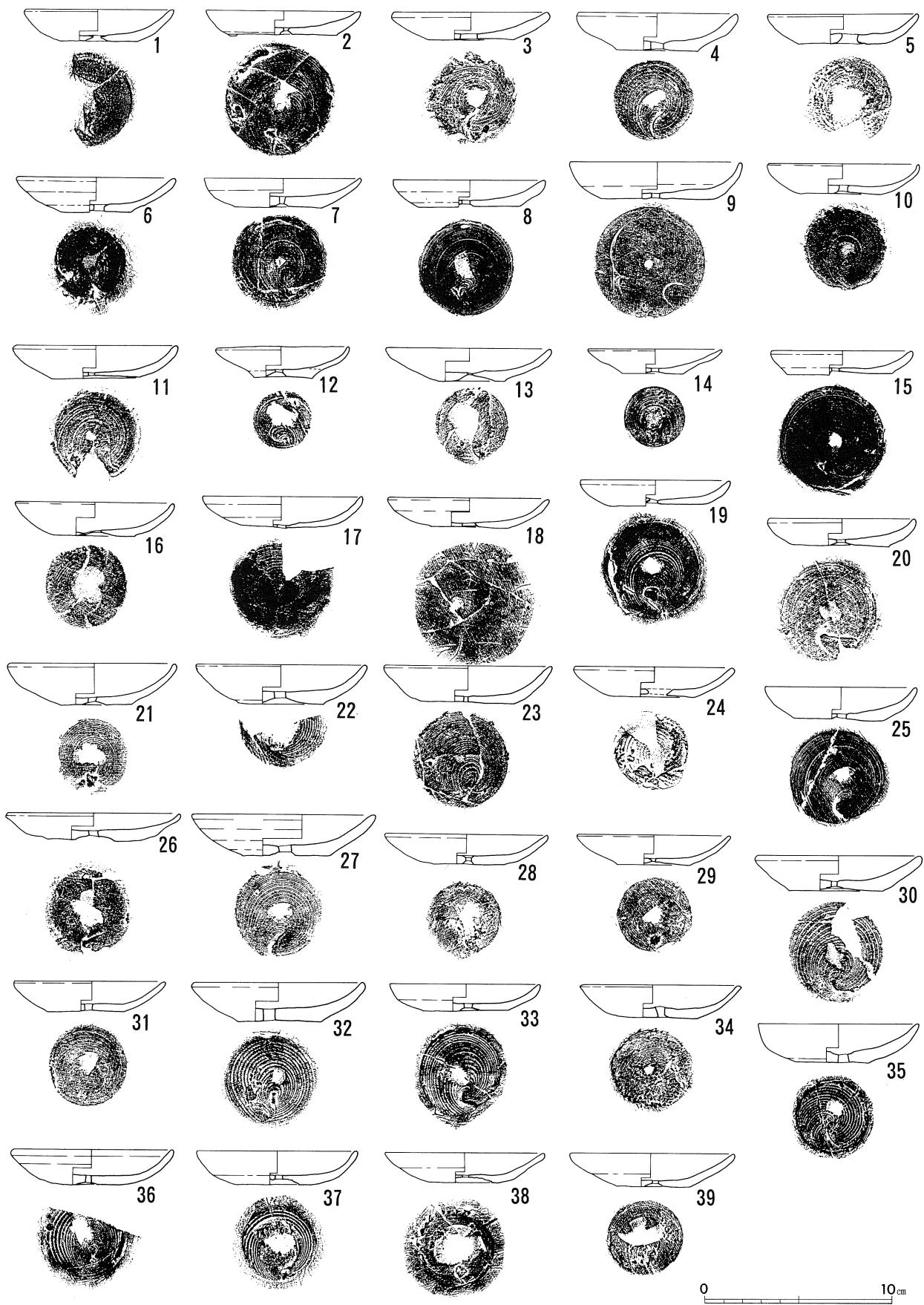
第41図 カワラケ (2) ($S=1/3$)



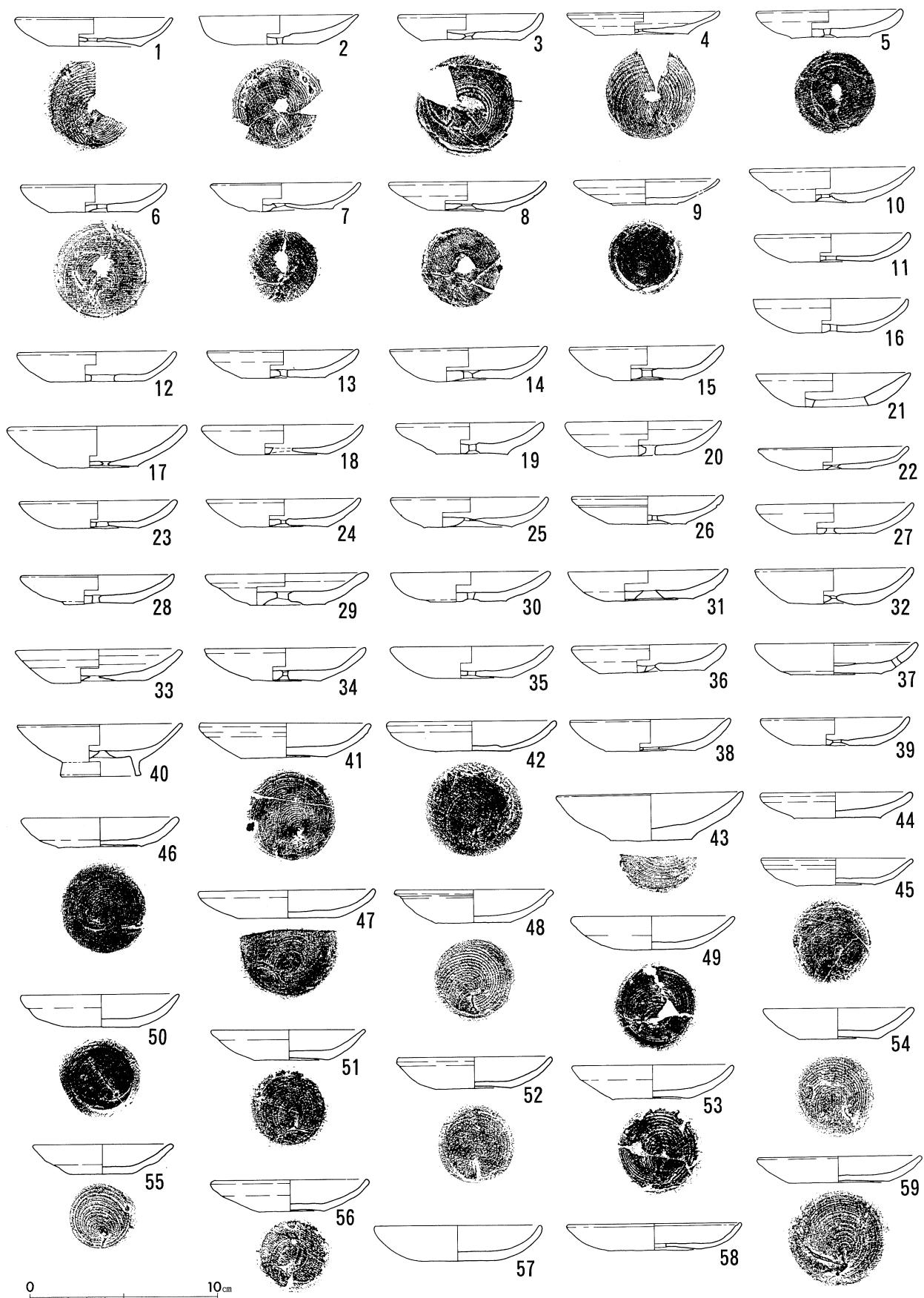
第42図 カワラケ (3) ($S=1/3$)



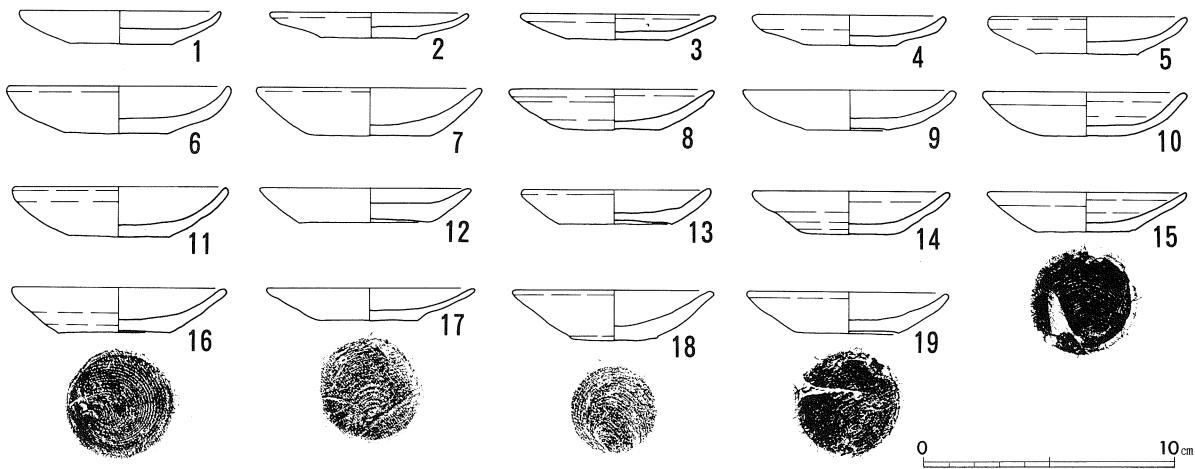
第43図 カワラケ (4) ($S=1/3$)



第44図 カワラケ (5) ($S=1/3$)



第45図 カワラケ (6) ($S=1/3$)



第46図 カワラケ (7) ($S=1/3$)

とに分けられる。まれに底部ではなく口縁部に穿孔されるものがある(第45図37)。I類は回転糸切り痕を残すものが多い(A 第40図24~30など 図版22)、穿孔した後に底部調整するもの(B 第41図32~第42図10など 図版23)がわずかながらある。この底部調整には、削り調整(B 1 第41図32~41)と回転なで調整(B 2 第41図41~第42図10)の2種類がみられる。焼成前穿孔のうちIA類は孔の大きさが径4~5mmとほぼ同じであるが、IB類は孔径が4~5mmのもの(第41図31~42など)、8mm前後のもの(第41図30など)、2cm以上のもの(第42図1~10など)などがある。IB類は白灰色を呈すものが多く、IIA・II・III類は赤褐色を呈すものが多い。器形

なども違うように感じられ、

IB類は他と生産地が違う

可能性がある。第42図11~

13は穿孔は焼成後であるが、

IB類と同じ産地である可

能性が高い。また、第41図

19、20は手捏ねによる成形

で、ろくろが使用されてい

ない特異なカワラケである。

これも生産地が違う可能性

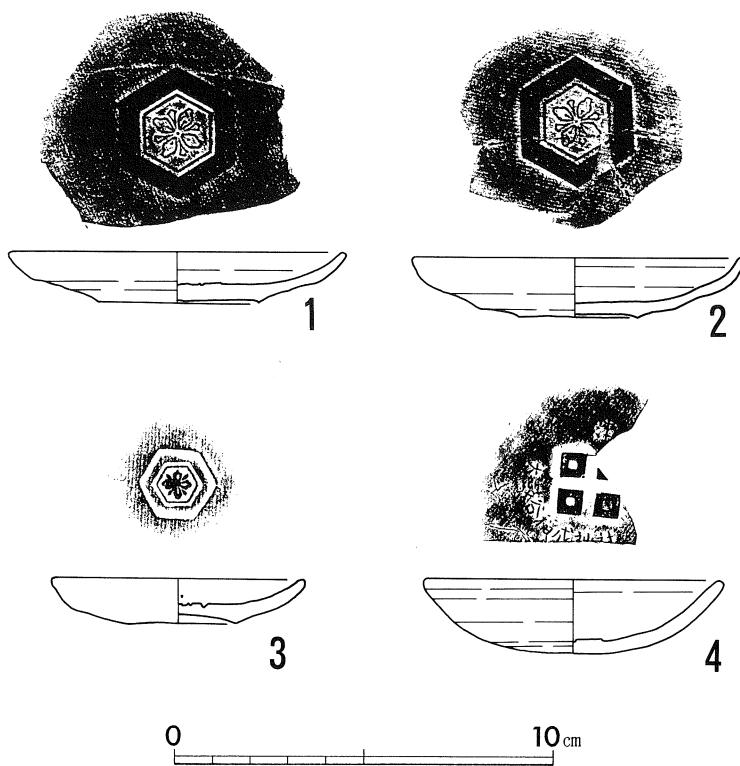
がある。

焼成後に穿孔されたもの

(II類)は錐など回転作用

による穿孔ではなく、打撃

によって穿孔されたものば



第47図 カワラケ (7) ($S=1/3$)

かりである。孔の径や形もまちまちで、定まった形態の孔を空けようとした意図は窺えない。底部穿孔されないⅢ類はすべて回転糸切り未調整である（A類）。

以上のカワラケのうち、第41図18と第44図23には内面にへら書きによって文字が書かれている（図版25）。前者は「十七才男」、後者は「□□五□」と判読できる。ともに焼成前に書かれたものである。また、内面に墨書のあるカワラケが8点出土し（図版24）、判読できるのは「六十三才男」（第41図27）、「十八才 申の年」（第44図11）、「明治三 十六□」（第44図17）、「申年」（第45図9）、「頼主」（第45図37）、「酉年五才男」（第45図40）、「□女」（第46図15）の7点であるが、他の1点は重ね書きしてあり判読できない。第47図1～4（図版25）の内面には神社の紋と思われる文様が型押しされており、4の一部には「太鼓谷稻荷神社」と判読できる。

古銭（第48～52図 図版26）寛永通宝から平成4年発行の1円まで合計139枚が奉納されており、信仰の長さが偲ばれる。

第48図1は「康熙通寶」（17世紀後半）で、才の神遺跡で出土した古銭のうち唯一の中国渡来銭である。

寛永通寶は計77枚出土した。このうち「古寛永」と呼ばれる、寛永十三年（1936）初鋳の寛永通寶は17枚（第48図2～17）、寛文八年（1668）以降に鋳造された「新寛永」と呼ばれる寛永通寶は45枚を数える（同図20～第50図64）。ほとんどは銅製だが、50のみは鉄製である。「新寛永」にはこのほか「高津銭」1枚（初鋳1741年 摂津高津新地所鑄）、「長崎銭」1枚、（同1767年 長崎所鑄）、「文銭」6枚、（同1668年 江戸亀戸所鑄）、「四文銭」2枚、（同1769年 江戸十万坪所鑄）などがある。

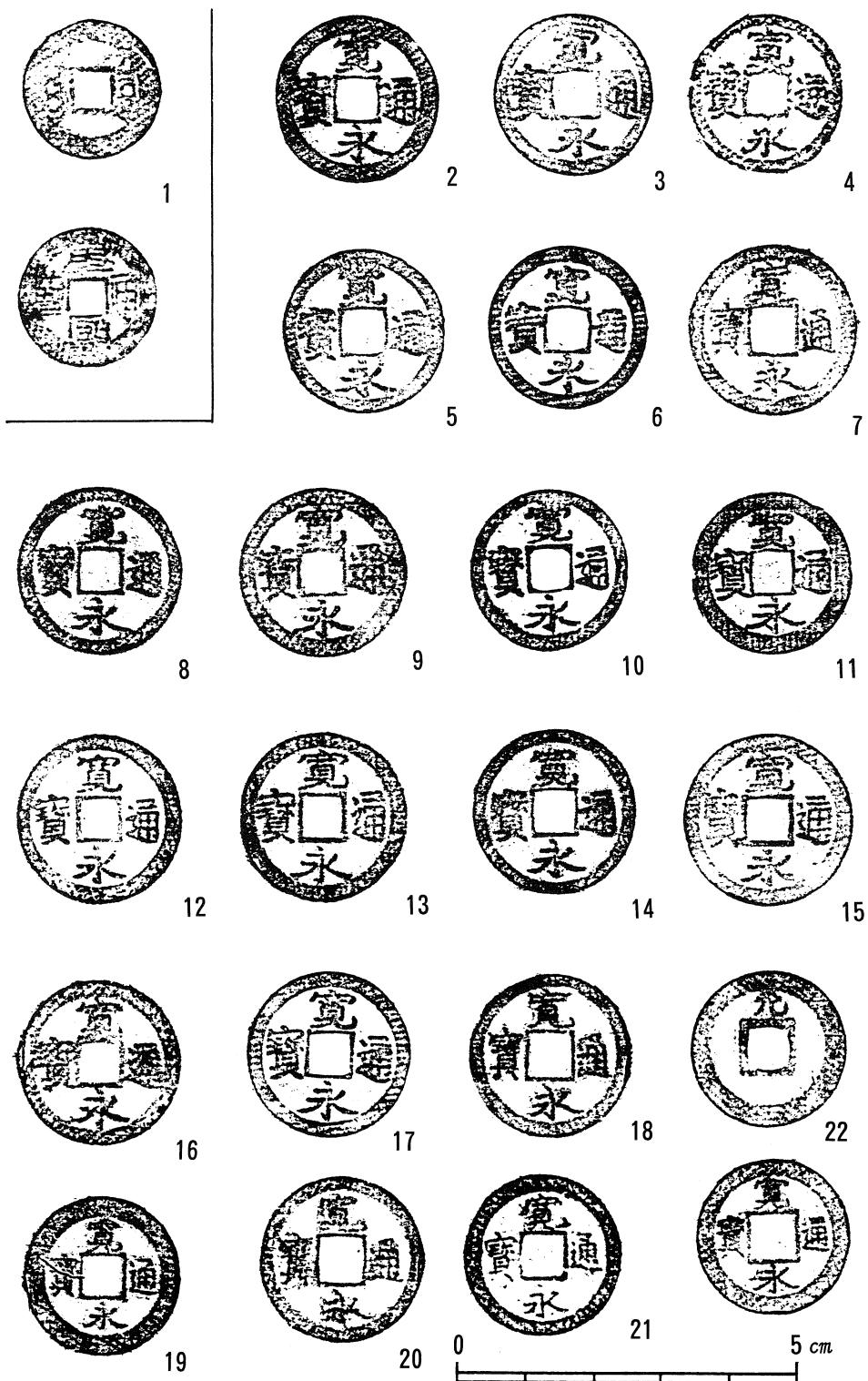
このほかに「天保通寶」（同1835年）も1点出土している。「天保通寶」は上部に小さな穿孔がみられるが、ペンダント状に加工してお守りとしたのであろうか。

明治から戦前の古銭は38枚出土した。これらは半銭、五厘、1銭、2銭、10銭の5種類で、最も古いものは明治6年鋳造の半銭、最も新しいものは昭和21年鋳造の10銭である。出土数は1銭が最も多く（24枚）、次いで半銭の9枚である。鋳造年では大正年間のものが23枚と最も多い。

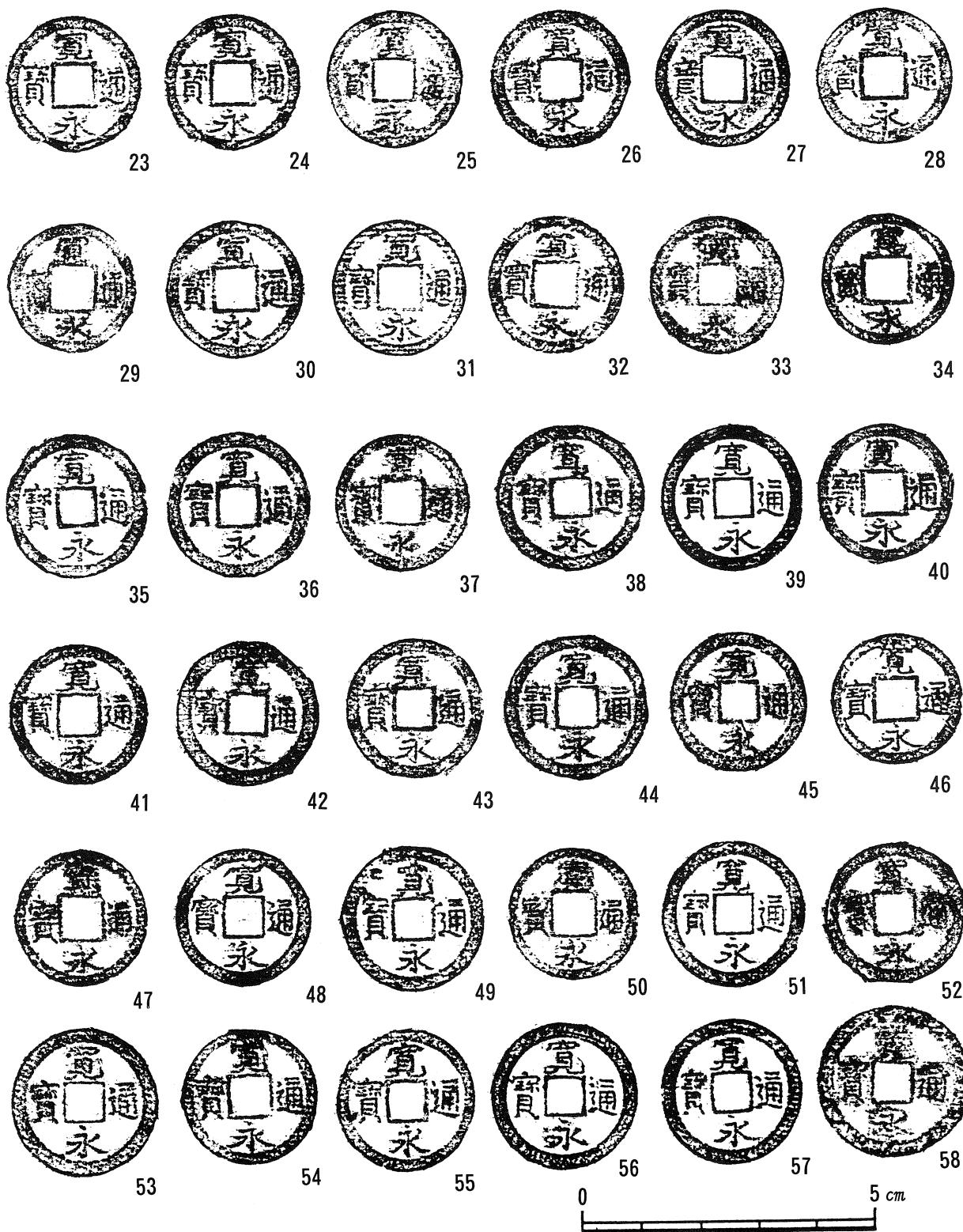
戦後の銭貨は22枚出土した。1円、5円、10円、50円、100円とほとんどの硬貨が供えられていた。鋳造年は昭和30年から平成4年であるが、昭和30年代のものが少なく昭和50年代のものが多いのはやや奇異な感じをうける。

その他の遺物（図版25、27～28）

才の神遺跡ではカワラケ、古銭のほか、サザエ、窯道具、人形、陶器などが奉納されていた。サザエは25個以上確認できた（図版25）。こぶし大の大型のものが多く、側部に人工的に空けられたと思われる孔がみられるものもある。蓋も12個出土している。いずれも貝殻の大きさに

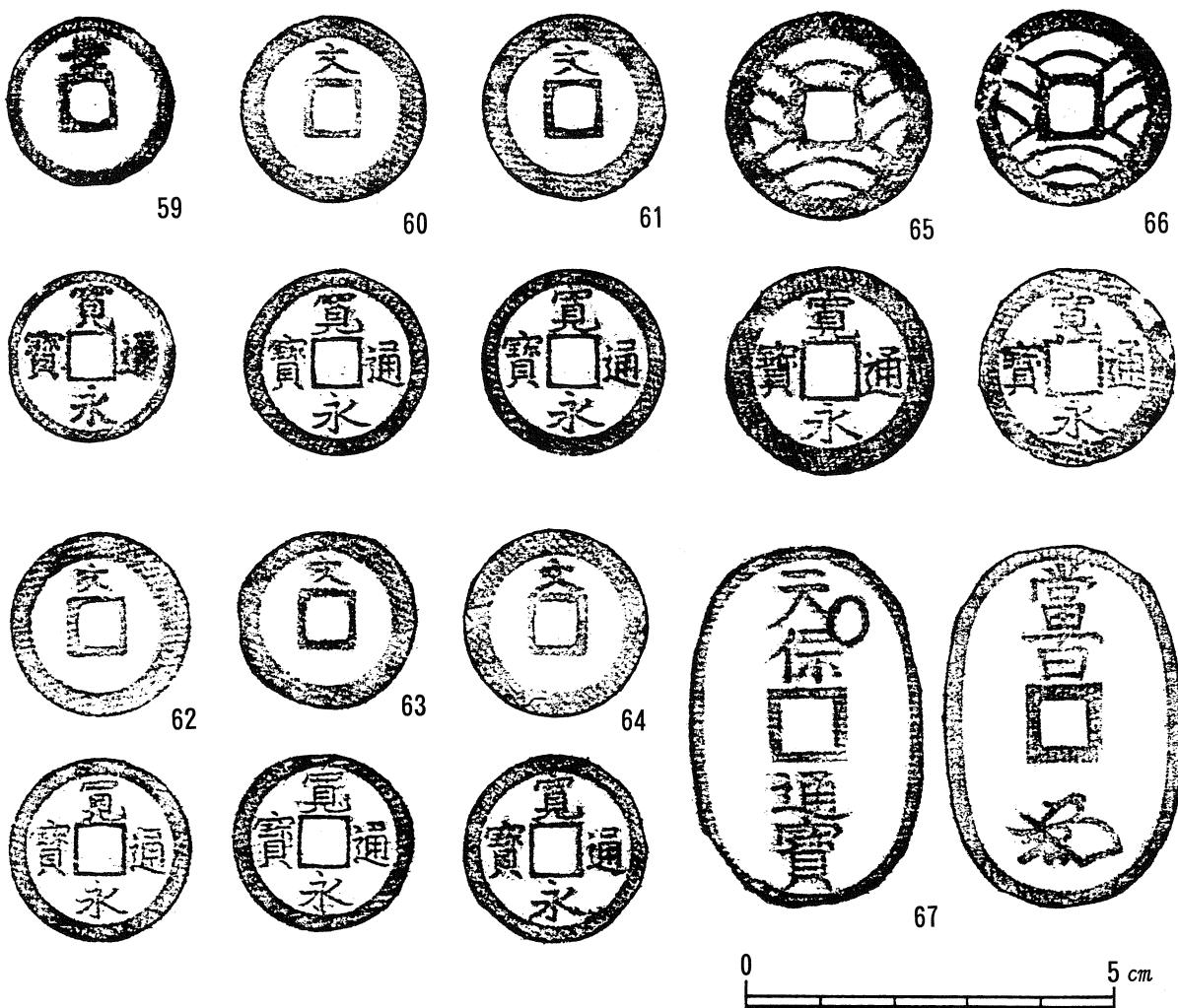


1は康熙通寶、2～17は古寛永、18～22は新寛永（摂津大阪高津錢）
第48図 古銭拓影（1）



58は文錢

第49図 古銭拓影 (2) “新寛永通寶”



59は長崎銭、60～64は文銭、65・66は四文銭、67は天保通寶

第50図 古銭拓影 (3)

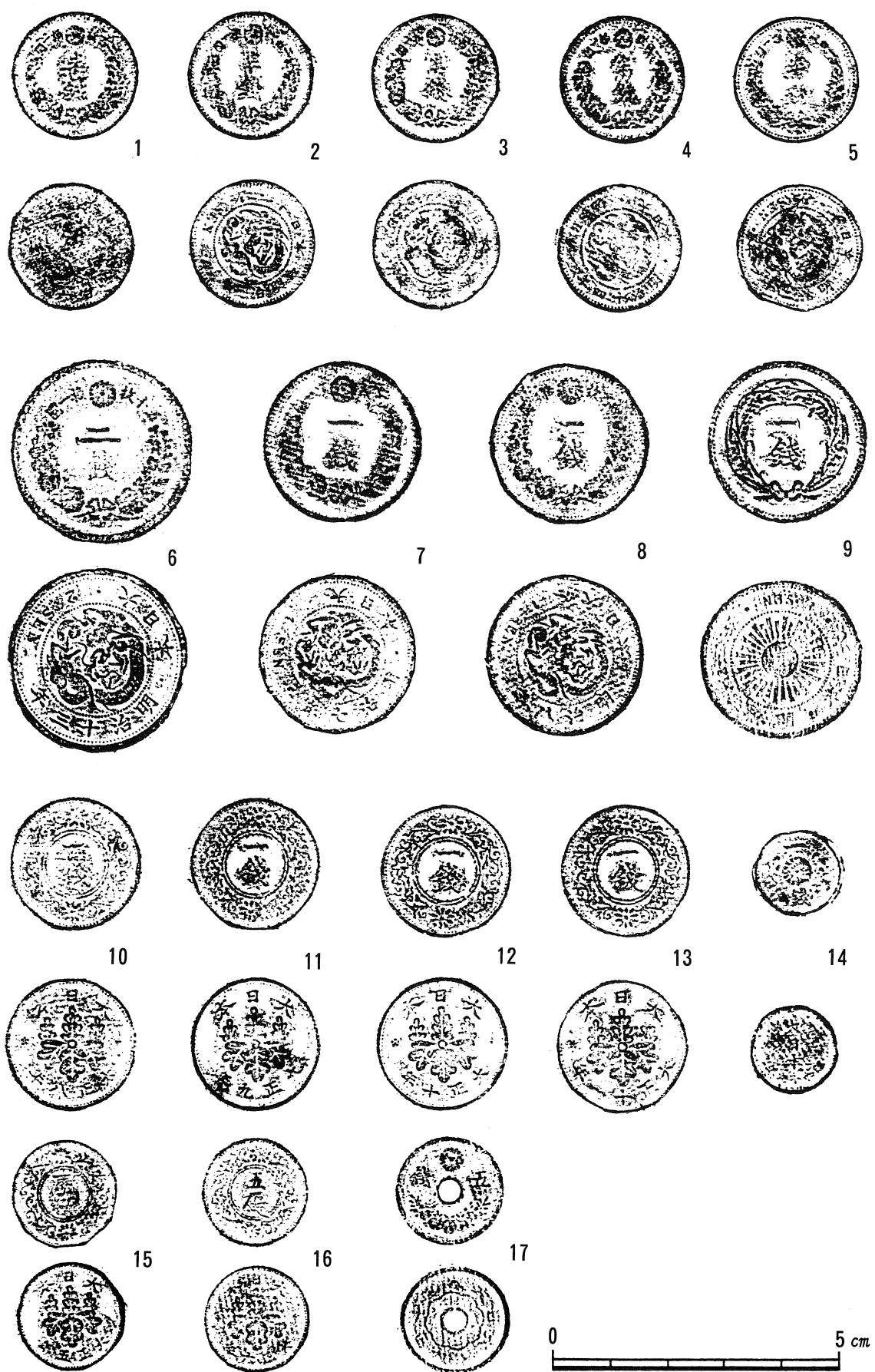
見合う蓋であるが、これらのサザエが生のままで奉納されたのか貝殻と蓋とが別々に奉納されたのかは不明である。

窯道具は焼き台（図版27下段）と重ね焼き用の窯道具（図版27上段）が奉納されていた。とくに後者は多く、コンテナ1杯分に上る。これは長径5～10cm、短径5cm前後、厚さ1cm前後のもので、すべて手捏ねで成形されている。

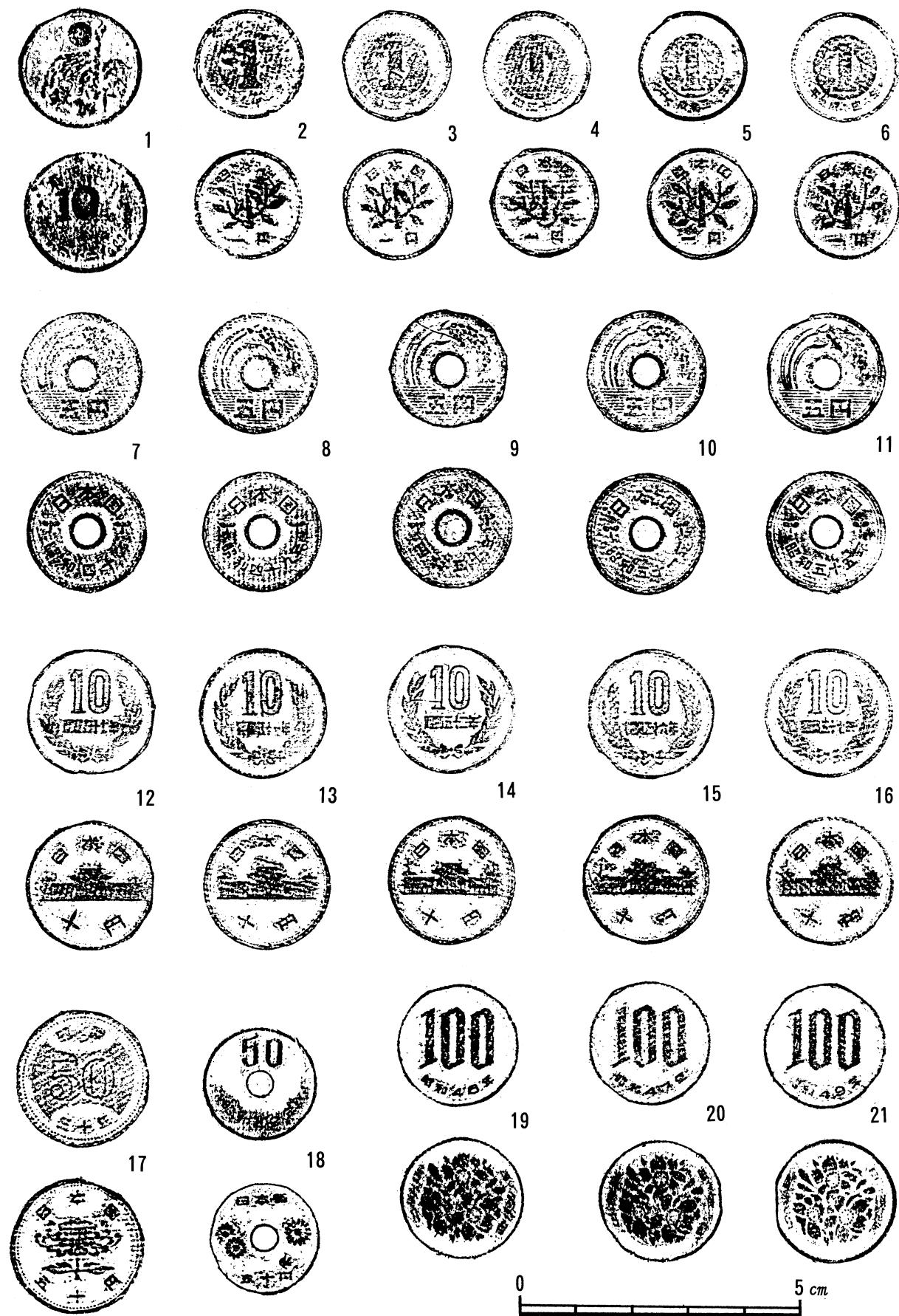
人形（図版28）は七福神である恵比須、大黒天（図版28-②）、福禄寿のほか、福助人形（図版28-④）などがある。また、馬形が8体出土している（図版28-①）。陶製の人形は馬形の4体に釉がかけられている以外は無釉である。これらのうち恵比須と大黒天が銅製または真鍮製であるほかは陶製である。

図版28-⑤は陶器である。ミニチュアの徳利形で、布志名焼きと思われる。おそらく御神酒用の徳利であろう。これ以外に杯が出土している。

図版28-③は銅製の飾り金具である。左はひな人形の銚子、右は人形の冠である。



第51図 古銭拓影 (4) “明治～戦前”



第52図 古銭拓影 (5) “戦後～現代”

才の神遺跡カワラケ計測表

挿図番号	口 径	底 径	器 高	釉の有無	底部穿孔等の種類	底部調整	色 調	備 考
第40図 1	8.3	4.3	1.8	有	II	A	赤色	
2	8.6	4.8	1.2	有	II	A	赤色	
3	8.4	4.7	1.8	有	II	A	赤色	
4	8.4	3.9	16.5	有	II	A	赤色	
5	8.4	4.0	1.6	有	II	A	赤色	
6	8.6	4.5	1.6	有	II	A	赤色	
7	8.3	4.2	1.9	有	II	A	赤色	
8	8.3	4.75	1.5	有	II	A	赤色	
9	8.1	4.2	1.7	有	II	A	赤色	
10	8.2	3.8	1.7	有	III	A	赤色	
11	9.2	4.5	1.6	有	III	A	赤色	
12	8.8	4.4	1.7	有	III	A	赤色	
13	8.4	4.0	1.8	有	III	A	赤色	
14	8.6	3.5	1.6	有	III	A	赤色	
15	8.2	4.5	1.6	有	III	A	赤色	
16	8.9	4.3	1.6	有	III	A	赤色	
17	9.0	4.4	1.9	有	III	A	赤色	
18	8.5	5.0	1.4	有	III	A	赤色	
19	8.4	4.2	1.6	有	III	A	赤色	
20	8.25	4.4	1.7	有	III	A	赤色	
21	8.35	4.25	1.9	有	III	A	赤色	
22	9.4	4.8	2.3	有	III	A	赤色	
23	11.4	6.6	2.5	有	III	A	赤色	
24	8.0	3.3	1.55	無	I	A	白色	
25	9.5	2.1	4.95	無	I	A	白色	
26	8.4	3.9	1.5	無	I	A	白色	
27	9.1	5.7	1.9	無	I	A	白色	
28	9.4	4.6	1.8	無	I	A	白色	
29	9.4	5.2	1.9	無	I	A	白色	
30	8.4	4.0	1.8	無	I	A	白色	
31	9.2	4.8	2.0	無	I	B ₂	白色	
32	8.3	4.4	1.6	無	I	A	白色	
33	9.0	2.4	1.7	無	I	A	白色	
34	/	5.0	/	無	I	A	白色	
35	9.3	5.2	2.1	無	I	A	白色	
36	8.3	3.35	1.55	無	I	A	白色	
37	9.0	4.8	2.2	無	I	B ₂	白色	
38	9.3	5.5	1.9	無	I	A	白色	
39	8.2	4.9	1.8	無	I	A	白色	
40	9.1	4.9	1.6~1.8	無	I	A	白色	
41	7.6	3.3	1.6	無	I	A	白色	
42	8.2	3.6	1.6	無	I	A	白色	
43	8.0	3.5	1.5	無	I	A	白色	
第41図 1	10.2	5.0	1.75	無	I	B ₂	白色	
2	8.3	4.7	1.5	無	I	B ₁	白色	
3	9.0	4.8	1.8	無	I	B ₂	白色	
4	8.4	4.45	1.65	無	I	A	白色	
5	8.0	3.3	1.55	無	I	A	白色	
6	9.2	4.5	1.6	無	I	B ₁	白色	
7	8.8	5.2	1.95	無	I	A	白色	
8	9.0	4.9	1.9	無	I	A	白色	
9	8.2	3.6	1.85	無	I	A	白色	
10	9.8	4.7	2.0	無	I	A	白色	
11	6.7	3.3	1.5	無	I	A	白色	
12	6.4	3.4	1.65	無	I	A	白色	
13	6.8	3.5	1.55	無	I	A	白色	
14	8.2	3.7	1.75	無	I	A	白色	
15	6.6	3.9	1.4	無	I	A	白色	

挿図番号	口 径	底 径	器 高	釉の有無	底部穿孔等の種類	底部調整	色 調	備 考
16	6.6	3.5	1.35	無	I	A	白色	
17	6.6	3.5	1.5	無	I	A	白色	
18	7.4	3.5	1.7	無	I	A	白色	内面に「十七才男」とヘラ書
19	6.7	3.6	1.7	無	I	B ₂	黄色	手捏ね
20	7.3	3.6	1.3	無	I	B ₂	黄色	手捏ね
21	7.8	3.3	1.7	無	I	A	黄色	
22	8.3	4.5	1.9	無	I	A	黄色	
23	9.9	4.9	1.3	無	I	A	黄色	
24	9.7	5.0	1.7	無	I	A	黄色	
25	9.5	5.1	1.4	無	I	A	黄色	
26	9.5	5.0	1.8	無	I	A	黄色	
27	8.0	2.8	1.4	無	I	A	黄色	内面に「六十三才男」の墨書
28	9.4	5.6	1.8	無	I	A	黄色	
29	9.7	4.1	2.5	無	I	A	黄色	
30	8.8	5.8	2.4	無	I	A	黄色	
31	9.1	4.5	2.2	無	I	A	黄色	
32	8.2	4.5	1.1	無	I	B ₁	黄色	
33	8.7	4.5	1.5	無	I	B ₁	黄色	
34	7.9	4.3	1.2	無	I	B ₁	黄色	
35	8.9	4.6	1.9	無	I	B ₁	黄色	
36	9.2	4.9	1.8	無	I	B ₁	黄色	
37	8.6	4.6	1.4	無	I	B ₁	黄色	
38	8.2	5.0	1.5	無	I	B ₁	白色	
39	8.5	4.7	1.2	無	I	B ₁	黄色	
40	8.9	5.2	1.9	無	I	B ₁	黄色	
41	9.3	5.4	2.0	無	I	B ₁	黄色	
42	10.5	5.2	2.0	無	I	B ₂	白色	
第42図 1	9.0		1.9	無	I	B ₂	白色	
2	9.2	2.8	2.2	無	I	B ₂	白色	
3	9.2		1.9	無	I	B ₂	白色	
4	9.2	2.9	2.2	無	I	B ₂	白色	
5	10.8	3.4	2.3	無	I	B ₂	白色	
6	9.8	4.0	2.3	無	I	B ₂	白色	
7	10.4	3.1	2.3	無	I	B ₂	白色	
8	8.6	3.6	1.2	無	I	B ₂	白色	
9	8.2	3.7	1.2	無	I	B ₂	白色	
10	8.4	3.5	1.2	無	I	B ₂	白色	
11	8.3	4.3	1.1	無	II	B ₁	白色	
12	7.8	4.3	1.0	無	II	B ₁	白色	
13	8.1	4.2	1.1	無	II	B ₁	黄色	
14	8.1	4.1	1.1	無	II	B ₁	黄色	
15	8.0	3.8	1.05	無	II	A	黄色	
16	8.1	4.4	1.1~1.2	無	II	B ₁	黄色	
17	7.9	3.3	1.2	無	II	A	白色	
18	7.4	3.3	1.5	無	II	A	白色	
19	8.0	4.4	1.5	無	II	A	白色	
20	7.8	4.0	1.6	無	II	A	白色	
21	8.6	4.9	1.8	無	II	A	白色	
22	8.8	4.7	1.8	無	II	A	白色	
23	8.4	3.9	1.8	無	II	A	白色	
24	9.1	4.2	1.8	無	II	A	白色	
25	9.5	5.15	1.9	無	II	A	白色	
26	9.8	5.1	2.3	無	II	A	白色	
27	9.2	5.4	2.1	無	II	A	白色	
28	9.8	5.2	2.2	無	II	A	白色	
29	9.1	5.2	1.6	無	II	A	白色	
30	9.4	4.0	2.2	無	II	A	白色	
31	10.4	4.5	2.1	無	II	A	白色	

挿図番号	口 径	底 径	器 高	軸の有無	底部穿孔等の種類	底部調整	色 調	備 考
32	10.3	4.0	2.4	無	II	A	白色	
33	11.2	5.2	2.5	無	II	A	白色	
34	7.7	4.1	2.2	無	II	A	白色	
第43図 1	9.2	4.8	2.6	無	II	A	白色	
2	8.0	4.7	2.0	無	II	A	白色	
3	8.6	4.8	1.5	無	II	A	黄色	
4	7.8	4.0	1.1	無	II	A	黄色	
5	8.2	4.0	1.5	無	II	A	黄色	
6	8.6	4.9	1.4	無	II	A	黄色	
7	8.0	4.0	1.6	無	II	A	黄色	
8	8.5	3.9	1.7	無	II	A	黄色	
9	8.1	4.8	1.2	無	II	B ₁	黄色	
10	7.6	4.0	1.3	無	II	A	黄色	
11	7.3	3.5	1.4	無	II	A	黄色	
12	7.9	4.5	1.45	無	II	A	黄色	
13	8.3	4.6	1.2	無	II	A	黄色	
14	8.6	4.3	1.9	無	II	A	黄色	
15	8.0	5.3	1.2	無	II	A	黄色	
16	8.4	4.3	1.3	無	II	A	黄色	
17	8.0	4.9	1.2	無	II	A	黄色	
18	7.9	5.1	1.3	無	II	A	黄色	
19	7.9	4.05	1.35	無	II	A	黄色	
20	8.2	5.1	1.3	無	II	A	黄色	
21	8.2	5.7	1.3	無	II	A	黄色	
22	8.4	5.1	1.5	無	II	A	黄色	
23	7.8	3.8	1.4	無	II	A	黄色	
24	8.2	4.8	1.8	無	II	A	黄色	
25	7.9	3.6	1.2	無	II	A	黄色	
26	7.8	4.3	1.3	無	II	A	黄色	
27	8.2	4.6	1.5	無	II	A	黄色	
28	8.2	5.0	1.7	無	II	A	黄色	
29	9.0	4.5	2.0	無	II	A	黄色	
30	8.2	3.9	1.6~1.8	無	II	A	黄色	
31	8.4	4.4	1.8	無	II	A	黄色	
32	9.1	5.0	1.9	無	II	A	黄色	
33	8.6	4.5	1.9	無	II	A	黄色	
34	8.4	4.5	1.7	無	II	A	黄色	
35	7.9	4.9	1.6	無	II	A	黄色	
36	8.2	3.9	1.9	無	II	A	黄色	
37	8.7	4.4	1.95	無	II	A	黄色	
38	8.5	4.1	2.0	無	II	A	黄色	
39	8.4	4.4	1.5	無	II	A	黄色	
40	9.4	3.2	2.4	無	II	A	黄色	
41	8.6	4.3	1.9	無	II	A	黄色	
42	8.7	4.3	2.15	無	II	A	黄色	
43	8.5	4.7	2.0	無	II	A	黄色	
44	8.8	4.5	2.2	無	II	A	黄色	
45	8.8	4.2	2.0	無	II	A	黄色	
46	7.4	3.8	1.7	無	II	A	黄色	
47	7.9	3.5	1.5	無	II	A	黄色	
48	8.0	3.7	1.1	無	II	A	黄色	
第44図 1	7.8	4.2	1.7	無	II	A	黄色	
2	8.3	5.6	1.3	無	II	A	黄色	
3	8.2	4.6	1.5	無	II	A	黄色	
4	8.6	4.3	2.0	無	II	A	黄色	
5	8.0	4.8	1.6	無	II	A	黄色	
6	8.6	3.7	1.9	無	II	A	黄色	
7	8.4	4.6	2.1	無	II	A	黄色	

挿図番号	口 径	底 径	器 高	釉の有無	底部穿孔等の種類	底部調整	色 調	備 考
8	8.2	5.1	1.45	無	II	A	黄色	
9	9.3	5.7	2.1	無	II	A	黄色	
10	8.2	4.2	1.6	無	II	A	黄色	
11	8.6	4.8	1.6	無	II	A	黄色	内面に「十八才申の年」の墨書
12	7.0	3.1	1.7	無	II	A	黄色	
13	8.9	3.6	1.8	無	II	A	黄色	
14	7.0	3.2	1.3	無	II	A	黄色	
15	8.7	5.7	1.3	無	II	A	黄色	
16	8.6	4.4	1.8	無	II	A	黄色	
17	8.5	4.5	1.6	無	II	A	黄色	内面に「明治三十六〇」の墨書
18	8.7	4.2	1.5~1.6	無	II	A	黄色	
19	8.0	5.5	1.3	無	II	A	黄色	
20	7.8	5.1	1.5	無	II	A	黄色	
21	8.8	3.8	2.2	無	II	A	黄色	
22	8.9	4.6	2.1	無	II	A	黄色	
23	8.9	5.1	1.9	無	II	A	黄色	内面に「□□五□」のヘラ書
24	8.6	4.0	1.6	無	II	A	黄色	
25	8.2	5.0	1.8	無	II	A	黄色	
26	9.2	4.9	1.5	無	II	A	黄色	
27	9.8	4.7	2.2	無	II	A	黄色	
28	8.6	3.8	1.6	無	II	A	黄色	
29	8.0	3.8	1.6	無	II	A	黄色	内面に墨書（不明）
30	8.6	5.1	1.9	無	II	A	黄色	
31	8.2	4.0	1.6	無	II	A	黄色	
32	8.9	4.4	2.1	無	II	A	黄色	
33	8.2	4.5	1.5	無	II	A	黄色	
34	8.2	4.3	1.8	無	II	A	黄色	
35	8.7	3.9	2.1	無	II	A	黄色	
36	8.8	5.0	1.9	無	II	A	黄色	
37	8.5	4.0	1.8	無	II	A	黄色	
38	8.6	3.9	1.6	無	II	A	黄色	
39	8.6	4.0	1.8	無	II	A	黄色	
第45図 1	8.2	5.0	1.6	無	II	A	黄色	
2	8.6	4.4	1.6	無	II	A	黄色	
3	7.6	5.8	1.5	無	II	A	黄色	
4	8.2	5.0	1.2	無	II	A	黄色	
5	8.0	4.2	1.5	無	II	A	黄色	
6	7.7	4.8	1.5	無	II	A	黄色	
7	7.8	4.5	1.5	無	II	A	黄色	
8	8.3	4.1	1.55	無	II	A	黄色	
9	7.8	3.5	1.4	無	II	A	黄色	内面に墨書「申年」
10	8.8	5.0	1.8	無	II	A	黄色	
11	8.1	4.4	1.5	無	II	A	黄色	
12	8.6	5.1	1.6	無	II	A	黄色	
13	8.0	4.4	1.5	無	II	A	黄色	
14	8.3	4.05	1.75	無	II	A	黄色	
15	8.1	3.75	1.8	無	II	A	黄色	
16	8.4	4.1	1.8	無	II	A	黄色	
17	9.4	4.9	2.2	無	II	A	黄色	
18	8.7	4.7	1.6	無	II	A	黄色	
19	8.0	3.8	1.7	無	II	A	黄色	
20	8.4	3.9	1.9	無	II	A	黄色	
21	8.4	4.0	1.8	無	II	A	黄色	
22	8.0	3.9	1.2	無	II	A	黄色	
23	8.3	4.4	1.5	無	II	A	黄色	
24	8.2	4.7	1.5	無	II	A	黄色	
25	8.5	4.8	1.6	無	II	A	黄色	
26	7.9	3.8	1.5	無	II	A	黄色	

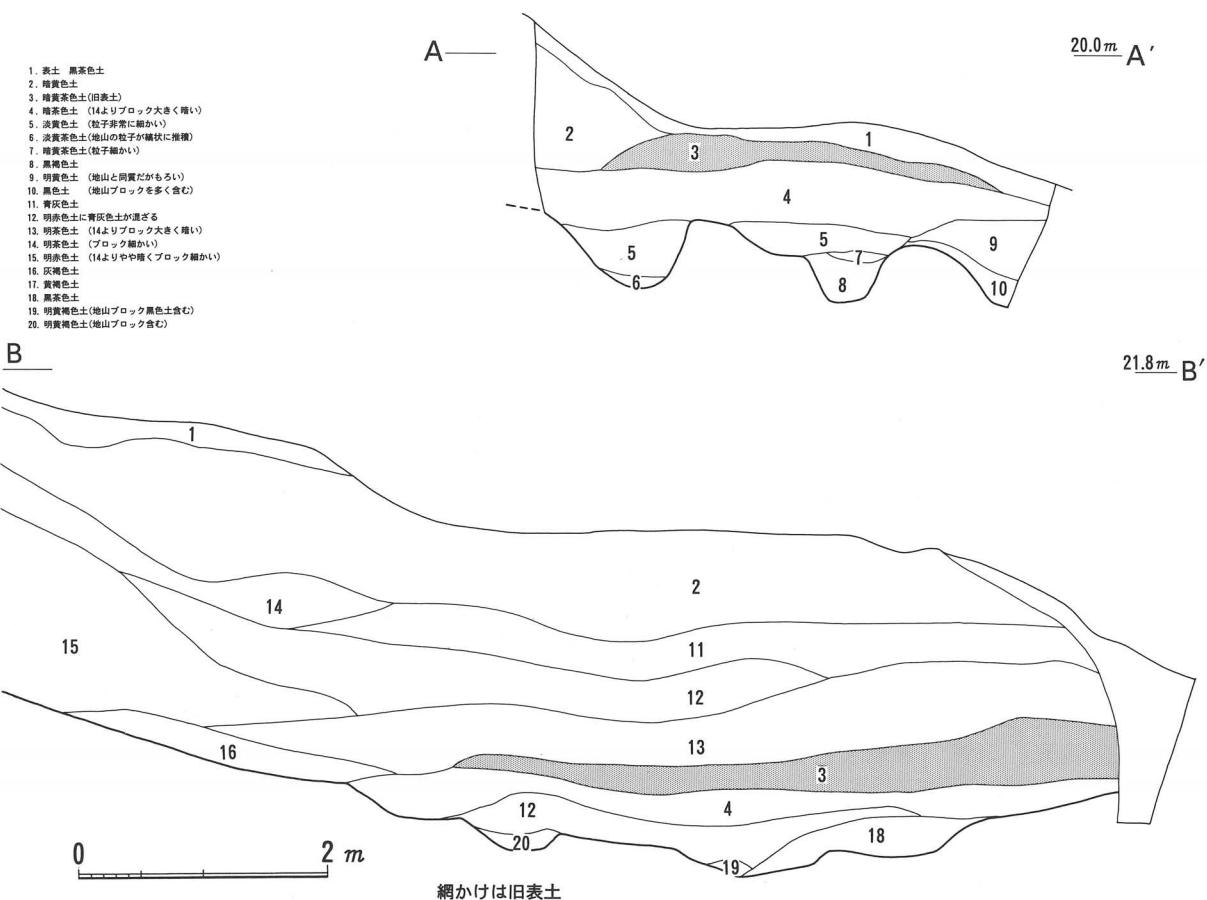
挿図番号	口 径	底 径	器 高	釉の有無	底部穿孔等の種類	底部調整	色 調	備 考
27	8.6	4.4	1.6	無	II	A	黄色	
28	8.3	3.7	1.6	無	II	A	黄色	
29	8.8	4.0	1.7	無	II	A	黄色	
30	8.6	4.1	1.6	無	II	A	黄色	
31	8.8	4.8	1.6	無	II	A	黄色	
32	8.4	3.9	2.9	無	II	A	黄色	
33	8.0	5.0	1.8	無	II	A	黄色	
34	8.4	3.7	1.8	無	II	A	黄色	
35	8.8	4.2	1.7	無	II	A	黄色	
36	8.3	5.6	1.4~1.5	無	II	A	黄色	
37	8.4	4.4	1.7	無	II	A	黄色	内面に「頼主 □」の墨書
38	8.4	4.8	1.7	無	II	A	黄色	
39	7.9	4.4	1.5	無	II	A	黄色	
40	8.8	4.1	2.8	無	II	B ₁	白色	内面に「酉年五才男」の墨書
41	9.2	4.1	1.8~1.9	無	III	A	黄色	
42	9.1	4.0	1.6	無	III	A	黄色	
43	9.7	4.4	2.5	無	III	A	黄色	
44	8.2	4.6	1.3	無	III	A	黄色	
45	8.2	4.1	1.9~2.0	無	III	A	黄色	
46	8.6	4.5	1.6	無	III	A	白色	
47	9.6	5.3	1.5	無	III	A	白色	
48	8.6	4.1	1.8	無	III	A	白色	
49	8.8	4.0	1.8	無	III	A	白色	
50	8.6	3.3	1.7~1.8	無	III	A	白色	
51	8.3	3.8	1.7	無	III	A	白色	
52	8.4	4.1	1.7	無	III	A	白色	
53	8.7	4.1	1.8	無	III	A	白色	
54	8.1	4.2	1.6	無	III	A	白色	
55	7.6	3.3	1.6	無	III	A	白色	
56	8.6	3.5	1.7	無	III	A	白色	
57	9.1	4.0	1.9	無	III	A	白色	
58	9.4	4.8	2.3	無	III	A	白色	
59	8.8	5.3	1.4	無	III	A	白色	
第46図 1	8.1	4.1	1.3	無	III	A	黄色	
2	7.8	3.8	1.0	無	III	A	黄色	
3	7.8	4.1	1.0	無	III	A	黄色	
4	7.7	3.6	1.2	無	III	A	黄色	
5	8.0	4.1	1.5	無	III	A	黄色	
6	9.0	4.1	1.9	無	III	A	黄色	
7	8.9	4.7	1.9	無	III	A	黄色	
8	8.2	3.7	1.6	無	III	A	黄色	
9	8.4	3.3	1.6	無	III	A	黄色	
10	8.2	3.7	1.7	無	III	A	黄色	
11	8.7	4.0	1.9~2.0	無	III	A	黄色	
12	8.4	5.1	1.4	無	III	A	黄色	
13	7.5	4.5	1.4	無	III	A	黄色	
14	7.8	3.6	1.7	無	III	A	黄色	
15	8.0	3.8	1.6	無	III	A	黄色	内面に「□女」の墨書
16	8.6	4.4	1.8	無	III	A	黄色	
17	8.3	3.8	1.3	無	III	A	黄色	
18	8.1	3.5	2.0	無	III	A	黄色	
19	8.0	4.0	1.6	無	III	A	黄色	
第47図 1	9.0	4.3	1.4	無	III	B ₁	白色	内面に紋
2	8.8	3.2	1.6	無	III	B ₁	白色	内面に紋
3	6.7	2.8	1.2	無	III	B ₂	白色	内面に紋
4	8.0	1.5	2.0	無	III	B ₂	白色	内面に紋「太鼓谷稻荷神社」の銘

寛永通寶一覽表

挿図	名 称	初鋳年	分 類	背文	備 考	挿図	名 称	初鋳年	分 類	背文	備 考
1	康熙通寶	17世紀	中国製			34	寛永通寶	1697	新寛永		
2	寛永通寶	1636	古寛永			35	寛永通寶	1697	新寛永		
3	寛永通寶	1636	古寛永			36	寛永通寶	1697	新寛永		
4	寛永通寶	1636	古寛永			37	寛永通寶	1697	新寛永		
5	寛永通寶	1636	古寛永			38	寛永通寶	1697	新寛永		
6	寛永通寶	1636	古寛永			39	寛永通寶	1697	新寛永		
7	寛永通寶	1636	古寛永			40	寛永通寶	1697	新寛永		
8	寛永通寶	1636	古寛永			41	寛永通寶	1697	新寛永		
9	寛永通寶	1636	古寛永			42	寛永通寶	1697	新寛永		
10	寛永通寶	1636	古寛永			43	寛永通寶	1697	新寛永		
11	寛永通寶	1636	古寛永			44	寛永通寶	1697	新寛永		
12	寛永通寶	1636	古寛永			45	寛永通寶	1697	新寛永		
13	寛永通寶	1636	古寛永			46	寛永通寶	1697	新寛永		
14	寛永通寶	1636	古寛永			47	寛永通寶	1697	新寛永		
15	寛永通寶	1636	古寛永			48	寛永通寶	1697	新寛永		
16	寛永通寶	1636	古寛永			49	寛永通寶	1697	新寛永		
17	寛永通寶	1636	古寛永			50	寛永通寶	1697	新寛永		
18	寛永通寶	1697	新寛永			51	寛永通寶	1697	新寛永		
19	寛永通寶	1697	新寛永			52	寛永通寶	1697	新寛永		
20	寛永通寶	1697	新寛永			53	寛永通寶	1697	新寛永		
21	寛永通寶	1697	新寛永	元	高津錢	54	寛永通寶	1697	新寛永		
22	寛永通寶	1697	新寛永			55	寛永通寶	1697	新寛永		
23	寛永通寶	1697	新寛永			56	寛永通寶	1697	新寛永		
24	寛永通寶	1697	新寛永			57	寛永通寶	1697	新寛永		
25	寛永通寶	1697	新寛永			58	寛永通寶	1668	新寛永	文	文銭
26	寛永通寶	1697	新寛永			59	寛永通寶	1767	新寛永	長	長崎銭
27	寛永通寶	1697	新寛永			60	寛永通寶	1668	新寛永	文	文銭
28	寛永通寶	1697	新寛永			61	寛永通寶	1668	新寛永	文	文銭
29	寛永通寶	1697	新寛永			62	寛永通寶	1668	新寛永	文	文銭
30	寛永通寶	1697	新寛永			63	寛永通寶	1668	新寛永	文	文銭
31	寛永通寶	1697	新寛永			64	寛永通寶	1668	新寛永	文	文銭
32	寛永通寶	1697	新寛永			65	寛永通寶	1769	新寛永	11波	四文銭
33	寛永通寶	1697	新寛永			66	寛永通寶	1769	新寛永	11波	四文銭

明治以降銭貨一覧表

名称	年号	枚数	名称	年号	枚数	名称	年号	枚数
半 錢	明治 6 年	1	"	大正11年	6	"	昭和51年	1
"	明治 8 年	2	"	昭和19年	1	"	昭和55年	1
"	明治10年	2	2 錢	明治13年	1	10 円	昭和47年	2
"	明治14年	3	5 錢	大正10年	1	"	昭和51年	1
"	明治21年	1	10 錢	昭和21年	1	"	昭和56年	1
5 厘	大正 5 年	1	1 円	昭和30年	1	"	昭和57年	1
"	大正 6 年	1	"	昭和50年	1	50 円	昭和30年	1
1 錢	明治 7 年	1	"	昭和51年	2	"	昭和49年	1
"	明治 8 年	1	"	平成 2 年	1	100円	昭和46年	1
"	明治34年	1	"	平成 4 年	1	"	昭和47年	1
"	大正 8 年	6	5 円	昭和40年	1	"	昭和49年	1
"	大正 9 年	4	"	昭和49年	1			
"	大正10年	4	"	昭和50年	1			

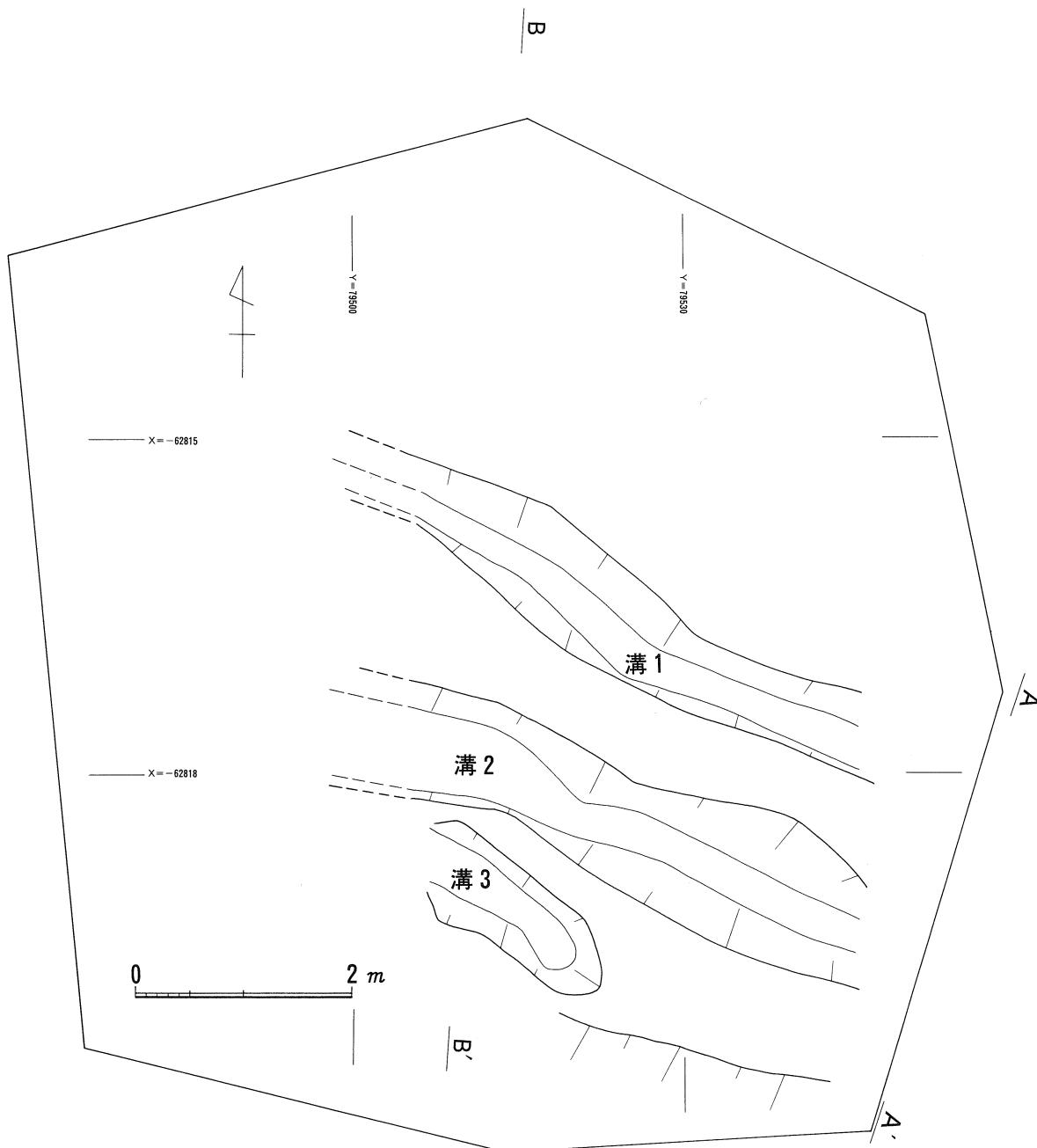


第53図 基壇下土層堆積図 (S=1/60)

第4節 基壇下の調査

基壇直下には、人為的に地山を掘削して埋めたと思われる埋土が厚さ1.9mも堆積していた。石積基壇の平坦面は、この埋土の最上層である第2層をカットして造りだしている。その下層には旧表土が厚さ0.1~0.5mほど堆積し、更に地山掘削に起因するものと思われる第4層があり地山に至る。

地山面で溝状遺構が合わせて三本検出された。いずれも、南東から北東方向に向けて平行に走っており、更に調査区外へも延びるようである。溝1は上面の幅0.6~0.9m、深さは0.5m。溝2は幅0.9~1.3m、深さ0.6m。溝3は幅0.7m、深さは0.48mである。遺構の時期は不明だが、三本がほぼ平行して位置しており、有機的な関係が想定される。



第54図 溝状遺構実測図 ($S=1/60$)

第5節 小結

布志名の「才の神」は三段の石積基壇上に置かれた祠という形態である。才の神の形態としては大きく (1)樹木・自然石 (2)藁または陶製の人形 (3)石像に分けられる⁽¹⁾。島根県では (1)が最も多いようだが、(3)も稀に認められる⁽²⁾。石積を呈するものは、発掘調査された松江市勝負谷遺跡⁽³⁾などのほか、幾つか認められるようである。本遺跡では石積内に遺物が混じっており当初から現在の形状であったとは考えにくい。特に上面に積まれている小石の中には明らかに、水辺で採取された玉砂利のようなものもあり奉賽物である可能性を考えておきたい⁽⁴⁾。

出土遺物から見ると、本遺跡では「耳の治癒」を祈願した供物が多い⁽⁵⁾。底部穿孔されたカワラケや古銭、サザエなどの穴あきのものが、それに当たる⁽⁶⁾。才の神は本来、境界の神であったが境界を守るという性格が、次第に強い神意を期待され、さまざまな機能が付加されていったといわれる。その中の一つが疫病防除であり、出雲地方では「耳の神」である場合が大半である⁽⁷⁾。また藁馬を供える風習は出雲のほとんどの地方でみられるようであり⁽⁸⁾、陶製の馬は代替品である可能性が考えられる。才の神は男女の縁結びに関係するともいわれ、藁馬に餅や団子、炭などを付けてお参りすることで、良縁を祈願したともいわれる⁽⁹⁾。このほか泥人形や雛人形などは不要になったため捨て置かれたものと思われる。

この遺跡に特有なものとして、窯道具（図版27）が挙げられる。この遺跡の所在する布志名地区は江戸時代中期以降、「布志名焼（若山焼、出雲焼）」が生産されている。こうした地域の「才の神」であるからこそその供物といえる。またカワラケが大量に供えられているのも生産地が近く入手し易いということに起因しているのかもしれない。

基壇下から検出された溝状遺構だが、道路遺構の側溝の可能性が考えられる。本遺跡は古代山陰道「正西道」の推定ルート上にも当たっている。限られた面積の調査であり、判然とはしないが遺構の性格を考える上で一つの手掛かりと言える⁽¹⁰⁾。

才の神の研究は、従来民俗学的研究が主導的役割を果たしてきた。しかし、今回、発掘調査という考古学的アプローチによって、才の神信仰を遺構、遺物から総体的に知ることができた。紙幅の関係もあり、充分な検討は加えられていないが、今後、更に学際的な研究を進めることで、地域ごとにさまざまな信仰の対象となっている「才の神」の実態がより一層具体的になっていくものと思われる。

注(1) 小泉凡「サエノカミ信仰の諸相」 玉湯町立出雲玉作資料館友の会 2月例会発表資料

1997年2月16日

この会の席上、参加した地元の方々から多くのご教示を頂いた。

(2) 伊藤菊之輔『島根の石造美術』 1973年 ほか

(3) 松江市教育委員会が平成5年度調査している。

- (4) a 石塚尊俊「サエノカミ研究覧書」『出雲民俗』15 1952
b " 「サエノカミ信仰の成立（旧稿）」『山陰民俗』第34号 1980
- (5) 勝負谷遺跡の出土品と、本遺跡のそれを較べると、構成はほとんど一致しているようである。
- (6) 八雲村内のサエノ神は、耳の病の治癒を祈願したものがほとんどだが、奉賽物は小石が圧倒的に多くなっている。
八雲村教育委員会「八雲村の祭祀習俗」『八雲村文化財調査報告』第3集 1981
- (7) (4)aによれば、中国地方全体でも「耳の神」がほとんどであり、奉賽物も藁馬が多く見られる。
- (8) 石塚尊俊『日本の民俗 島根』 1973年
- (9) 才の神を男女の縁結びの神としているのは、山陰では西伯耆から出雲東部の能義郡のあたりとされ、因幡では縁切りの神が多い。ただし、注(6)によれば八雲村秋吉では、縁結びの信仰が見られるようである。
高島信平「サイノ神の機能と形態」『山陰民俗』第54号 1991年

(10) 勝負谷遺跡のサイノ神の直下からも溝状遺構が検出されている。

また、平成7年度島根県教育委員会が調査を実施した松本古墳群でも道路遺構が確認されている。

図版

図版1 大谷I遺跡



大谷I遺跡全景
(東から)



大谷I遺跡 2号墳

図版2 大谷I遺跡

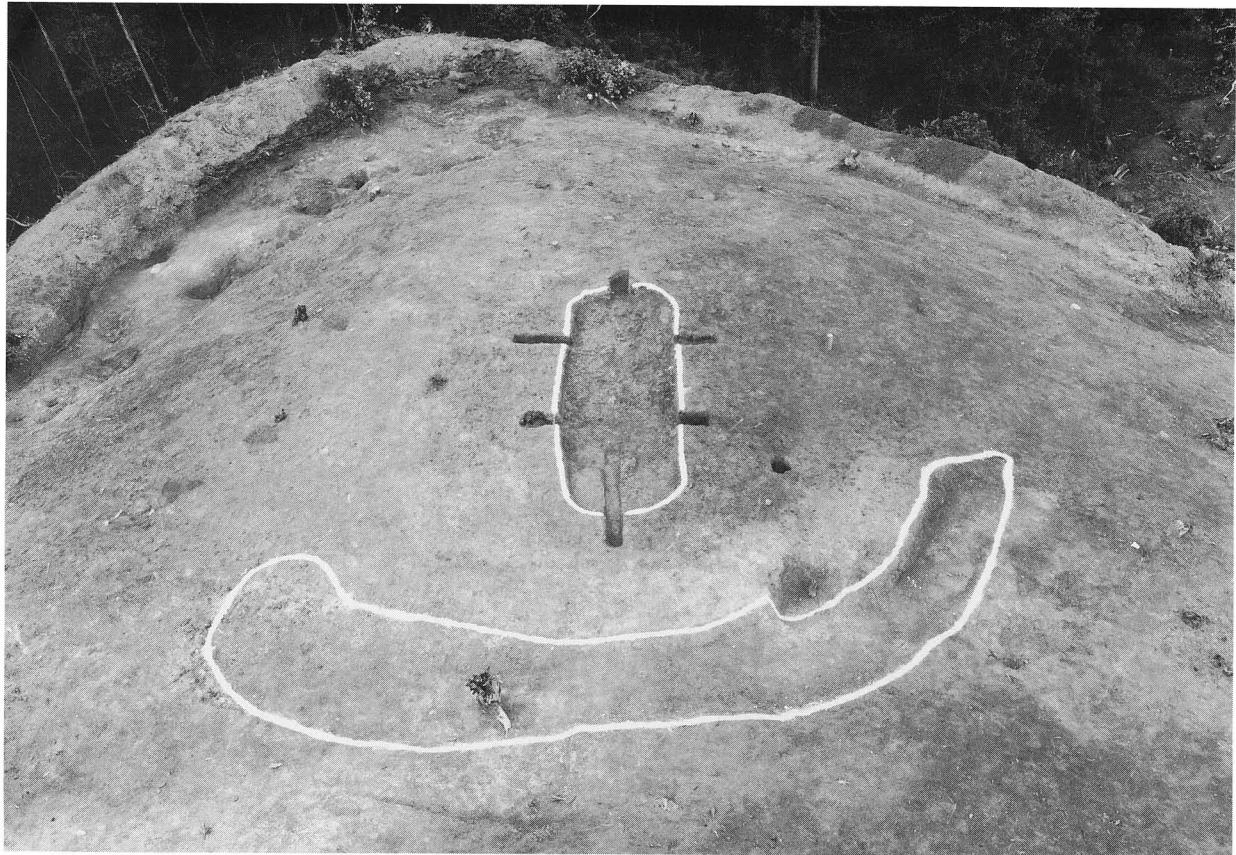


同 主体部

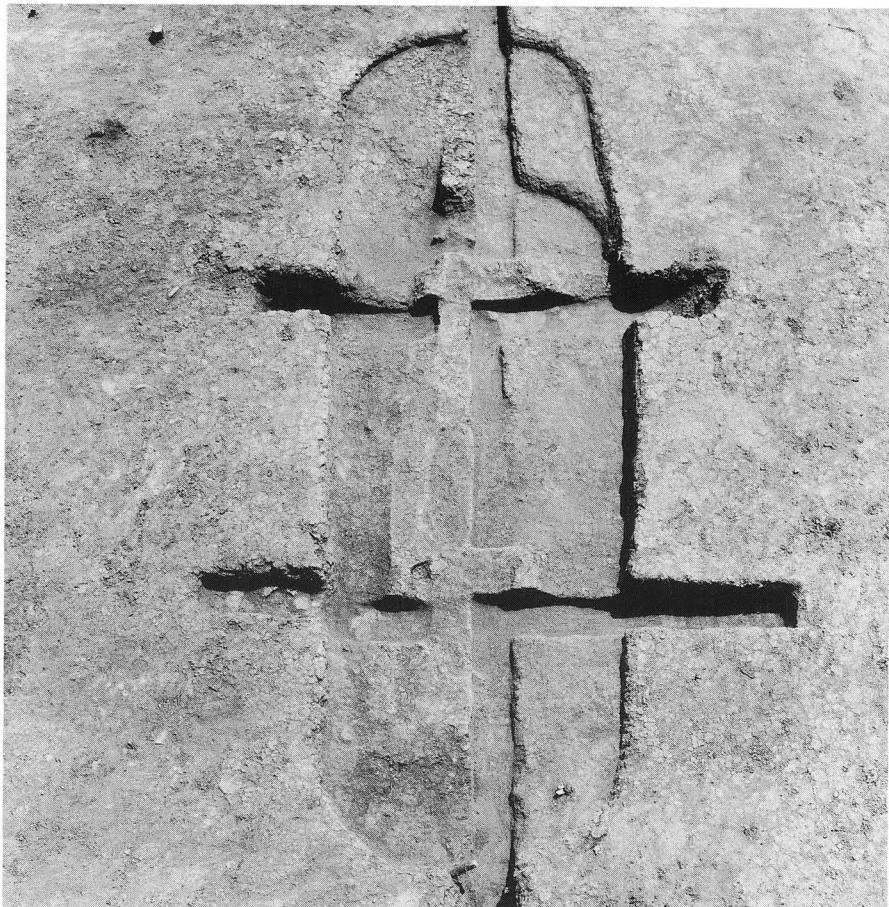


大谷II遺跡 2区全景

図版3 大谷I遺跡



大谷I遺跡 3号墳



同 主体部

図版4 大谷I遺跡

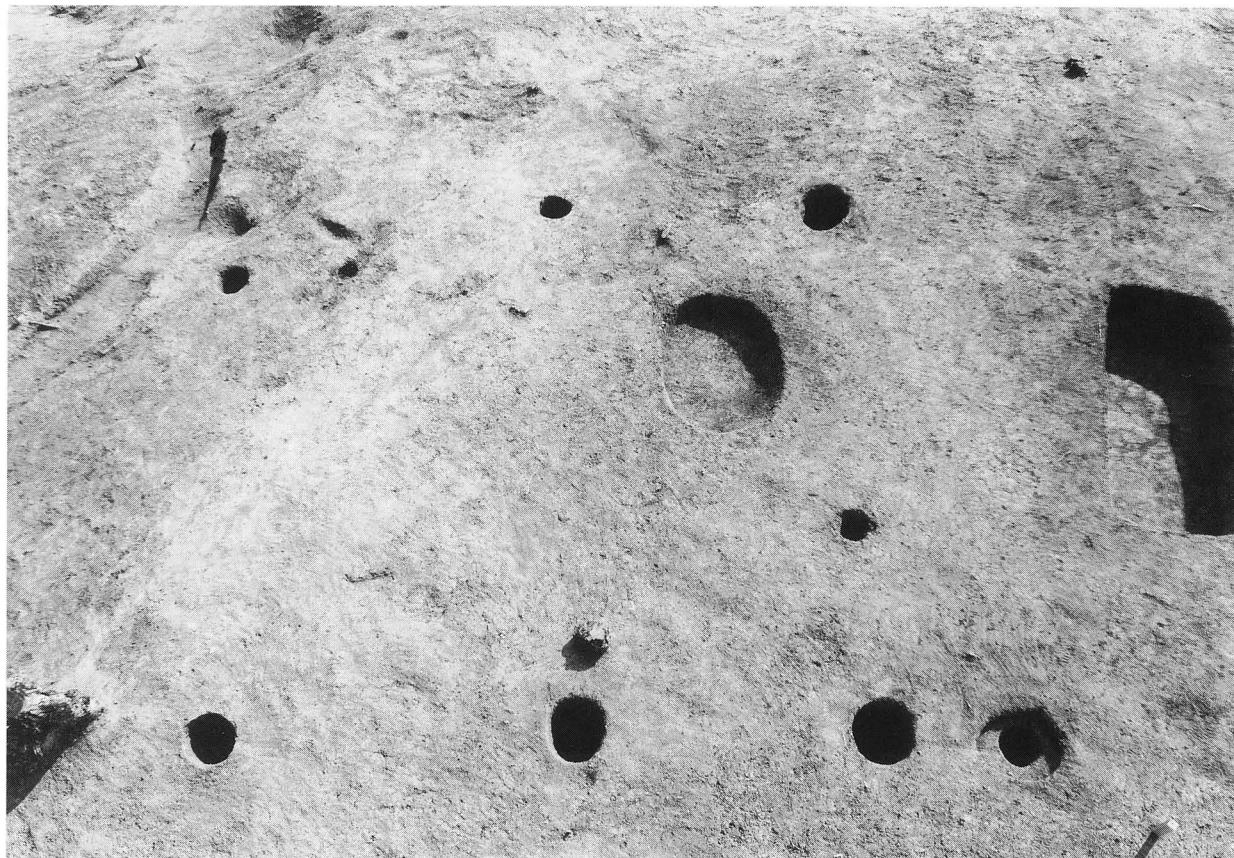


大谷I遺跡 4号墳



同 主体部

図版 5 大谷 I 遺跡



大谷 I 遺跡 SB 0 2

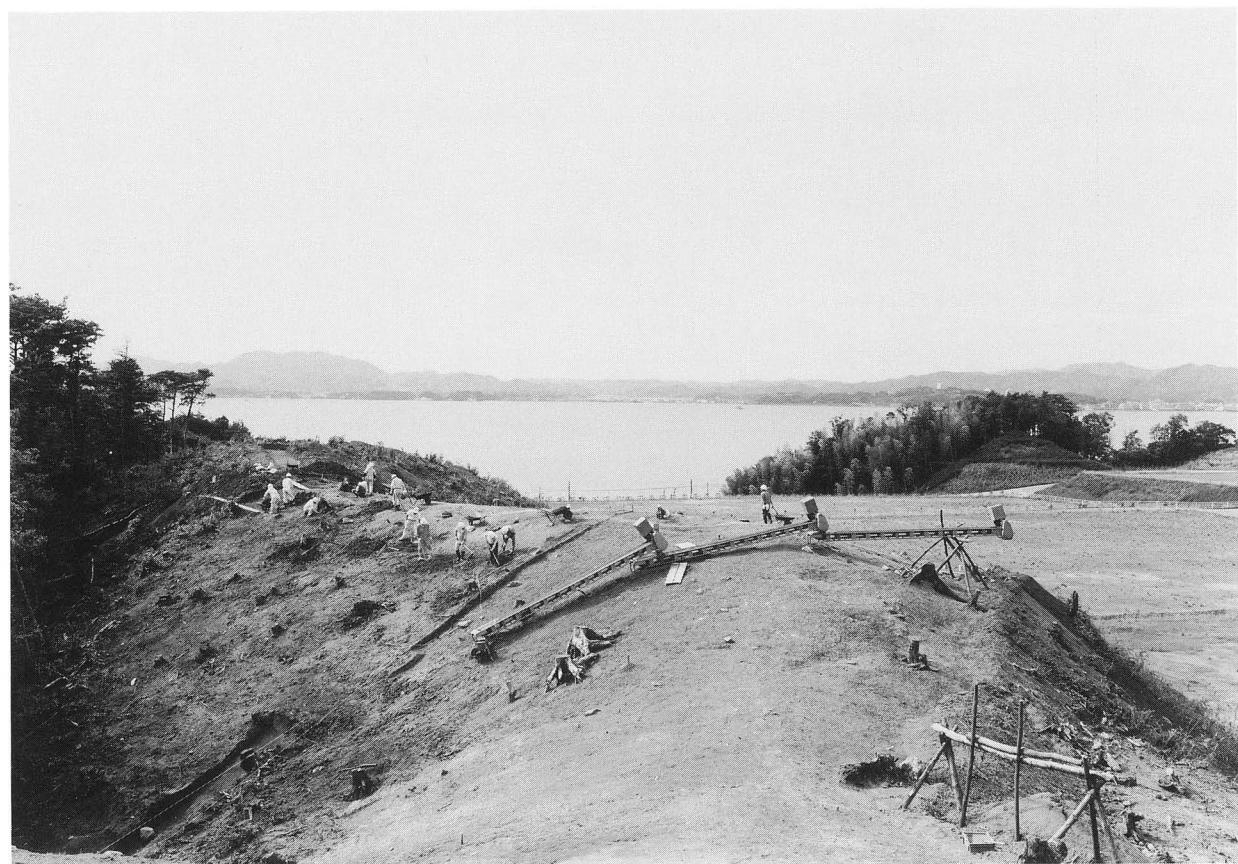


SB 0 1 · SK 0 7 · SK 0 6

図版 6 大谷 I 遺跡



大谷 I 遺跡 SX01



大谷 I 遺跡調査風景（2 区）

図版7 大谷II遺跡



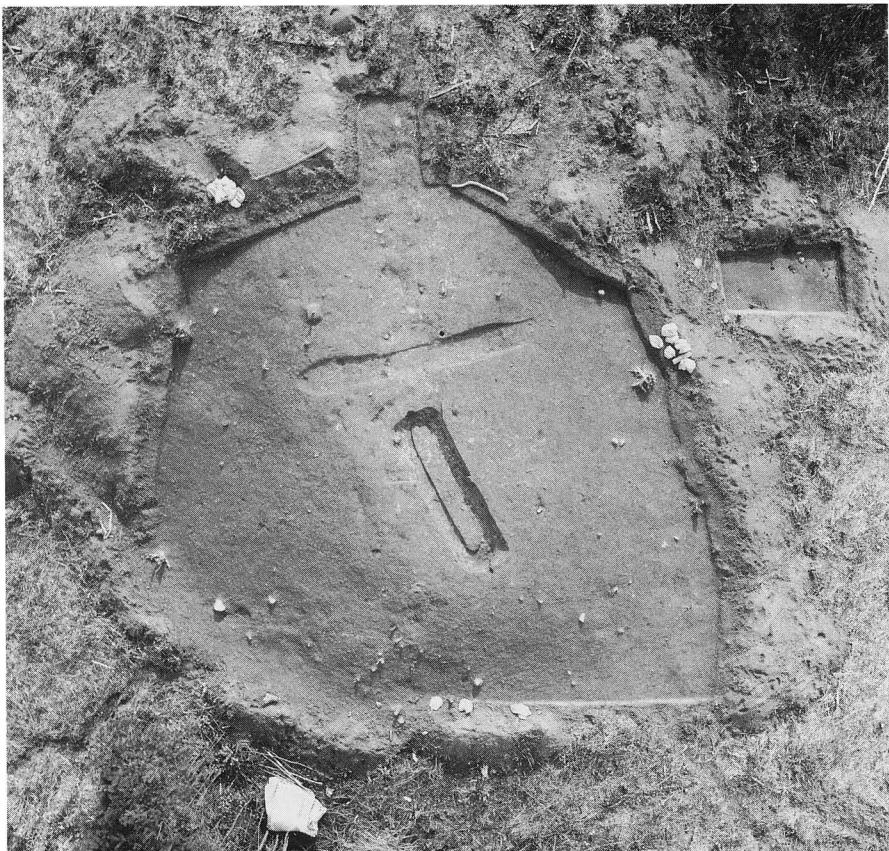
大谷II遺跡全景
(東から)



同 (北から)

図版8 大谷II遺跡

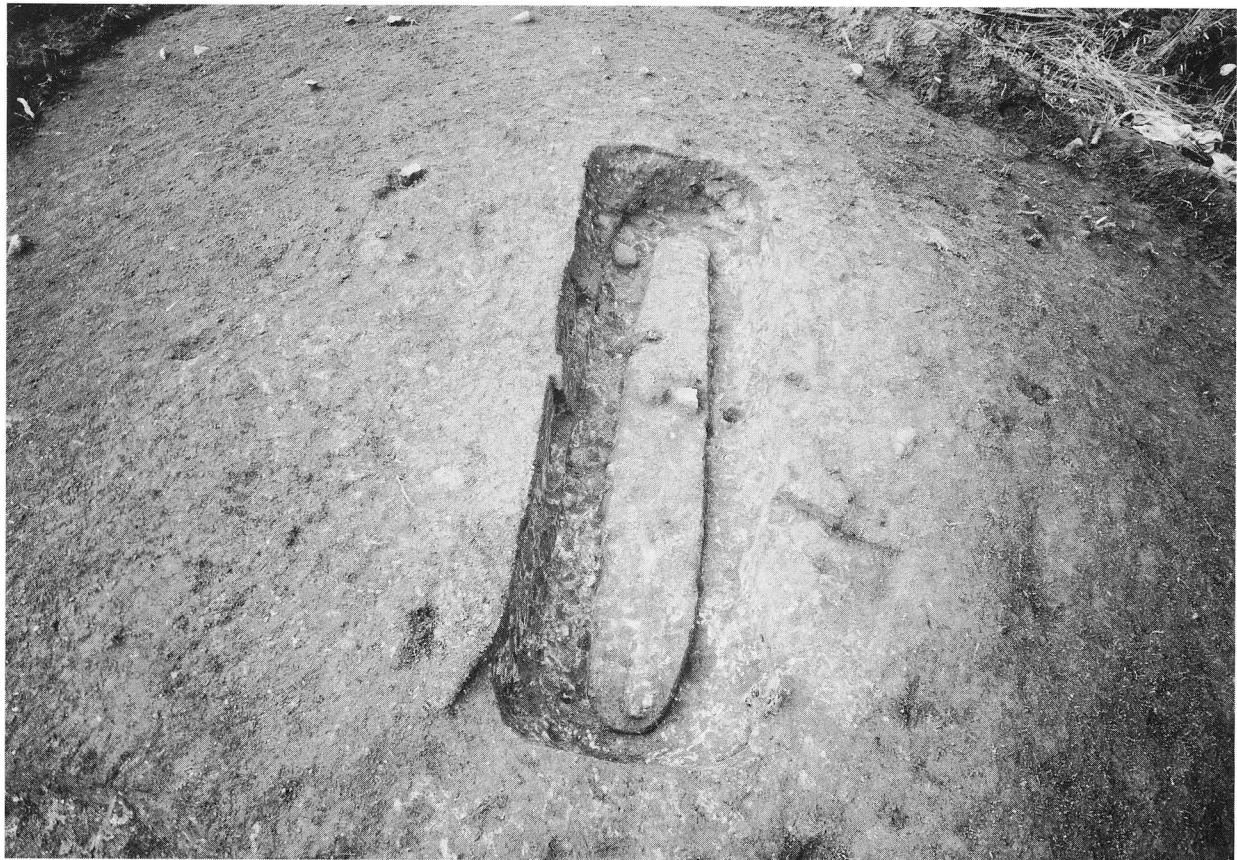
大谷II遺跡
1号墳



同



図版9 大谷II遺跡



同 主体部

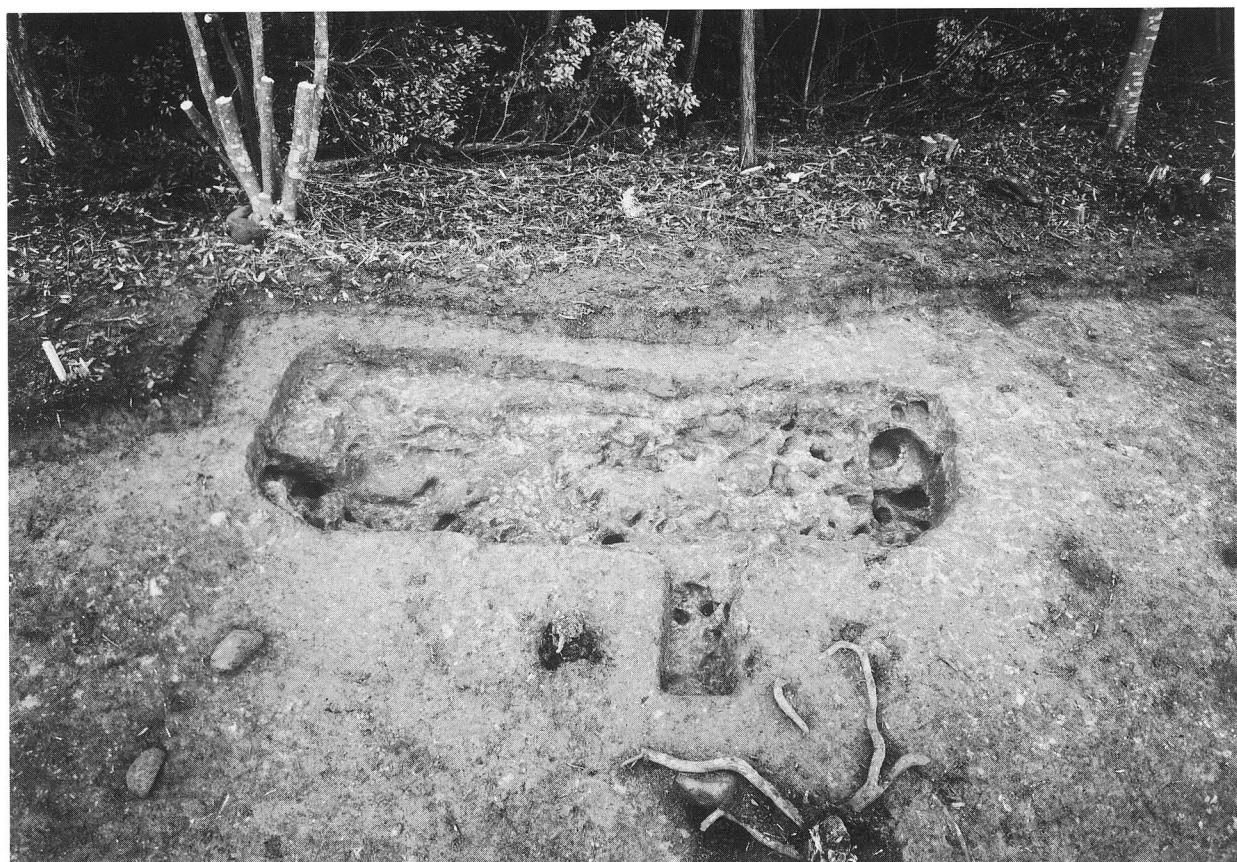


同 土層堆積状況

図版10 大谷Ⅱ遺跡



大谷Ⅱ遺跡 2号墳

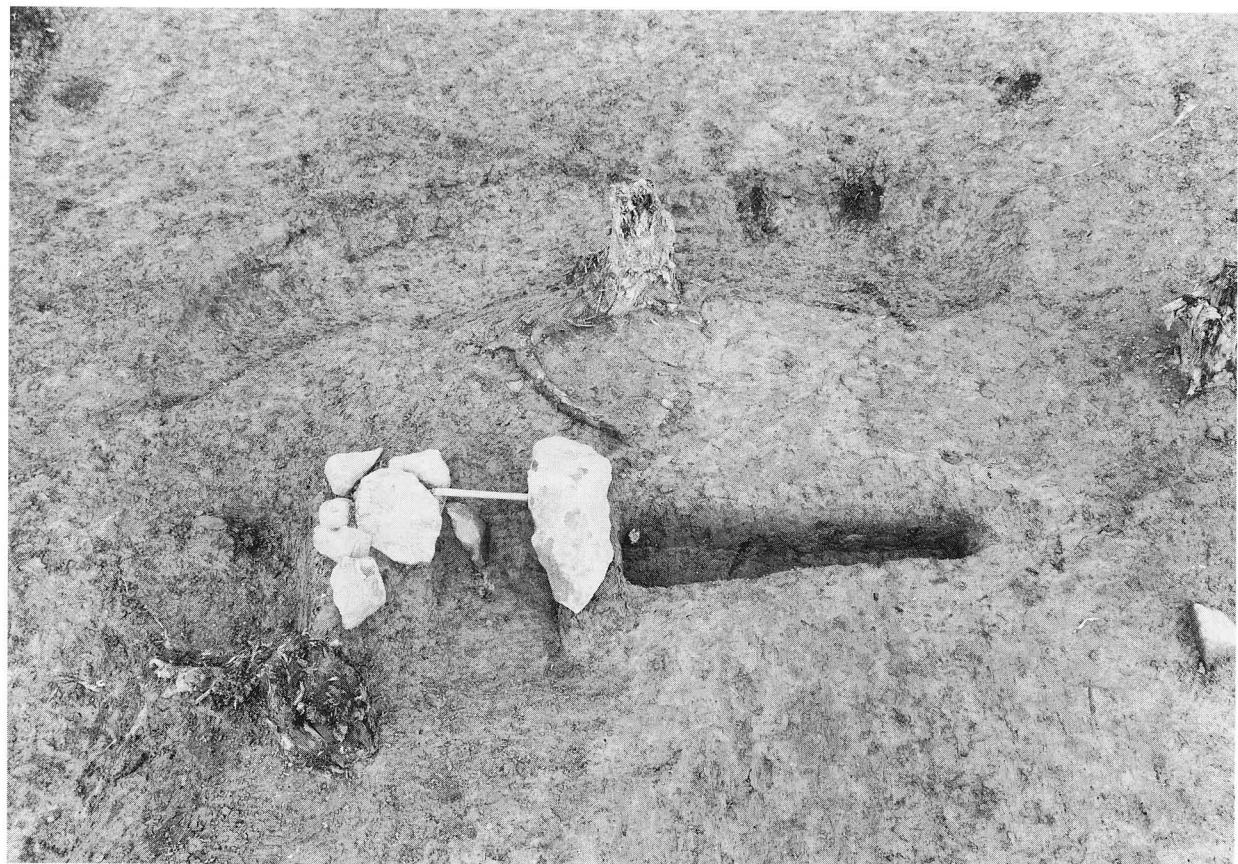


同 主体部

図版11 大谷II遺跡



同 土層堆積状況



大谷II遺跡 4号墳

図版12 大谷Ⅱ遺跡



大谷Ⅱ遺跡 窯跡



大谷Ⅱ遺跡 1号窯跡

図版13 大谷Ⅱ遺跡



同 (焚口から)



同 床面の状況

図版14 大谷Ⅱ遺跡



大谷Ⅱ遺跡 1号窯跡 土層堆積状況



大谷Ⅱ遺跡 1号 窯跡煙道



大谷Ⅱ遺跡 2号窯跡